

令和5年度

研 究 紀 要

第22集

調 査 研 究 部
生 徒 指 導 委 員 会
教 育 改 革 委 員 会
学 力 向 上 推 進 委 員 会

 沖縄県小・中学校長会

発刊にあたって

沖縄県小学校長会

会長 宮 國 義 人

沖縄県中学校長会

会長 與那覇 正 樹

令和5年度も沖縄県小・中学校長会研究大会の日に各部、各委員会が、調査・研究した成果を「研究紀要第22集」として発刊することを会員と共に喜びたいと思います。

本紀要には、次の内容がまとめられています。

調 査 研 究 部

「自立した学習者の育成について」～各学校での取り組みの工夫～

生徒指導委員会

メインテーマ：

「魅力ある学校づくり」の推進

サブテーマ

「チーム学校」としての機能する組織体制づくり

教育 改 革 委 員 会

小学校：「創意工夫を生かした特色のある教育活動展開について

～ウェルビーイングの視点を意識して～

中学校：部活動の適正化について ～「働き方改革」への取り組み～

学 力 向 上 推 進 委 員 会

学力向上推進の実践的な取組

小学校編

国 頭 地 区（本部町立小中一貫教育校上本部学園） 中 頭 地 区（嘉手納町立嘉手納小学校）

那 覇 地 区（那覇市立城西小学校）

島 尻 地 区（南風原町立津嘉山小学校）

宮 古 地 区（多良間村立多良間小学校）

八 重 山 地 区（与那国町立比川小学校）

中学校編

国 頭 地 区（宜野座村立宜野座中学校）

中 頭 地 区（恩納村立うんな中学校）

那 覇 地 区（那覇市立真和志中学校）

島 尻 地 区（八重瀬町立具志頭中学校）

宮 古 地 区（多良間村立多良間中学校）

八 重 山 地 区（竹富町立大原中学校）

この紀要が、多くの会員に活用され、各学校の課題解決に寄与されることを願っております。

本紀要発刊にご協力いただきました各部、各委員会の委員、調査実施校、そして各学校の特色ある取組をご紹介いただきました会員の皆様に心より御礼申し上げます。

総 目 次

調 査 研 究 部

「自立した学習者の育成について」
～各学校での取り組みの工夫～

……………調査研究部…………… 1

生徒指導委員会

メインテーマ：

「魅力ある学校づくり」の推進

サブテーマ

「チーム学校」としての機能する組織体制づくり

……………生徒指導委員会……………25

教育改革委員会

小学校：「創意工夫を生かした特色のある教育活動展開について」
～ウェルビーイングの視点を意識して～

中学校：部活動の適正化について

～「働き方改革」への取り組み～

……………教育改革委員会……………47

学力向上推進委員会

学力向上推進の実践的な取組

……………学力向上推進委員会……………69

調査研究部

「自立した学習者の育成について」 ～各学校での取り組みの工夫～

(小学校・中学校)

I	はじめに.....	1
II	調査の目的.....	2
III	調査の概要（小中共通質問項目）.....	2
IV	調査結果及び考察.....	2
V	まとめ.....	23

調査研究部

◎は部長

	小学校			中学校	
	氏名	所属校		氏名	所属校
学 校	渡 口 美智代	瀬 底 小	中 学 校	根路銘 国 哉	本 部 中
	上 原 秀 樹	室 川 小		宮 城 秀 輝	古 堅 中
	◎儀 間 実 子	金 城 小		◎金 城 光 明	仲井真中
	平 良 全	潮 平 小		徳 元 清 政	知 念 中
	根 間 正 人	城 辺 小		垣 花 秀 明	城 東 中
	與世山 操	大 本 小		入嵩西 清 幸	名 蔵 中

テーマ:「自立した学習者の育成について」 ～各学校での取り組みの工夫～

I はじめに

2021年（令和3年）1月中央教育審議会の答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』において「個別最適な学び」が示された。

国際紛争や未知のウイルスの感染拡大、地球温暖化など、「予測困難な時代」を生きていくことになるこれからの子供達には、自ら課題を発見し、仲間と力を合わせて、主体的に解決へ向かっていく力が必要である。

これまで日本の学校で中心的に行われてきた「一斉講義型」の授業は、「与えられた課題を正確に解く」ことが重視された工業社会（Society3.0）においては有効であったが、そうした学びだけではこれからの「予測困難な時代」を乗り切るとはできないと言われている。

また、「Society5.0（超スマート社会）」を生き抜く力を子供達に育てていくには、これまでの学校教育の在り方を抜本的に変えていく必要がある。その概念として示されたのが「個別最適な学び」である。

さらに、日本では新型コロナウイルスの感染拡大により、全国の学校が一斉に休校となる事態を受けて、国は児童生徒に1人1台ずつ端末を配備する「GIGAスクール構想」を前倒しし、2021年3月頃にはほぼ全国で整備が完了した。

1人1台端末が整備されたことで、例えばAI型ドリルを使って子供達一人一人が習熟度などに応じた学び（指導の個別化）をしたり、インターネット検索などを活用しながら自分の興味関心に基づいた探究学習を進めたり（学習の個性化）することができる環境が整った。

つまり、コロナ禍を機に、全国のほぼ全ての小中学校で「個別最適な学び」を推進できる環境が整ったのである。中央教育審議会の答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に推進していくことを学校現場にも求めている。そうすることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげようとしているのである。

こうした学びを実現していくためには、各学校や教員がこの概念を正しく理解し、ICTを積極的に活用するなどして、できるところから実施していく姿勢が求められている。

沖縄県教育委員会では、これらを踏まえ2021年「令和3年度 沖縄県学力向上推進本部会議からの提言」として7つの提言がなされた。2022年には、「7つの提言」を実現するための2つの「重点事項」が位置づけられたが、そのうちの重点1として『自立した学習者の育成』を推進している。

そこで今年度は、沖縄県内公立小中学校の「自立した学習者の育成について」の各学校での取り組みの工夫について調査し、その結果から考察等を行うこととした。

本調査が、県が推進している「自立した学習者の育成」（＝「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な推進、「主体的・対話的で深い学び」の実現）に向けた参考資料として活用されることを期待する。

II 調査の目的

本調査は、「自立した学習者の育成」について各学校の取組の現状、工夫や課題についてまとめ、その対応策を県校長会へ提案することにより、各学校の「自立した学習者の育成」に向けた推進に資することを目的に行う。

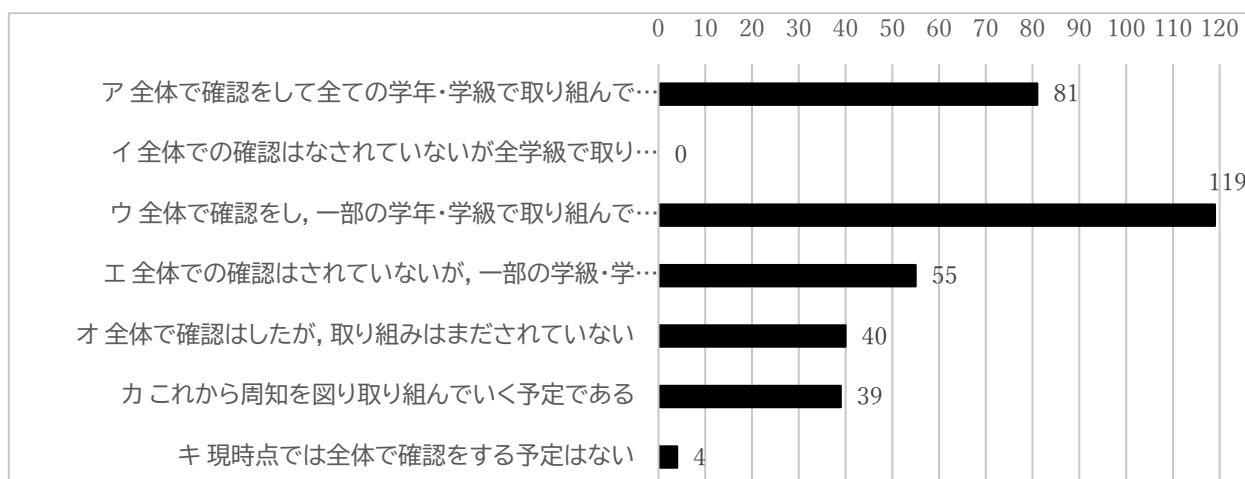
III 調査の概要(小中共通質問項目)

- 1 調査項目・・・18項目(選択肢、自由記述)
- 2 調査期間・・・令和5年7月12日(水)～令和5年7月20日(木)
- 3 回答校数・・・359校
- 4 回答率・・・99.2%

IV 調査結果及び考察

【「個別最適な学び」について】

1. 貴校では、学校全体で「指導の個別化」を図っていますか。



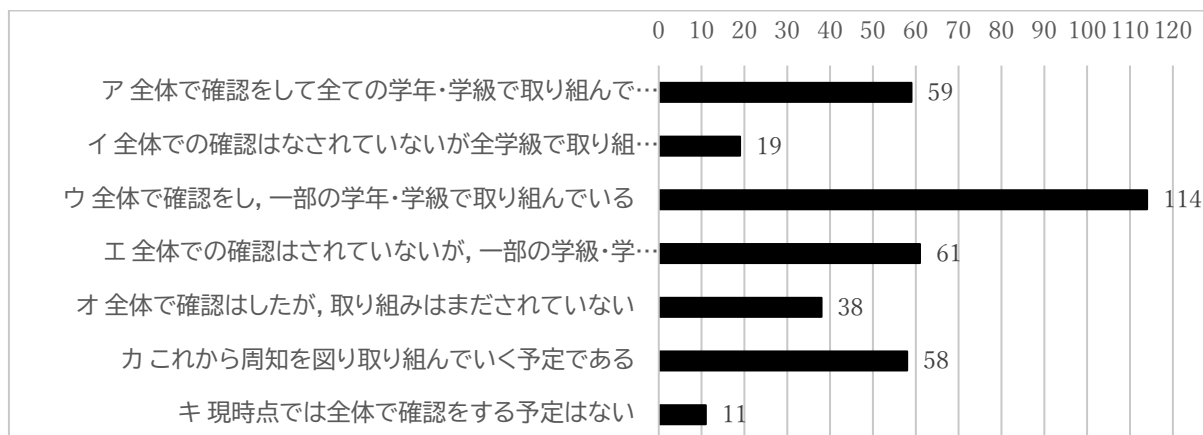
<結果概要>

- 指導の個別化について「全体で確認をし、一部の学年・学級で取り組んでいる」33.1% (119校)
- 「全体で確認をして全ての学年・学級で取り組んでいる」22.6% (81校)
- 「全体で確認する予定はない」1.1% (4校)

<考察>

- 「指導の個別化」について約7割の学校で全体での確認がなされていることが窺える。しかし一方確認する予定がない学校が4校、今後周知予定の学校が94校となっている。また、学校全体で取り組んでいるところは全体の約3割となっており全体的に指導の個別化が進んでいるとは言い難い結果である。Society5.0の時代に向けて、本県では自立した学習者の育成を重点事項に掲げ、「個別最適な学び」を推進している。今後「個別最適な学び」において「指導の個別化」と「学習の個別化」について、整理し周知していく必要があると考える。

2. 貴校では、学校全体で「学習の個性化」を図っていますか。



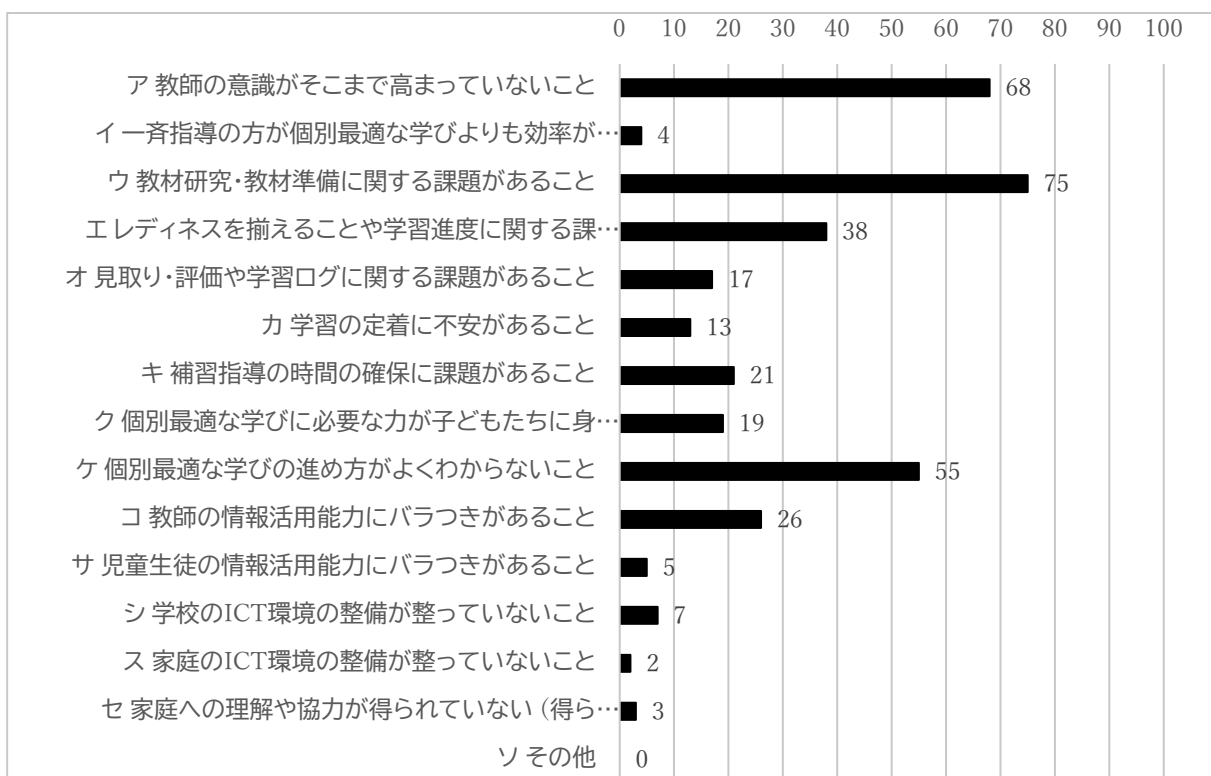
<結果概要>

- 「学習の個別化」について「全体で確認をし、一部の学年・学級で取り組んでいる」31.8%（114校）。
- 「全体で確認をして全ての学年・学級で取り組んでいる」16.4%（59校）。
- 現時点では全体で確認する予定はない 3.1%（11校）。

<考察>

- 学校全体で確認がなされている学校は58%。ほとんどの学校が一部の学年・学級では取り組んでいるが、全体での取組には至っていない。設問1同様「個別最適な学び」を推進するにあたって「指導の個別化」と「学習の個別化」について整理し周知していく必要があると考える。

3. 「個別最適な学び」を推進していく上で課題となっていることは何だと思いませんか。



<「その他」の自由記述>

- 全教職員の方向性を揃えること、取り組むための準備の時間確保など。
- 教師の意識（変化に対応できていない）。
- 組織として対応できる環境の不備に加え、教師の資質・能力がそこまで育っていない。
- 取り組めていないのではなく、「個別最適な学び」の捉え方を全職員でまだ揃えていない。個々人では、授業改善等で取り組んでいると思われる。

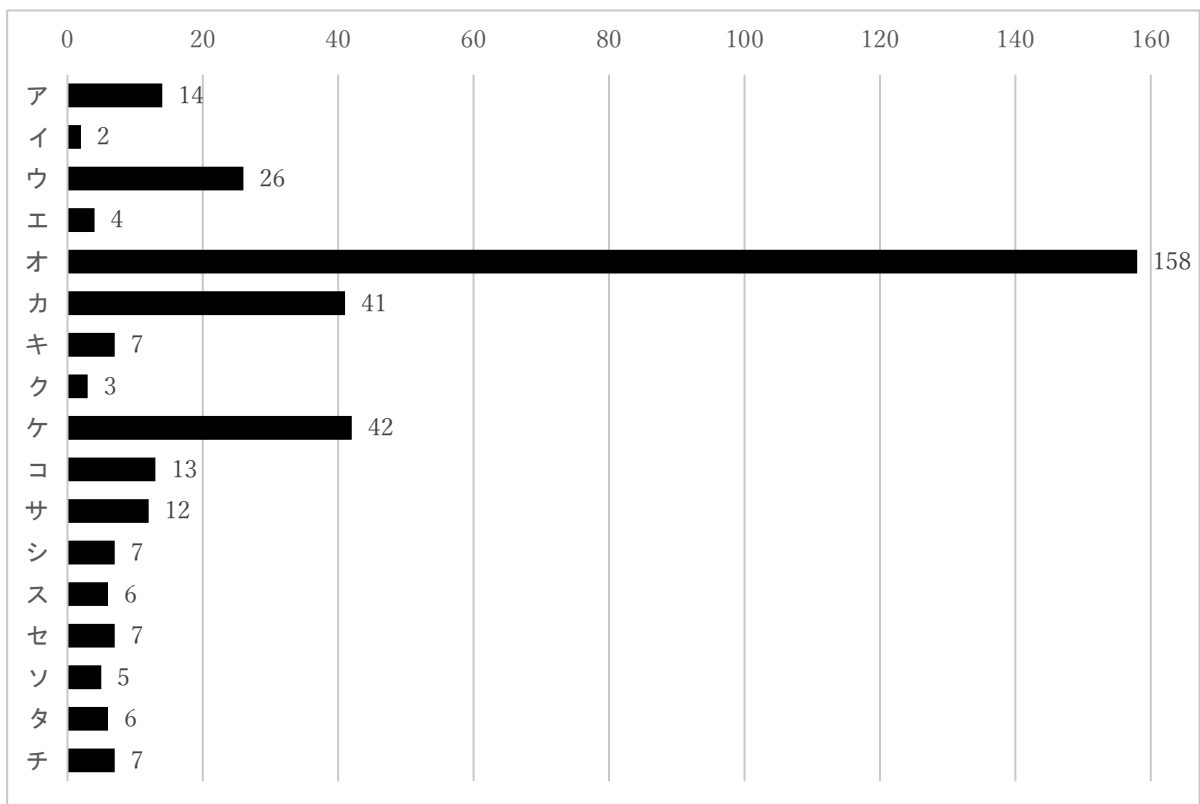
<結果概要>

- 「個別最適な学び」についての課題として「教材研究や準備に関する課題があること」が20.9%（75校）。
- 「教師の意識がそこまで高まっていない」が18.9%（68校）「進め方がよくわからない」15.3%（55校）。
- 「一斉指導の方が個別最適な学びより効果的」が1.1%（4校）。

<考察>

- 「個別最適な学び」についての進め方や、職員の意識等が課題としてあげられることから、その必要性や意義等も含め校内研修等において全職員で共通確認する必要性がある。それに伴い、教師個々の授業研究や実践事例の共有を図るなど、各学校における研修の時間や教材研究等準備の時間の確保も含め検討していかなければならないと思われる。

4. 「個別最適な学び」を推進していく上で重要なことは何だと思えますか。



ア 学校の ICT 環境の整備に関すること	イ 家庭の ICT 環境の整備に関すること
ウ 教師の情報活用能力に関すること	エ 児童生徒の情報活用能力に関すること
オ 教師の個別最適な学びの捉え方に関すること	
カ 学びに向かう力・学習意欲に関すること	
キ 「か・ふ・や・み」の視点を意識した児童生徒のキャリア形成を育む取り組みに関すること	
ク カリキュラム・マネジメントに関すること	ケ 教材研究・教材準備に関すること
コ レディネスを揃えることや学習進度に関すること	
サ 見取り・評価や学習ログに関すること	シ 学習の定着に関すること
ス 補習指導の時間の確保に関すること	
セ 保護者の理解・家庭との連携に関すること	ソ 望ましい学習の仕方の共有に関すること
タ 「自由進度学習」の推進に関すること	チ その他

<「その他」の自由記述>

- 個別最適な学びの具体や見通しに関して、子供自身の理解を十分に図ること。
- 組織として対応できる環境整備と、教師の資質・能力の向上。
- 教職員の数や、保護者の理解と連携 こどもの主体性尊重と教師の指導力、学級経営力や学習規律の徹底。
- 対応する職員数を増やす、あるいはゆとりある教育課程の編成。
- 職員定数増、学習指導要領の内容の削減。

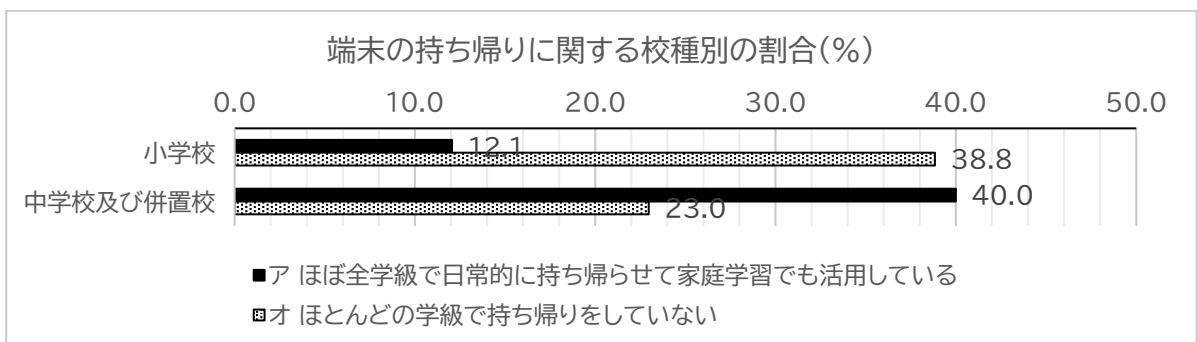
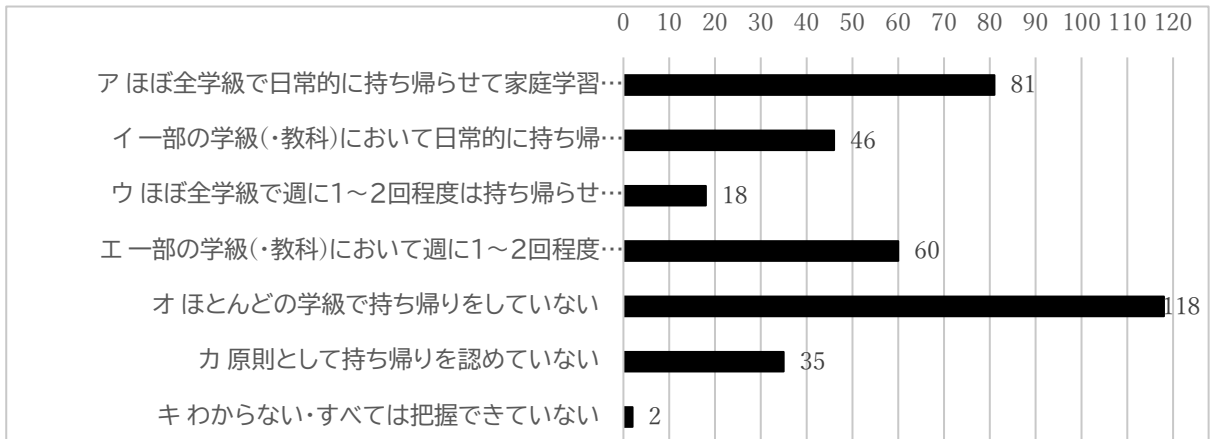
<結果概要>

- 「個別最適な学び」で重要なことは「教師の捉え方に関すること」が44.0%（158校）。
- 「教材研究・教材準備に関すること」が11.7%（42校）、「学びに向かう力・学習意欲に関すること」が11.4%（41校）。
- ICT関係では、「教師の情報活用能力に関すること」が7.2%（26校）、「学校のICT環境の整備に関すること」が3.9%（14校）。

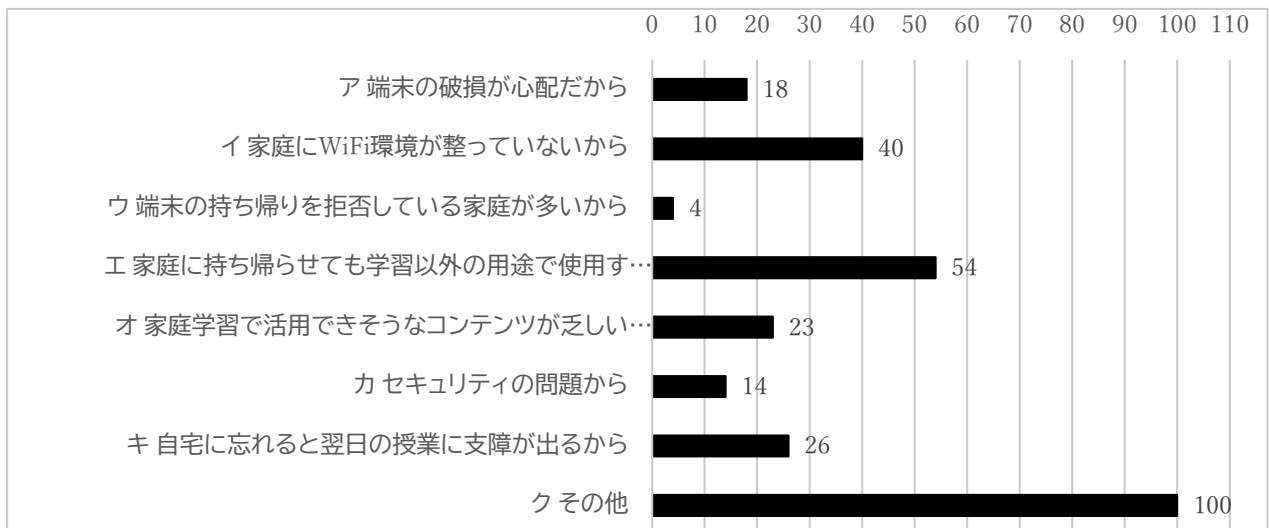
<考察>

- 「個別最適な学び」を推進する上で教師の捉え方が最も重要だと考える学校は全体の48%で約半数を占めている。校内研修の充実に努め組織的に取り組む必要がある。
- 個々の習熟に応じた活用やインターネット等を活用しながら興味関心に基づいた探究学習を進める等してICTを積極的に活用する事も有効だと考える。

5. 「個別最適な学び」では一人1台端末の活用は有効ですが、あなたの学校では児童生徒に端末を持ち帰らせて家庭学習でも活用させていますか。



※ 上記の質問で、「ア ほぼ全学級で日常的に持ち帰らせて家庭学習でも活用している」以外の回答をした学校は、持ち帰りができない理由を教えてください。



<「その他」の自由記述>

○宿題や家庭学習で端末を活用してほしいという教師の計画がある時や、児童が活用して学習したいという計画をもっている時に持ち帰りをさせている。

○前年度は、夏休みのみ、端末を持ち帰らせていたとの事で、今年度は、一部の学年・一部の教科から段階的に持ち帰りを進めている。夏休みから、全学年で持ち帰らせ、9月からは日常的な持ち帰りに切り替える。

- 授業と家庭学習の連動の中で、端末機を想定した家庭学習の取組については学校全体での取り組みがまだ整っていない。
- 低学年では、活用のスキルが追い付いていないため持ち帰りはさせていない。
- 持ち帰りのルールの整備や保護者同意書等が未回収のため。
- 主な理由は、端末が重たいので児童の負担が大きいから。また、端末等の配付・回収に時間がかかりすぎるから。
- 端末が不足していたため。
- 低学年の家庭での活用には、必要性がさほど無いとともに、保護者が付き添って行う必要があり難しい家庭もあるから。

【端末の持ち帰り状況について】

- 「オ ほとんどの学級で持ち帰りをしていない」が32.9%（118校）で最も多く、「ア ほぼ全学級で日常的に持ち帰らせて家庭学習でも活用している」が22.6%（81校）となっている。「エ 一部の学級（・教科）において週に1～2回程度は持ち帰らせて家庭学習でも活用している」が続いている。

【持ち帰らせていない理由】

- 「エ 家庭に持ち帰らせても学習以外の用途で使用する恐れがあるから」が最も多く、15.0%（54校）である。
- 「イ 家庭にWiFi環境が整っていないから」が11.1%（40校）となっている

<考察>

【端末の持ち帰り状況について】

- アとオについて、校種別割合を参照すると、全中学校併置校においては40%が「ア」と回答し、逆に全小学校では、38.8%が「オ」と回答している。これより、小学校より中学校において日常的な持ち帰りによる家庭学習の活用が定着しつつあると考える。また、小学校では、38.8%で持ち帰りをしていないが、小学校児童の発達段階や教科学習内容と家庭学習との関連によるものと思われる。他方、「イ」、「エ」から、一部の学級（教科）で、毎日もしくは週1～2回程度持ち帰らせているという回答も小中併せて29.5%（106校）あり、持ち帰りについて弾力的に対応している学校も多いことがわかる。

【持ち帰らせていない理由】

- 「エ」については、持ち帰った際の学習以外で使うことへの懸念を示している学校は15.0%（54校）存在する。持ち帰った際の適切な活用に向けた指導のあり方について、学校間での情報共有等は有効だと考える。
- 「イ」については、持ち帰りさせていない理由の一割がWiFi等の家庭環境という学校も11.1%（40校）存在する。行政との連携によるそのようなご家庭への支援も必要であると考えられる。
- 持ち帰りをしていないその他の理由については、主な理由は上記のとおりであるが、夏休み以降から持ち帰りを試みたいという記述も多かった。これについては、市町村によっては、教育委員会により持ち帰りを夏休み以降とする等と指示されているためという回答もあった。
- 低学年での活用については、活用スキル等への課題等を挙げている回答も複数ある。

「個別最適な学び」の取組で、他校の参考になるような事例があれば教えてください。(自由記述)

<「個別最適な学びの取組」の自由記述>

○リコーダーのテストを校内の自分が一番落ちつく場所を選んで行う。タブレットを使って録画し、一番よく吹けた回を自分で選んで、教師へ送信する。

○練習問題が終わるとeライブ・学びポケットでそれぞれが進み、学習の定着を図っている。

○学習アプリの活用

- ・単元内自由進度学習：学校全体としての取組、児童の主体的に学ぶ姿や、自然と級友と対話を繰り返しながら学ぶ姿が多く見られる。
- ・市の方でweb上で活用できるタブレットドリルが導入されたので、今後はそれも活用しながら「個別最適な学び」を進めていきたいと考えている。
- ・タブレット端末を活用し「ロイロノート」に提出し、グループ内で共有するなどICT機器の有効活用を図っている。
- ・ロイロノートを活用することで、自分の考えや事実をわかりやすく伝えることができる生徒は増えた。
- ・スラドリルや、スタディーサプリ等のアプリを委員会主導で、市の全生徒が活用できるようになっていること。
- ・総合的な学習の時間をプロジェクト型にし、個人のテーマで探究する学習の個性化を校内研究で推進している。
- ・数学において「自由進度学習」を全学年で取り組んでいます。4月当初は授業の進み方に戸惑いはありましたが、現在は仲間に相談したり、先生に相談したりするなど、以前より積極的になっています。ただし、保護者の理解がまだまだ進んでおらず、学校評価においても、数学の授業について保護者から意見等が多いため、丁寧に説明をしていきながら理解を求めていく予定です。

<結果概要>

○小中と区別なく、どの学校も現在取り組みが「個別最適な学びの取組」となっている意識高揚している事が窺える。

授業の中でも、「ロイロノート」や「クラスルーム」を活用し、個々の意見や考えを集約し個人発表・グループ内発表に取り組んでいる。

○ICT機器を活用し、更にAI機能を取り入れた「個別最適な学習」を導入している学校が多い。

<考察>

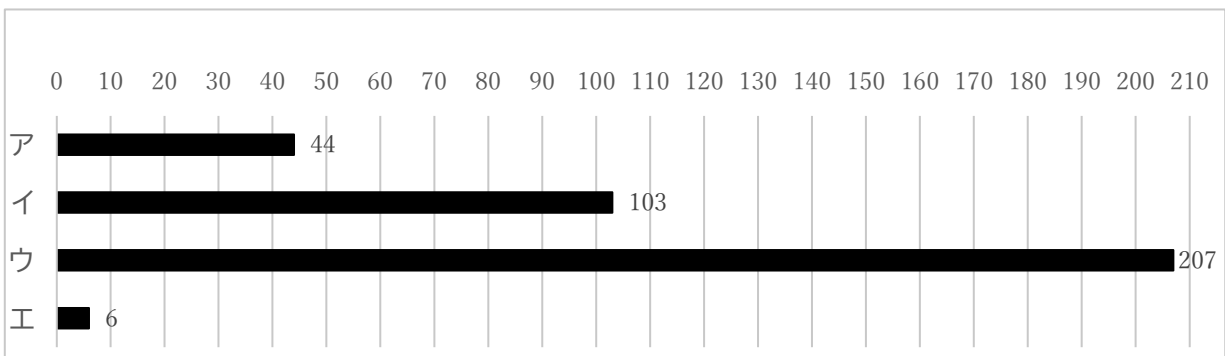
○ICTがコロナ禍で急速にすすみ、児童生徒は個別最適な学習を通して学ぶ(活動する)機会が多くなっている。学習効果も表に表れやすいが、感情等表現がしにくい状況を今後の課題としていかなければならない。

○ICT機器の活用について、年間指導のどのような場面で、どのように活用していくか見通しをもって進めることや、学習の見取りや評価方法について検討するなど、より丁寧な教材研究が必要である。

【「自学自習」の取組について】

6. 自学自習の定義に関しては以下のような様々な考え方があります。あなたの学校の取り組むべき「自学自習」の考え方に最も近いものを1つだけ選んで下さい。

- ア 「自学自習」とは自発的に動いた時にもっとも大きな成果を出すという特質があり、自学自習こそ真の実力が付く方法だと考える。
- イ 学習者が自己管理を達成することは容易ではなく、そこにいたるまでは教師によるある種の指導が必要。子どもたちははじめから「自立」しているわけではないので他者とのコミュニケーションのなかではじめて「自立」を学ばなければならないという側面がある。
- ウ 「自学自習」とは自発的なモチベーションが必要である。学校で自学自習力を高めるためには、これまでの学校での学びの中に、児童生徒が主体的に考え、トライ&エラーをしたりする過程において自発的な学びに繋がることだと考える。
- エ その他



<「その他」の自由記述>

- 授業における指導を通して身に付けた「問い方を含む学び方」を駆使して、対象に働きかける学び。
- 授業と連動した家庭学習を推進するとともに、学習した内容を児童自身がふり返り明日の学習に繋がる感想を書かせる等、自己評価力を身につけさせること。
- 学年の発達段階によって違いがあり、統一は難しい。
- キャリア教育の充実。
何のために学習するのか、日常の学習と社会とのつながりを理解させていくことで、学習に対するモチベーションが上がると考えます。
- 学力と家庭の経済力、教育力には明らかな相関関係が明らかにされていますが、県、市独自の経済政策と教育行政の連携は大きいと思います。それと沖縄県はまだまだ部活の比重が大きすぎて、子供と教員負担への負担が大きく、学習に向き合えない環境因子が多いと思います。
- 自学力のためには、自分で計画を立て実践し、評価分析する学習のPDCAの力が必要である。
自分で学習状況を把握し、計画をたて実践する自己調整力を育成する必要がある。

<結果概要>

- 「ウ「自学自習」とは自発的なモチベーションが必要である。…生徒が主体的に考え、トライ&エラーをしたりする過程において自発的な学びに繋がることだと考える。」と回答した学校が最

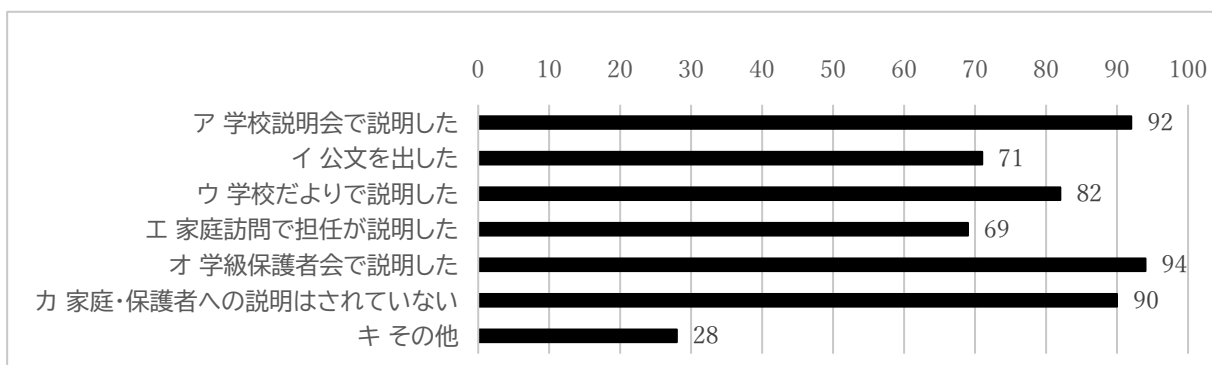
も多く 58.7% (207 校)、続いて「イ 学習者が自己管理を達成することは容易ではなく、…他者とのコミュニケーションのなかではじめて「自立」を学ばなければならないという側面がある。」28.7% (103 校)、そして、「ア 「自学自習」とは自発的に動いた時にもっとも大きな成果を出すという特質があり、自学自習こそ真の実力が付く方法だと考える。」12.3% (44 校)、その他 1.7% (6 校) となっている。

<考察>

○アイウの「自学自習」に対する考え方の定義は異なっており、エその他の6校においても異なっている。「自学自習」をどのように捉えるかで、校内での授業の取り組み方や家庭での学習の組み合せ方が変わってくる。

本県義務教育課作成の「自学自習ガイド」の内容を踏まえ、校内で「自学自習」に対する捉え方の共通確認を行い、自校の児童生徒に育成する力や自校の「自学自習」の在り方を議論し、明確にする必要があると考える。

7. あなたの学校の「自学自習」についての家庭・保護者への説明の状況を教えてください。(複数選択)



<「その他」の自由記述>

- 学年だより、学級だよりなどで、家庭学習の進め方などを説明。
- 「自学自習」という表現は用いず、校内で取り組んでいる内容についての説明を行った。
- リーフレットを作成し説明した。
- 三者面談資料として配布し取り組みについて説明している。
- 学校から取組についての公文配布。
- 学校 HP に「自学自習ガイド」を UP している。
- 各教科において宿題のやり方等を通して自学自習の重要性を指導している。
- 自学自習の方法、けてぶれの考え方を、ショートムービーにして保護者へも配信している。
- がんばりノートへの取り組みの一つにリレーノートを通して、他の子の取り組みを学ばせている。
- 5・6年生から週の時間割を示し、各自で家庭学習の予定を組み立てる取り組みをしている。順次下学年に下ろして進めていく予定である。
- 年度当初の PTA 総会で説明をしました。その後は、学校ホームページを活用し「自学自習」の様子や内容について掲載をしながら説明をしています。

- これまでの「家庭学習帳」を廃止し、「自律学習への習慣化と自己調整能力の向上」を目的に生徒手帳の導入を予定（2学期から実施、夏休みに職員研修）その説明を今後行う予定のため。
- 生徒総会で生徒から提案があり、職員会議で議論し今年の夏休みから端末を家庭に持ち帰り取り組みを行う予定です。そのためのルールづくりを作成中です。
- 夏期休業中に職員研修をする予定で、その後で授業参観等を活用して保護者へ説明を行っていく予定である。

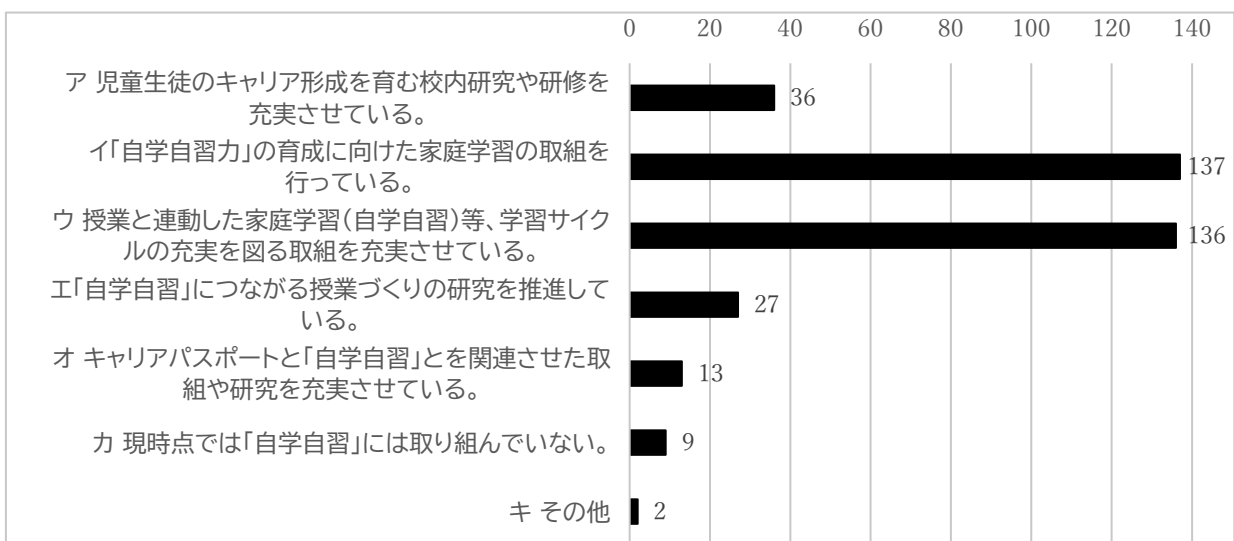
<結果概要>

- 「自学自習」について「カ 家庭・保護者への説明はされていない」と回答した学校は25.1%（90校）で、それ以外を選択した学校74.9%（270校）の学校は、何らかの方法を使って家庭・保護者への説明を行っている。
- 「キ その他」を選択した学校は7.8%（28校）も様々な方法で説明や配信、周知を図っているあるいは説明や周知をしていく予定であることが確認できた。

<考察>

- 学校の「自学自習」の取組について、ほとんどの学校（約75%）において、紙媒体（公文、学校だより、学年だより、リーフレット、面談資料、説明会資料等）や電子媒体（学校HPにUP、ショートムービー）を使用し、保護者会・家庭訪問・保護者面談・授業参観日、PTA総会等の時間を活用し、家庭や保護者への説明を行っていることがわかった。
- 「自学自習」は、「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」の重点Ⅰの取組事項である。学校の授業を通して取り組んでいく場面と学校以外の家庭で取り組んでいく場面があるため、当然、家庭・保護者へ目的や方法、期間等を周知し、協力を得る必要がある。「自学自習」を充実させる学習サイクルを確立させるためには、校内の職員による共通確認と実践を踏まえ、家庭・保護者への説明も工夫し、丁寧に行っていく必要があると考える。

8. 本県義務教育課が作成した「自学自習ガイド」で紹介されている取組で、あなたの学校で最も力を入れて取り組んでいることについて教えてください。



<「その他」の自由記述>

○手帳の活用。

○自主的・計画的に家庭学習に取り組めるような取組を実践中。

<結果概要>

○「イ 自学自習力の育成に向けた家庭学習の取組を行っている」が最も多く、38.1%（137校）の学校が回答。

次点は、ほぼ同率の37.8%（136校）で「ウ 授業と連動した家庭学習（自学自習）等、学習サイクルの充実を図る取組を充実させている」となった。大部分の学校において「イ」あるいは「ウ」と回答している。（75.9%：273校）

以下、「ア 児童生徒のキャリア形成を育む校内研究や研修を充実させている」が10%（36校）、「エ 自学自習につながる授業づくりの研究を推進している」が8%（27校）と続く。

○現時点では、「自学自習」には取り組んでいないと9校の回答があった。

<考察>

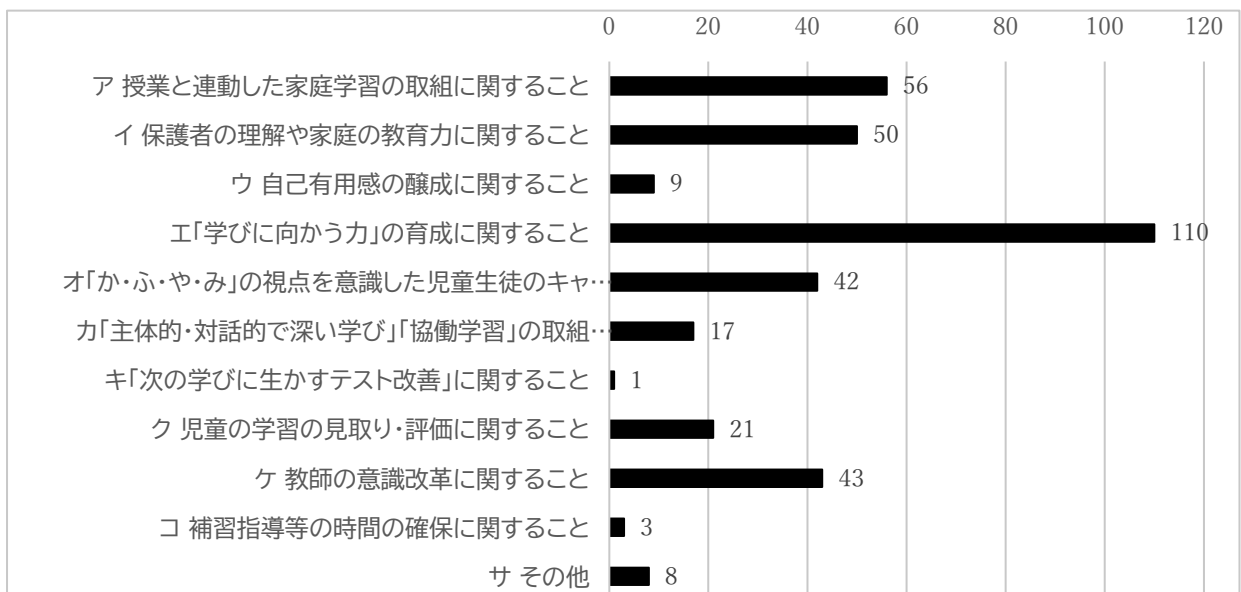
○多くの学校において、「自学自習力」の向上には、まずは「与える学習（宿題）」を中心に進め、段階的にステップアップしていくことが大切であると捉え、授業と連動した家庭学習の定着に取り組んでいる。

最終的には、児童生徒自らが学習することの意義について考え、将来の目標達成に向け「自立した学習者」になるためには、教師自身が、自学自習力の向上につながる授業づくりについて校内研等でさらなる研修を深め、授業力の向上に努めていく必要がある。

○各学校で、家庭学習が学校から与えられるだけの受動的な学習から、キャリア形成の視点も踏まえ、児童生徒が主体的に考え計画し実行する自律的な学習への転換を目指し実践が行われていることが窺える。

○今後も、県のポータルサイトや近隣校との情報交換等を通して好事例を自校の実情に合わせて工夫しながら実践を深めていきたい。

9. 「自学自習」への取組で課題となっていることは何だと思いませんか。



<「その他」の自由記述>

○それに至るレディネスや基礎的・基本的事項の差。

○けてぶれ（計画、テスト、分析、練習）を意識した自学自習への取組を推奨。

○単元や授業の中にどのように取り入れるか、具体的なイメージを持って計画をたてること。

○様々な学びを保障する「ゆとり」が教師にも、保護者にも、子供達にも必要だと感じます。

児童が本当に学びたいこと（ある子は昆虫について、ある子はプログラミングについて等）が必ずしも授業と連動したものではないことが見られる。昆虫に興味を持つ中学年の時期は、昆虫探しや観察に没頭することがある。

授業がきっかけになることもあるが、単元が終了したから観察（学び）が終わるわけではなく、継続して学ぶ場合が多い。それを保障できる「ゆとり」が必要だと感じます。必ずしも点数等に結び付くわけではないが、長い目で見たときに、きっと学ぶ意欲や粘り強さ等は育つと思います。

好きなことに没頭する時間→いわゆる「はかせちゃん」を育む土壌とゆとりがあってもよいのではないかと思います。

○本校の人々の割合は 32%を超え、経験の浅い教諭も対数いることから学級経営の基本的なことから丁寧に指導しなければならない現状がある。様々な研究が進み内容面が充実することに教師の確保、資質・能力が追いついていない。

AIにまかせることは任せるという流れで協働的な学びが確立できるとは到底思えない。

誰がそれを担うのか、担える大学教育が為されているのか改めて問う必要がある。

○様々な学びを保障する「ゆとり」が教師にも、保護者にも、子供達にも必要だと感じます。

○様々な内容面が充実することに経験の浅い教師が多くなり、教師の確保、資質・能力が追いついていない。

<結果概要>

○「エ 学びに向かう力の育成」に関することが最も多く 30.6%（110校）の学校が回答。

次点は、「ア 授業と連動した家庭学習の取組に関すること」が 15.6%（56校）、その次に「イ 保護者の理解や家庭の教育力に関すること」が 13.9%（50校）、続いて「ケ 教師の意識改革に関すること」11.9%（43校）、「オ 『か・ふ・や・み』の視点を意識した児童生徒のキャリア形成を育む取組に関すること」11.7%（42校）となっている。

<考察>

○「学びに向かう力」＝「主体的に学ぶ力」と捉えた場合、児童生徒に対しいかに「学ぶこと」を「自分ごと」として考えさせ、興味・関心を持たせられるか、また見通しを持って粘り強く取り組むこと・自己の学習を振り返って次に繋げる学びに取り組ませられるか、そのような力を身に付けさせていくことへの難しさがあると考えられる。

「自学自習力」の向上には、家庭学習と連動させた日々の授業改善が必要であることを教師自身が自覚し、併せて家庭や地域に対しては、学校での取組に関する内容等の周知、家庭や地域で出来ることへの協力依頼も併せて、お互いが目指す方向を共有確認しながら、一緒になって取り組んでいく必要がある。

○「学びに向かう力」には「将来の夢を学習に繋げること」「学習内容に興味関心を持つこと」「見通しを持って粘り強く取り組む意欲を持つこと」「自己の状況(メタ認知)を振り返って次に繋げる

こと」等の内容が含まれる。キャリア教育との関連を強く意識しながら「自学自習ガイド」等を有効活用して、自校の課題に即した具体的な取り組みを今後も推進していく必要がある。

10. 「自学自習」の取組で、他校の参考になるような事例があれば教えてください。(自由記述)

<「自学自習の取組」の自由記述>

- 自学力を高め「問い」を持ちながら学び続ける人材を育てることは重要だが、塾などに通ってる児童が多い本校では、家庭学習によって自学力を高める取組には力を注いでいない。
- 授業の振り返りを重視した取組みや見通しを持ち計画を立て自己調整学習能力を高めるためフォーサイトアプリを試行中。
- 昨年度までの「がんばりノート」を見直し「自学ノート」にした。取り組み方を具体的に示した。保護者へも説明の公文を出したり保護者会で説明を行った。良い例のノートを掲示した。
- 「けてぶれ」の取り組みで充実したノート(グッドノート)の展示会を授業参観など実施。自学自習のショートムービーを保護者向けに配信。
- 家庭学習を与えられる「こつこつ学習」と自ら考える「わくわく学習」に分け、自学自習につなげていく。個人の家庭学習ノートと別に1冊を共有して使う「リレーノート」を作成して活用することで、子供達とそれぞれの保護者が互いの学習の内容ややり方、保護者の関わり方などを見て学び、自学自習力の向上を図っている。

<結果概要>

- 自由記述において具体的に取り組んでいる状況(内容)が書き込まれた学校が全体で41件。その内の24件が小学校。17件が中学校(小中併置校含む)の記述があった。
- 主な参考事例として小学校では、はこれまでの「がんばりノート」を見直して「自主ノート」に切り替えた学校や、与えられる学習と自ら考える学習にわけて取り組んでいる学校があった。
- 中学校においては目標管理ノート(手帳)の活用が多く1週間の予定、日々の活動記録を明記し、振り返り、時間管理、体調管理、目標管理を行い、自己の気づきを与えている。

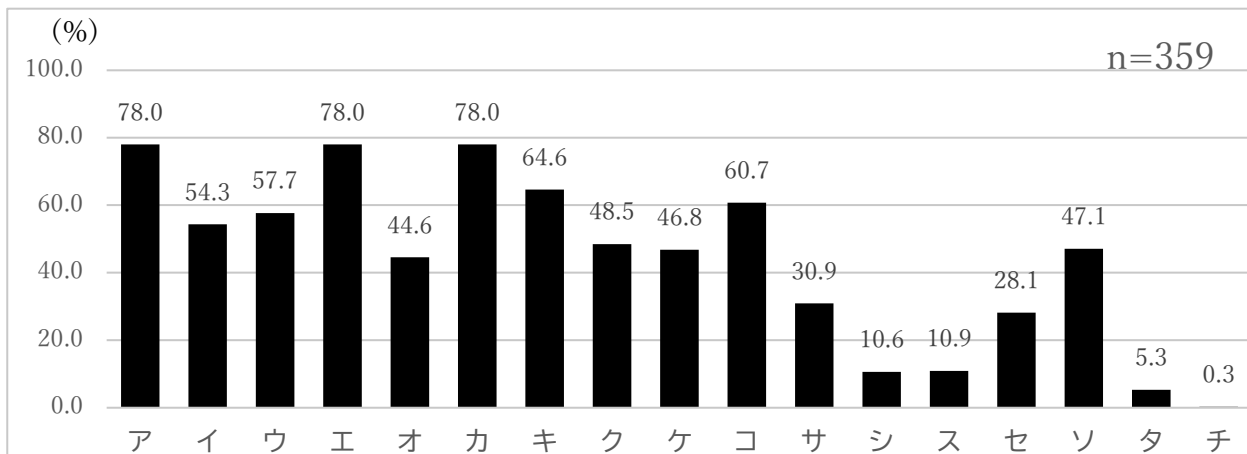
<考察>

- 校種において取り組みに差異が見られ、小学校においては家庭学習の方法や定着に向けた実践があった。中学校においては自己管理・自律に向けた記述が多く見られる。
- 小中359校中「自学自習」の具体的記載のあった学校が41校(8.8%)となった。「自学自習」の取り組みについては、キャリア教育の視点や児童生徒の自律に向けた実践が多く取り組まれる中、校種や発達段階に照らし合わせた実践が必要と考える。私見ではあるが、自学自習の定義が小中学校で捉え方が違うような気がする。

【授業改善の工夫】

12. 「授業改善の工夫」についてあなたの学校で取り組んでいることを教えてください。(複数選択)

- ア 全国学習状況調査や学力到達度調査等の各種調査の自校分析と対策に関すること
- イ 「沖縄県学力向上推進5か年 PPⅡ」の読み合わせ等, 県の施策の周知に関すること
- ウ 「わかる授業 Support Guide」や『『問い』が生まれる授業サポートガイド』等の活用に関すること
- エ 「主体的・対話的で深い学び」や「協働的な学び」を意識した授業に関すること
- オ 指導と評価の一体化を目指した授業の推進に関すること
- カ 校内研修の充実に関すること
- キ 1人1台端末等, ICT の活用に関すること
- ク 教材研究や教科会・学年会の時間の確保に関すること
- ケ 校内 OJT の推進・活用に関すること
- コ 学習規律の徹底や授業スタンダード等の揃える実践に関すること
- サ 授業と連動した家庭学習に関すること
- シ 学んだことを実生活で活用すること
- ス 授業改善リーダー等の活用に関すること
- セ 学習支援員の活用に関すること
- ソ 管理職による日々の授業観察とフィードバックに関すること
- タ 乗り入れ授業の推進に関すること
- チ その他



<「その他」の自由記述>

○5・6年生の一部教科担任制。

<結果概要>

- ア 全国学習状況調査や学力到達度調査等の各種調査の自校分析と対策に関すること、エ 「主体的・対話的で深い学び」や「協働的な学び」を意識した授業に関すること、カ 校内研修の充実に関することにおいては約80%の学校において「授業改善の取り組みに関する工夫」がなされている。
- 50%を下回る取り組みとして、ク 教材研究や教科会・学年会の時間の確保に関すること(48.5%)、ケ 校内 OJT の推進・活用に関すること(46.8%)、サ 授業と連動した家庭学習に関すること

(30.9%)、シ 学んだことを実生活で活用すること (10.6%)、ス 授業改善リーダー等の活用に関すること(10.9%)、セ 学習支援員の活用に関すること(28.1%)、タ 乗り入れ授業の推進に関すること(5.3%)等の取り組みが少なかった。

<考察>

○全国学力・学習状況調査の分析や到達度調査の活用や組織的に研修を深める研修や授業研究会は充実してきているが、それぞれの先生方の個人の教材研究や学びの時間の創出が課題となってきた。

○自由記述の「その他」の記載にあるように小学校高学年における一部教科担任制を導入することで、より子供達に向き合った授業づくりの時間の創出につながってくると思われる。

13. 「授業改善の工夫」で最も重要なことは何だと思いますか。



<「その他」の自由記述>

- 個別最適な学びへのてびき。
- 子供達の関係性を基本とし、教科書をよめる・活かせる教師の育成。
- 教材研究等の時間の確保。 ○教師の意識改革。
- 教師の意識改革と児童一人一人の見取りからの合理的配慮に基づく授業の工夫。
- 生徒の「学びに向かう姿」の共有と、それに向けた授業づくりの工夫が重要と考えている。

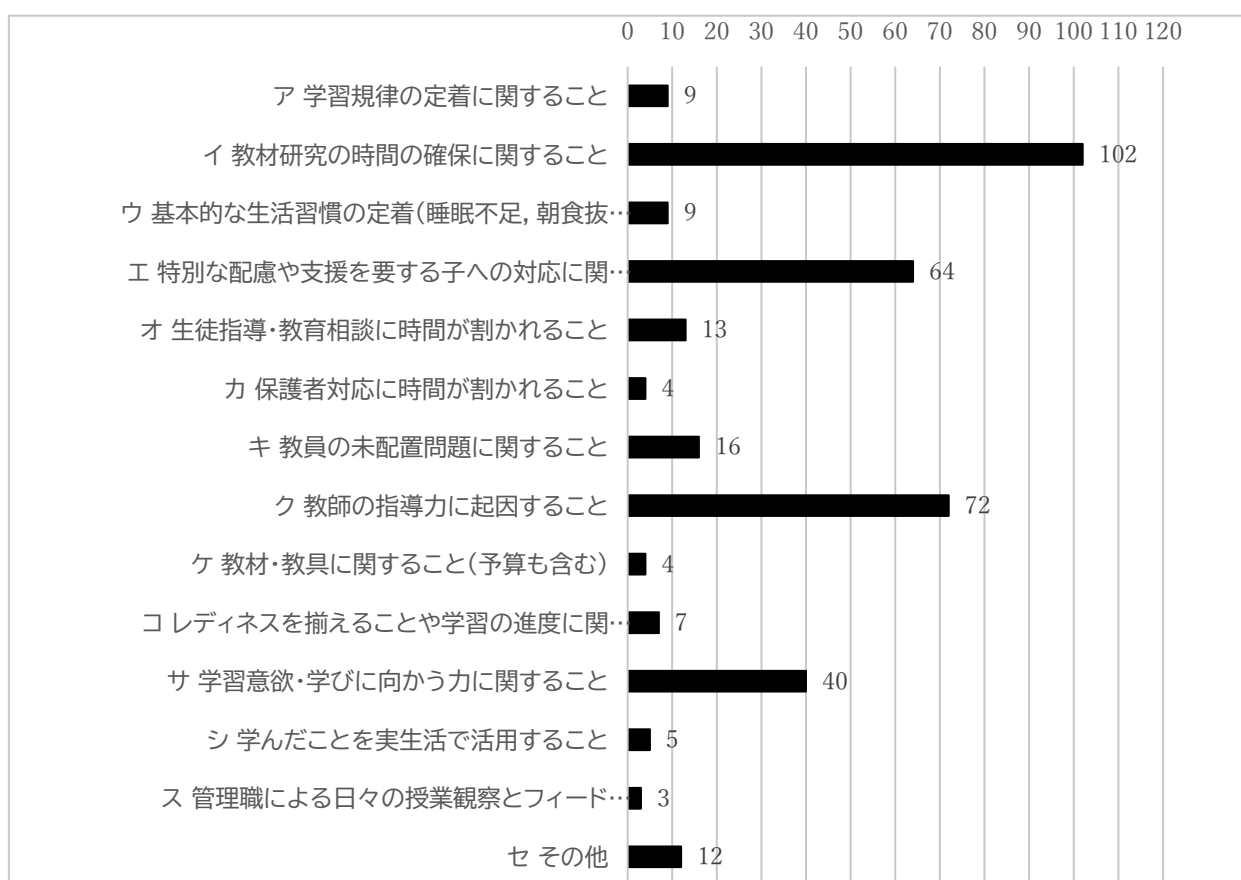
<結果概要>

- 授業改善の工夫で最も重要なのは「エ「主体的・対話的で深い学び」や「協働的な学び」を意識した授業に関すること」であると考えているのが45.2%（163校）と最も多い。
- 次いで多かった回答が「オ指導と評価の一体化を目指した授業の推進に関する事」「カ校内研修の充実」で共に11.1%（40校）であった。

<考察>

- 授業改善に対して、「主体的・対話的で深い学び」や「協働的な学び」を意識した授業作りを学校全体は勿論、教師自身が意識して取り組む事が重要であると考え意見が多いことがアンケート結果と自由記述の意見等から窺える。
- 学校全体の取り組みを通して、教師の意識改革に努めることが大切である。

14. 「授業改善の工夫」で最も課題となっていることは何だと思いますか。



<「その他」の自由記述>

- 協働的な学びを促進する支持的風土の醸成を授業の工夫改善と両輪で進めていく必要がある。
- 教師の意識、意欲、自己の授業振り返りの未熟、並びにそれらが高めるための管理職の不行き届き。
- 教師自身が授業力向上や授業改善を自分事として考え、学びと実践を重ねていくこと。
- 教師自身が問い方を含めた学び方を身に付けること。

<結果概要>

○授業改善で最も多かった課題は「イ 教材研究の時間の確保に関する事」で 28.4% (102校)、次いで多かったのが「ク 教師の指導力に起因すること」20.1% (64校)、「エ 特別な配慮や支援を要する子への対応に関する事」17.8% (64校)、「サ 学習意欲・学びに向かう力に関する事」11.1% (40校)であった。

<考察>

○授業改善を進める上での課題は「教師の教材研究時間の確保」であると捉えている意見が最も多い。多忙な学校現場で、様々な行事・校務分掌での仕事等をこなしながら授業改善に取り組みねばならない状況があり、働き方改革も進めながら、しっかりした教材研究の時間を確保する事が難しく、課題となっている。また、教師の意識向上・指導力向上もアンケートや自由記述などから課題と捉えられていることが分かる。

15. 「授業改善の工夫」の取組で、他校の参考になるような事例があれば教えてください。

(自由記述)

<「授業改善の工夫の取組」の自由記述>

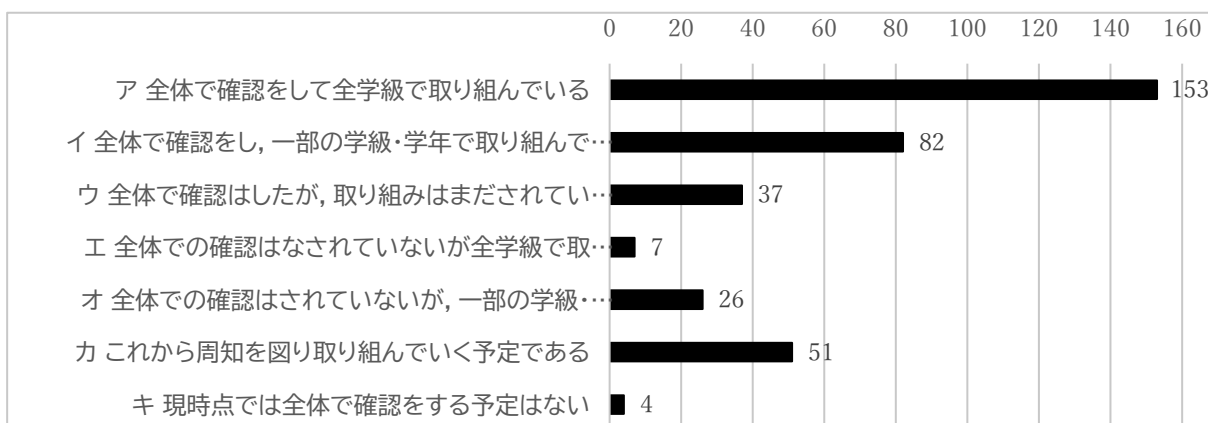
- 授業改善に向けた教材研究時間の確保のための日課表の見直し(朝の活動無し⇨放課後の時間の確保)・OJTの積極的な取り組み(校内研修の時間において録画した互見授業を参観)
- 自校の授業スタンダードを作成し、フォーカスシート、デザインシート、ルーブリックを全職員で共有し、教職員評価面談においても活用している。教職員個々のそれぞれのシートの達成状況や課題などを、面談において管理職と共有し助言を行いながら、課題解決を目指している。
- クロームブックを効果的に活用した授業改善を学校全体で取り組んでいる。
- 学推担当や校内研修担当とは別に、校内OJT担当を置き授業改善を日常的に行っている。
- 「効果的な取組」を、職員連絡会や職員会議、校長だより等で全職員に周知し、共有する。
- 本校では、教師主導の一斉指導型授業からの脱却をめざし、児童が学習リーダーを務め、子供達主体で学習を進める授業づくりを行っている。教師は授業の進行を見守り、学習リーダーやその他児童から求めがあるときや、本時のねらいに照らし必要と判断するときに介入するという取り組みを行っている。
- 月に1回 OJT タイムを位置付けて、全担任と管理職で授業改善に関わる話し合いの時間を設けている。
- 年間3回主事を招聘して研究授業を実施。授業研の2週間前には、指導案検討会を職員が生徒役となり、指導法の工夫改善に努めている。
- 校長が授業観察をする中で、学びに向かう子どもの姿を撮影し、なぜ主体的に学習できているのかを文章化し、校長だよりとして職員に発行している。
- 月に1回 OJT タイムを位置付けて、全担任と管理職で授業改善に関わる話し合いの時間を設けている。

<結果概要と考察>

○授業改善を進める上で効果的な取り組みの工夫が多く、学校で行われている。課題でも挙げられた教材研究確保のための日課表の見直しや、自己申告面談や OJT を通しての助言、また授業スタンダード・フォーカスシート・ルーブリック等学校全体の方向性や取り組みを全職員で共有して授業改善に学校一丸となって取り組んでいる様子が分かる。教師の指導力向上と意識改革に校長がリーダーシップを持って取り組んでいる事例が多くあった。

【「自立した学習者」の育成について】

16. 「自立した学習者の育成」について、今年度、校内で確認をして取り組んでいますか。



<結果概要>

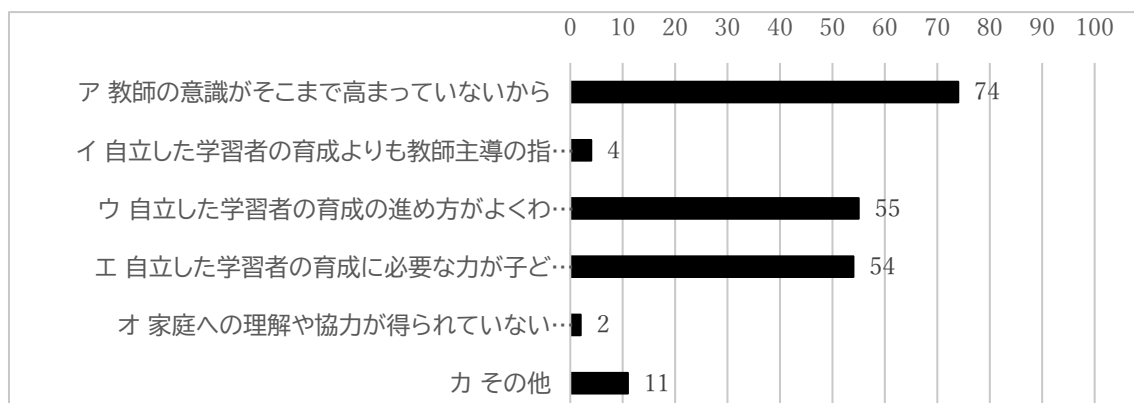
○小中ともに全体の4割が「ア 全体で確認をして全学級で取り組んでいる」と回答している。一部学級で取り組んでいるや今後取り組む予定である学校を含めると全体の8割を占める。

また、「キ 現時点では確認する予定はない」が1%ある。

<考察>

○子供達の「新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力」を育むための相互連携の取組について検討・協議された「令和5年度沖縄県学力向上推進本部会議からの提言及び重点事項（教義第1243号 R5.1.16付）」の重点1「自立した学習者の育成」における取組1～3や取組の手がかり例等の共有と実践を通して「自立した学習者の育成」につながるとされる。

※ 「16.」でア以外の回答になった理由として、考えられることはどのようなことでしょうか。



<「その他」の自由記述>

- 実施の手法が確立されていないので、生徒の実態把握のため1学期は行っていなかった。2学期から実施予定。
- 特別支援学級での取り組みが困難（小学校低中学年）。
- 教師の資質・能力の向上。
- とりたてて「自立した学習者」の育成を取り上げなくても、今まで通り「主体的・対話的で深い学び」を追求していくことが自立に繋がると考えるから。
- 全く取り組んでいないわけではないが、全体での共通理解を図る研修を夏期休業中に実施予定のため、全体で取り組めていない状況。
- 良い家庭学習ノートを全体で共有し内容の充実には取り組んでいる。
- 低学年（1・2学年）では、自立した学習者の育成に必要な力が十分に子ども達に身につけていないと捉えているから。
- 学習者の自立への方向性は全体で確認しましたが、意識の程度や方法については、児童、教員とも、個人差があり、無理に揃える必要を感じていないです。

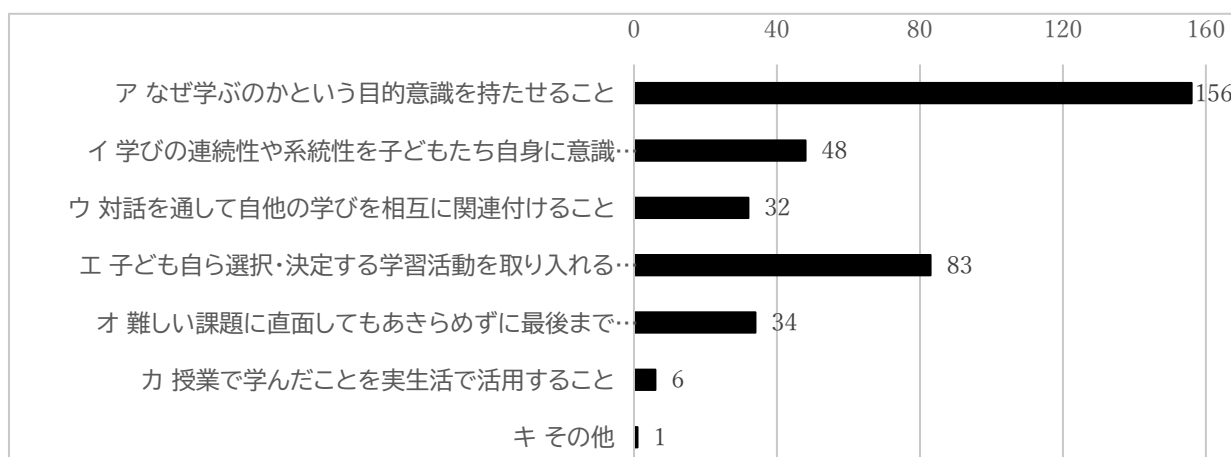
<結果概要>

- 取り組めていない理由として、「ア 教師の意識がそこまで高まっていないから」が全体の2割で多く、次に「ウ 自立した学習者の育成の進め方がよくわからないから」「エ 自立した学習者の育成に必要な力が子どもたちに身につけていないから」が続いた。特にウの回答では、小学校が中学校の倍の割合を占めた。

<考察>

- 令和の日本型学校教育やコロナ禍のGIGAスクール構想の前倒しで世の中の動きがよりいっそう変化・それぞれの課題が明確化してきた。子供達も教師も学びの転換期にきていると思われる。また、家庭とも情報を共有しながら各学校における「自立した学習者の育成」の必要性を感じる。

17. 「自立した学習者の育成」をする上で最も重視しなければならないことは何だと考えますか。



<「その他」の自由記述>

- 本校の児童のつけて欲しい力（自分らしく、よく考える、美しい心、学習をつなぐ、クリエイティブ）を理解させる。

<結果概要>

○小中ともに全体の4割が「ア なぜ学ぶのかという目的意識を持たせること」と回答している。次に多いのが小中ともに「エ 子ども自ら選択・決定する学習活動を取り入れること」「イ 学びの連続性や系統性を子どもたち自身に意識させること」が続いた。

<考察>

○各学校において、現状や課題等も異なることから、それぞれの状況を踏まえて学校としての方向性を確認し「自立した学習者の育成」について推進していく必要があると思われる。

18. 「自立した学習者の育成」の取組で、他校の参考になるような事例があれば教えてください。(自由記述)

<「自立した学習者の取組」の自由記述>

- 高学年においてめあてだけは、書かせるようにしている。なんのために家庭学習をするのか意識づけができた。
- かふやみを意識して取り組んでいる次第です。
- 特定の教科、単元等における自由進度学習の試行。
- クロムブックの持ち帰り可（他にもやっている学校はあると思いますが）。
- 特別活動でのキャリア形成や自己実現の育成を校内研修で深めている。
- 今年度中に単元内自由進度学習を実践し成果や課題をあげて、取組みを校内で広げたいと計画している。
- その週やその日の家庭学習の計画を立て実行しながら、自身の課題に向き合う態度や課題解決を図る意欲の向上に努めている。
- 意図的・計画的に、前時のふりかえりを次時に「カフト」等で確かめると、子どもたちが喜んで「自ら学習する」ようになります。また、小学校の段階でも、「好きなこと」に関連させた、高等学校調べを自主的に行わせる事で、学習に向かう「内発的動機」が刺激され、「自立した学習者の育成」に有効だと考えます。
- 「すべては子どもとの関係性が基盤になっていること」に対する共通理解。
- 校内研で、実践発表会を行う。
- リレーノートを参考に自身の学習に取り入れさせる。
- 教科等横断的な学習を校内研で取り上げカリキュラム作りに取り組む。
- 地域資源を活用した学習活動の展開。
- 金曜日の5校時に城岳タイムを設置し、各学級で児童につけたい力（自分らしく、よく考える、美しい心、学習をつなぐ、クリエイティブ）を踏まえて、授業や一週間の学校生活の振り返りを行っている。
- 模範となる家庭学習ノートの掲示と「けてぶれ」の徹底。
- 志ノート（スケジュール表）の活用による時間管理。
- 授業の意義、目的意識をしっかりと確認して取り組んでいる。職員の声かけが自己肯定感や自己有用感に繋がっている。
- 生徒によるプレゼン作成等。

- 現在進めている学習リーダーを中心とした児童主体の授業の取り組み。
- 社会科や理科等における新聞作成を行い、児童同士の情報発信、共有を図る。
- まずは、家庭学習での取り組み。
- 最も基本的なことにはなるが、キャリア教育と連動させて、「なりたい自分」についての長期目標(将来)と短期目標(学期〇毎)を設定し、そのために何を頑張らないといけないかを子どもたちに意識させるようにしている。
- それぞれの学校の実態に合った取組をすべきだと思います。
- キャリア手帳（フォーサイト）を活用し、見通す力、振り返る力、粘り強く継続する力等を育成しながら自立した学習者の育成を図っている。
- なぜ学ぶのかを全校朝会の校長講話で話したり、キャリア講演会の設定・キャリアサポート・七夕の短冊制作を通して夢について考える機会を増やす等、「夢やなりたい自分」について考え、そのために努力する児童の育成に努めている。
- 補習の際に、生徒自ら自作しそれらを一覧にして、互いに解き合うことで、教科への興味関心を高められた。
- 学習リーダーをティーチャー役にし、児童自ら学習（授業）を展開していく。教師は、ポイント、ポイントで学習（授業）の支援をする。
- キャリア教育の視点「か・ふ・や・み」を「み・か・や・ふ」に置き換え、授業展開のスタンダードに位置付ける等、児童会・生徒会活動や部活動でも意識し取り組んでいる。

<結果概要>

- 記載された取組事例から、教師側の共通理解、共通実践のための校内研修や実践発表の実施、児童・生徒の意識付け（内発的動機等）を図る意図的・計画的な取組の実施、児童・生徒のアウトプットの場の設定、地域教育資源の活用、児童・生徒が主体となった実践（一台端末の持ち帰り、家庭学習の計画、長期・短期の目標設定、授業リーダー、リレーノート、キャリア手帳、志ノート、新聞作成、プレゼン、自作問題作成等）や情報発信、共有の取組が分かった。また、特定の教科、単元等における自由進度学習の試行、キャリア教育の視点での授業展開や児童会・生徒会活動、部活動の取組、校長講話、キャリア講演会の学校行事を生かした取組事例があげられている。

<考察>

- 事例からは、各学校の特色が表れた「自立した学習者の育成」が図られていることが分かった。今後として、各学校から出された取組事例の設定理由などを深掘りする調査ができると、実践計画や効果の検証等の情報が共有され、より参考とすることができるとは思わないかと考える。

V まとめ

今回の「自立した学習者の育成について～各学校での取り組みの工夫～」についての調査結果から、市町村立小中学校の現状や取り組んでいること（事例）、考えが明らかになりました。夏休み前の多忙の中、さらに回答期間も短い中、忌憚のないご意見や貴重な考えをお聞かせ頂いた校長先生方には、心より感謝申し上げます。

以下、調査の項立て毎に概要を見ていきます。

○現状と改善策

(1)「個別最適な学び」

- ①「指導の個別化」「学習の個性化」とも学校全体での取組には至っていない。「指導の個別化」と「学習の個性化」について整理、周知していく必要がある。
- ②「個別最適な学び」について職員の意識等が課題として挙げられている。その必要性や意義も含め、校内研修等において全職員で共通確認する必要がある。個別最適な学びを推進する上で、探求学習を進めるなど、ICTを積極的に活用することが有効と考えている。
- ③ICT機器の活用における端末の持ち帰りにつて、小学校より中学校において「日常的な持ち帰りによる家庭学習の活用」を取組始めている学校が多い。しかし、持ち帰った際、学習以外で使うことの懸念を示している。「個別最適な学び」におけるICT機器の活用について、どのように活用していくか見通しを持って、「学習の見取りや評価方法について」より丁寧な教材研究が必要である。

(2)「自学自習」

- ①「自学自習」に対する定義は異なっている。「自学自習」をどのように捉えるかで校内での授業の取組や家庭での学習の取組ませ方が変わってくる。よって、校内で「自学自習」に対する捉え方の共通確認が重要である。
- ②学校の「自学自習」の取組についてほとんどの学校が家庭や地域への周知を図っている。「自学自習」を充実させるために授業と家庭が連携した学習サイクルの確立が重要である。そのためには、校内職員による共通確認と実践を踏まえ、家庭・地域への説明も工夫していく必要がある。
- ③「自学自習力」の向上には、「与える学習（宿題）」を進め、段階的にステップアップしていくことが大切と捉えている。そこで、授業と連動した家庭学習の定着に取り組んでいる。
- ④県のポータルサイトや近隣校との情報交換等を通して、自校の実践を図っている。
- ⑤「自学自習力の育成」には、キャリア教育との関連を強く意識しながら「自学自習ガイド」等を活用して自校の実態に即した具体的な取組を推進していくことが重要と捉えている。
- ⑥「自主ノート」「目標管理ノート（手帳）」など日々の活動記録を明記し、生徒自ら目標管理を行い、自己の気づきに繋げている取組が多く見られた。

(3)「授業改善の工夫」

- ①「各種調査の自校分析と対策」「主体的・対話的深い学びや協働的な学び」等を意識した授業改善の取組に関する工夫がほとんどの学校においてなされている。各種調査の分析を基に組織的に研修や授業研究会は充実してきている。
- ②小学校高学年における一部教科担任制を導入することで、「子供達に向き合った授業づくりの時

間」「職員同士の研修」等、時間確保につながっている。

- ③授業改善を進める上での課題として「教師の教材研究時間の確保」と捉えている意見が最も多い。様々な行事・校務分掌などを取組ながら授業改善を推進していく多忙な学校現場の状況が授業改善推進の課題となっている。
- ④授業改善確保の工夫として、「日課表の見直し」や「自己申告面談等を通しての助言」、「授業スタンダード・フォーカスシート・ルーブリック等を活用」など学校全体で共有し授業改善に取り組んでいる。

(4)「自立した学習者の育成」

- ①特別活動でのキャリア形成や自己実現の育成を校内研修で深め、家庭学習の計画推進を進め、子供自身が課題に向き合う態度や課題解決を図る意欲の向上等に取り組んでいる。
- ②学校の現状にあわせ、GIGAスクール構想による一人一台端末の活用を推進し、「個別最適な学びと協働的な学び」の実現を目指した授業改善に繋げている。
- ③多くの取組事例が挙げられていた。事例からは各学校の特色が現れた「自立した学習者の育成」が図られていることがわかった。今後、その実践や効果の検証等の情報が共有されることで、更に各学校の特色が現れた実践に繋がられるのではないかと考える。

以上のことから、

各学校においては、主体的・対話的深い学びを実現するための授業改善とともに一人一台端末を活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」等を一体的に充実する教育を推進し、自立した学習者の育成に向け着実に進められていることがわかりました。しかし、その取組は、緒に就いたばかりであると言えます。校長として知恵を尽くし、学校全体の取組を通して教師の意識改革に努めることが大切であると考えます。

これからの時代の学校は、「令和の日本型学校教育」の構築を目指し、働き方改革とGIGAスクール構想を推進しつつ学習指導要領を着実に実施することで「自立した学習者の育成」を目指すことが重要です。「全ての子供達の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」とし、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を進めていくことが必要です。そして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するため、ICTの効果的活用を進め、カリキュラム・マネジメントを充実させ、各教科等において育成を目指す資質・能力等を把握し授業改善に生かしていきます。その際、一人一台端末を日常的に「文房具」として自由な発想で活用できるよう環境を整え、多様な学び・授業をデザインすることが学校運営の中で求められていくと考えます。

教育行政（県教育委員会・市町村教育委員会）には、各学校と連携を図りながら、県の推進している「自立した学習者の育成」に向け、共に子供の学びを広げ、深めていくことを切望します。

結びに本調査の結果・考察が今後の各学校の「自立した学習者の育成」に向けた一助になればと願います。

生徒指導委員会

「魅力ある学校づくり」の推進

サブテーマ：

「チーム学校」としての機能する組織体制づくり

I	はじめに	25
II	研究の進め方	25
III	実践事例紹介校	25
IV	実践事例	25
V	まとめ	45

生徒指導委員会

◎は部長

	氏名	所属校		氏名	所属校
小 学 校	平 良 智	大宜見小	中 学 校	松 本 優一郎	今帰仁中
	榮野川 活	西原南小		島 袋 勝 範	あげな中
	金 城 一 石	仲 西 小		喜久川 洋	神 森 中
	◎上江洲 学	糸満南小		◎伊 敷 尚 也	玉 城 中
	与 座 篤	多良間小		濱 川 成 共	鏡 原 中
	渡 口 里 夏	古 見 小		伊舎堂 用 右	久部良中

メインテーマ：「魅力ある学校づくり」の推進

サブテーマ：「チーム学校」としての機能する組織体制づくり

I はじめに

県小中学校学校長会生徒指導委員会は、平成28年度から以下のテーマを設定して研究を進めてきた。

H29	「不登校児童生徒問題への対応」に関する事例研究
H30	「チームで取り組む生徒指導と校長のリーダーシップ」に関する事例研究
H31	「チーム学校」を活性化する校長のリーダーシップ
R2	「チーム学校」による安全・安全な学校づくり
R3	「チーム学校」による児童生徒の居場所づくり
R4	「チーム学校」による支援と活性化に向けて
R5	「チーム学校」としての機能する組織体制づくり

令和3年度の沖縄県学力向上推進本部会議からの提言より「魅力ある学校づくり」の推進が提言されている。「魅力ある学校づくり」には児童生徒の安心・安全が確保され、生き生きと過ごすことのできる居場所づくりが求められている。そこで、本生徒指導委員会では「チーム学校」としての機能する組織体制づくりをサブテーマとして位置づけ、「チーム学校」としての取り組みの実践事例を紹介することとした。全ての児童生徒が「明日も行きたくなる」魅力ある学校を目指して、実践事例をもとに各学校の実践の充実に資することを目的とする。

II 研究の進め方

本研究ではサブテーマに沿って県内6地区の小・中学校で取り組まれている実践についてとりまとめ、校長の関わり、指導性について考えることとする。

III 実践事例紹介校

《小学校》

金武町立金武小学校
うるま市立勝連小学校
浦添市立仲西小学校
豊見城市立上田小学校
竹富町立古見小学校
宮古島市立福嶺小学校

《中学校》

今帰仁村立今帰仁中学校
うるま市立あげな中学校
那覇市立石嶺中学校
糸満市立潮平中学校
宮古島市立鏡原中学校
与那国町立久部良中学校

IV 実践事例

1 金武町立金武小学校の実践

(1) はじめに

本校は、児童数499名、学級数23（内特別支援学級6）の中規模校である。職員は、年齢構成の異なる48名の職員集団である。これまで、職員一人一人がそのキャリアに応じた役割を自覚し、実践的な指導力、資質・能力を高める研究・研修の充実を図ってきた。その学びを活かし、生徒指導に係る取り組みにおいて、ベクトルを一つにし、組織的に取り組んでいる。本校の学校教育課題として、「不登校児童への対応、問題行動への対応、配慮を要する児童への対応」等があげられる。これらの課題解決に向かい、関係するすべての児童の「自己肯定感を高める」ことを目標に、多様な手立てを持って教育活動に取り組んでいる。

(2) 実践内容

① 児童に寄り添う学級経営（児童理解）

ユニバーサルデザインの学級づくりを学級経営の基軸として全教職員体制で取組を推進している。児童理解に基づく指導・支援を実施するため、UDの考えを理解することが必修である。そこで、「学級づくりの柱」「UDとは」「通級指導について」「児童の実態把握：QU分析」「仲間作り」等を外部人材を活用しながら理論及び実践的な研修会を開催した。全職員が「子ども理解とは」というUDの基本に立ち返り自身の教育活動に活かすための協働研修に取り組んだ。

児童理解のための定期的取り組みとして昼の活動（月二回）にSST（ソーシャルスキルトレーニング）

を位置づけ実施している。SSTの教材、指導手順書、実践ビデオ例等を昨年度までに準備し、誰でも直ぐに実践に結びつけるよう組織的に計画・準備・実践を繰り返している。



写真【ソーシャルスキルトレーニング】

②児童主体の教育活動（特別活動の充実）

児童は常に「認められたい」「達成感を味わいたい」という欲求を持っている。児童一人一人の自己肯定感を高める取り組みとして、縦割り班活動・委員会活動・クラブ活動等において、児童主体の活動をマネジメントした。特に6年生を中心とした取り組みを活性化させることにポイントを置いている。クラブ活動では、6年児童が活動したいクラブを決め、4・5年生のクラブ選びのためのPR集会を行った。また、縦割り班活動では、1つの班を1～6年生（各1名）までの構成で組織し、常に高学年児童が低学年児童をリードし、あらゆる活動に取り組んでいる。



写真【クラブ活動PR集会】

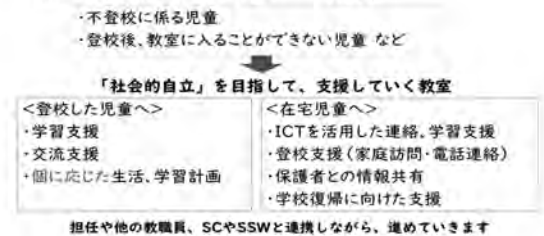
③生徒指導・教育相談体制の構築

生徒指導主任を中心に、各学年の生徒指導担当・養護教諭・教育相談担当等の構成で毎月1回「生徒指導・教育相談委員会」を実施している。いじめアンケート実施による実態把握や日々の教育活動から起こる生徒指導案件について共有し、解決策を探っている。また、職集においても全職員で共有し、早期対応ができるよう努めている。児童が安心して相談できる環境をめざして、誰にでも相談できる教育相談体制づくりに取り組んでいる。養護教諭が窓口となりスクールカウンセラー、町教育相談AD、町SSWの活用を行っている。また、中学校への繋ぎも意識して高学年では、一部教科担任制を実施し、どの教科担任でも児童が相談できる雰囲気づくりに取り組んでいる。日々起こる生徒指導案件について、Googlechatを活用して、タイムリーな情報共有に努め全職員で児童を見守る意識で取り組んでいる。

④自立支援室の設置

令和4年度から自立支援室が設置され、支援員1名が配置された。不登校や登校しぶり児童への支援が主な役割となる。児童が長期欠席や不登校に至る理由は多様であり、その原因は一つに特定できないことも少なくない。休み始めの対応を適切に行うことができなかった為に長期欠席や不登校が長期化・深刻化してしまうケースもあった。そこで、支援員と学級担任が連携を密にして、学校へ行けない児童の状況を把握し、寄り添い、迅速かつ適切な対応をするよう努めている。そのために、学校組織をあげて、状況によっては外部の関係機関の力も借りながら、欠席の原因究明や解決策を即時検討・実行するよう努めている。

自立支援室の利用①・・・概要



【自立支援室の利用について】

(3)校長の指導性（リーダーシップや関わり）

- ①校長は、学校で起きた全ての事案に関わり、問題解決に至るまでのプロセスや関係機関との連携等について適切な助言を行い、職員の意欲喚起を図る。
- ②児童の育成に係る目的を再確認し、取り組みの細部まで職員とのコミュニケーションを密にした学校経営マネジメントを構築し、生徒指導に係る取り組みの深化を図る。

(4)チーム学校（機能する組織体制づくり）

子ども達は、学校での活動の中で様々な悩みを抱えていることがある。その不安を解消するためにも学校が安心安全な居場所を整える必要がある。そのためにも教職員一人一人が安心してやりがいを感じて働ける職場環境づくりが大切である。その手立てとして、管理職及びリーダーのサーバントリーダーシップにより「まかせ、信じ、応援する」という信頼関係を構築することが重要である。日々の教育活動におけるコミュニケーションを充実させる組織を創り上げることが、何よりもチーム学校として機能するための重要ポイントである。

(5)成果

- ①児童主体の教育活動を展開することによって、児童も教師も共に成就感を味わう機会が増えた。

②児童にとって居場所となる魅力ある学校づくりに対して、教職員一人一人の意識が高まってきている。

③あらゆる外部機関と連携することにより、学校が孤立化せずに組織的・継続的な対応が可能となった。

(6) 課題

①学校の願いと保護者の思いに対して、乖離があった場合の調整を粘り強く行い、効果的支援体制を確立する。

②内外の研修時間の確保により、生徒指導力（聴く教育相談）向上を図る取り組みを推進する。

③児童中心の主体的取り組みを教育活動全体において日常化する教職員の支援体制の確立。

2 勝連小学校の実践

(1) はじめに

本校は、うるま市勝連半島の中央に位置し、海道路や平安座島などを近くに望む、風光明媚な環境の中にある。普通学級12、特別支援学級5、児童数332名の中規模校である。スポーツ少年団の活動も盛んで、地区大会や県大会の優勝を始め、上位入賞のチームが多く、児童に活気があふれている。一方、準要保護世帯も多く登校渋りや学級に入りきれない児童も増加傾向にある。また、特別支援学級児童や学級の中の発達障害を抱えた児童への関わり方等も課題で、全職員で特別教育の視点での関わり方を共通理解し、支援を行っているところである。

また、令和4年度の本県「児童質問紙」の調査結果から、県平均と比較し「自己肯定感」の低さが見られ、児童一人一人が所属している集団の中で、役割を持ち自分を「価値ある存在である」という感覚を高めていく支援が必要であることが見えてきた。

そこで、課題解決の方策として学校の一事徹底を「目標をもって行動しよう」として掲げ、児童一人一人が自分のよさや可能性を自覚し、「よりよい自分」を目指して、日々成長につなげていける指導の工夫改善に重点を置き、全校体制の教育活動の推進を図った。キャリア教育を中核にすべての教育活動において、目標を意識させるとともに、児童の主体的な活動を積極的に奨励し、「みんなが楽しい学校づくり」に取り組んだ。

本実践報告では、児童の自己肯定感を高め、自治的な活動を引き出す組織的な取組を紹介する。

(2) 実践内容

①『子どもの主体性』を引き出す実践

(ア) 全児童が一体となった行事づくり

運動会へ向けて、各学級、児童会、たてわり班など、全校児童で様々な取組をおこなった。各学級で運動会へ向けて、学級スローガンやがんばることを決め、代表委員会で児童会として学校全体の目標をつくった。また、たてわり班での応援で、学校全体が一体となって応援合戦を展開した。運動会では、自分の立てた目標に向かい、一生懸命、演技、協議、活動する子どもたちの姿が見られた。



図1(運動会に向けた各学級での取組)

(イ) 児童会による「よりよい学校づくり」

年度初めに、児童会役員一人一人の公約を実現するために、話し合って目指す学校の姿を設定した。その実現を目指し、様々な企画を考え、全児童で取り組んでいる。1学期には、児童から募集した学校のイメージキャラクター（通称：わしまるくん）を決定したり、校長先生と相談して、正門前の懸垂幕の合言葉を決定し、掲げたりしている。



図2(児童会の作った懸垂幕)

(ウ) たてわり活動の実施

異年齢の集団活動を教育課程に位置づけ、高学年のリーダーシップを育てるとともに、様々な仲間と協力して活動する体験を積ませ、フォローアップを育てている。たてわり活動の実践では、6年生、が事前に計画準備した活動を、中心となって活動運営をする。上級生として優しく教えてあげたり、励ましの声かけをするなど、温かい雰囲気での活動が進んでいる。下級生にとっても上級生へのあこがれを抱くようになっていく。



図3(たてわり活動の様子)

②『組織的な取組』を推進する実践

(ア) 学級活動(2)の内容の指導の工夫 (SEL-8s)

うるま市の児童生徒の課題から、教育政策として『社会性の育成と情動の学習 (SEL-8s)』を推進している。本校でも、登校しぶりや対人トラブルなど、コミュニケーションに起因する課題があり、その解決策としてSEL-8sを問い入れた指導を行っている。『SEL-8s』の指導を、学級活動の年間指導計画内に位置づけ、コミュニケーションスキルに関する指導が必要な場合は、そのプログラムを活用して指導を行う。そのことで、対人関係について、

自己の生活と結び付け、具体的な目標設定が可能となる。

本校では、『SEL-8s』のプログラムのうち、「感情への気づき」に関する内容を必須指導事項として設定し、全ての学年で系統的に感情コントロールのスキルを高めるように指導計画を立て、実践を行っている。

(イ) 校内研修における指導の工夫改善

校内研修では主題を『自己のよさや可能性に気づき、自己肯定感を高める教育活動の工夫』、副主題を「特別活動の指導の充実を図る取組を通して」の下、全職員で学級活動の指導に関する実践研究を行っている。全校体制で共同研究を進めることで、子どもたちの自治的な活動の充実と、指導の工夫改善が図られている。



図4 (学級会の研究授業)

(ウ) 一事徹底の推進「目標づくり」と「ふりかえり」

本校では一事徹底を『目標をもって行動しよう』と設定してある。全ての教育活動において、課題を自分事として捉え、活動に向かう際の具体的な目標づくりに力を入れている。そして、活動終わりには、ふりかえることで、「なりたい自分」を目指して主体的に取り組む児童の育成を目指している。

また、毎学期の始めと終わり、学校行事などでは、キャリアパスポートに目標を記したり、実践や生活を通しての振り返りをさせたりし、自己の成長への気づきにつなげている。

【目標づくり】

年度初めに、全学級で「学級目標づくり」を共通実践として取り組んでいる。学校教育目標と関連付け、教師や保護者の思いを踏まえ、子どもたち一人一人の「なりたい自分」の思いを共有し、合意形成を図りクラスみんなで決めた。これが、1年間の指標として位置づけされる。

また、「なりたい自分」を目指し、各学期はじめに目標を設定し、常に意識できるように掲示している。

さらに、学級目標をふりかえり、ひと月でがんばりたい目標を設定し、学校生活の中で実践できるようにしている。

目標の設定 なりたい自分、なりたいクラスを目指して...



図5 (学級目標と個人目標)

【生活のふりかえりの場の設定】

週時程に生活のふりかえりの時間を設定している。毎月末、タブレットを活用して、学校目標、学級目標について、自分の生活の様子をふりかえり、自己評価する。その評価をもとに、翌月の目標設定につなげる。

また、個々のアンケート結果を集計し、学級の姿、学年の姿として可視化し、みんなでがんばることとして、指導へつなげている。

(3) 児童の変容

児童の意識調査では「自分には、よいところがあると思いますか。」の質問に令和3年度6月時点では、「当てはまる」と回答した児童の割合は22.9%であったが、令和4年6月実施の調査では、43.4%となり、20.5%の向上が見られた。組織的な取組の成果として、児童の「自己有用感」や「自己肯定感」の高まりがみられた。また、「学級生活をよりよくするために学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。」の質問に、令和3年度6月時点では、「当てはまる」と回答した児童の割合は38.2%であったが、令和4年6月実施の調査では、41.6%となり、4.4%の向上が見られ、県平均よりも1.3%上回る結果となった。特別活動を中心に、自治的な活動の推進及び、指導の工夫改善が図られてきた成果であると考えられる。

また、令和2年度末時点から、令和4年度7月時点での問題行動等の発生変化は、「不登校」は12名から4名へ8名の減少、「いじめの認知件数」は37件から令和3年度末の5件へ減少と飛躍的な改善がみられている。(問題行動に関しては、発生件数はなし)

子どもたちが、諸取組を通して、よりよい自分づくりにむけ、自己指導力を高めていった成果として考察できる。

(4) 成果

- ①児童アンケートや諸調査結果に基づき、児童の実態を把握し課題解決に向け指導の工夫改善が図られた。
- ②組織運営を見直し、児童の実態に基づいた教育活動の展開が図られるような委員会(自立プロジェクト部会)を中心に、特別活動やキャリア教育を中心に、学校課題解決に向けて取組を推進することができた。
- ③各教育活動の取組の状況をふりかえりながら、今後の取組の計画につなげ、手立てや具体的な対応策につなげることができた。
- ④生徒指導上の問題の減少につながった。

(5) 課題

- ①「魅力ある学校づくり」の更なる質の向上を目指し、各取組の工夫改善を図っていくこと。
- ②組織的な取組をより進化させるための指導方法等の情報共有の場の設定の工夫と時間の確保を行うこと。
- ③教師の指導力の向上を図り、質の高い指導の展開が図られるようにすること。
- ④取組の成果を次年度以降も継続してよいものにしていく様な、持続可能な取組として機能させること。

3 浦添市立仲西小学校の実践

(1)はじめに

本校は、全校児童567名28学級（うち特別支援学級11学級）の適正規模の小学校であり、令和3年度に創立120周年の大きな周年行事を終えた歴史と伝統のある学校である。

学校教育総括目標に「自ら進んで学習し心身ともに健康で人間性豊かな子どもの育成」を掲げ、【笑顔で登校 満足の下校 みんなの笑顔が 仲西の太陽】を合言葉に、魅力ある学校づくりに向け諸教育活動に取り組んでいる。

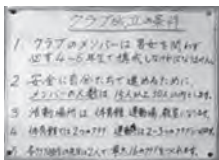
(2)実践内容

①組織的・計画的な学級活動の実践

研究主任を中心として、よりよい学校生活の実現に向け、学級活動(1)(2)(3)を計画的に実践していきけるように、週2回の学年会において実践のふりかえりや次週の教材研究を進めている。また、日課表を見直し学級の時間を設定することで、実践のふりかえりや事前の活動の時間を確保し、学級活動の充実に向け取り組んでいる。

②クラブ活動の実践

4～6年生の異なる学年の友だちと趣味を同じくし（同好の仲間）個性を伸ばし生活を豊かにするのがクラブ活動である。安易にじゃんけん等で配置を決めるのではなく、クラブ成立の5つの条件を示し希望調査をもとに、話し合いを重ねて合意形成を図りながら、どの子も納得したクラブ配置になるように進めている。そうすることで、どの子も意欲的にクラブ活動に取り組み、盛り上がっている様子がうかがえる。



(3)校長の指導性（リーダーシップや関わり）

①週案コメントや教職員評価システム面談

板書型実践イメージ資料集を活用した積極的な授業実践を様々な場面で全職員に伝えている。

②職員との連携（ミドルリーダーの育成）

学級活動については、研究主任と連携し進捗状況を確認しながら助言している。（一人一授業の公開）

また、クラブ活動についても担当職員と連携し進捗状況を確認しながら助言している。

(4)チーム学校（機能する組織体制づくり）

①強みを生かす

本校は特別支援学級が11学級あり、特別支援教育ヘルパーも4名配置されている。特別支援学級に在籍している児童が交流学級で授業を受けている時には、特別支援学級担任も各教室を巡回し、必要に応じて児童支援に入っている。そのため、管理職やヘルパー、特別支援学級担任が複数名で校内を巡回する体制を構築している。

②生徒指導主任の配置

本校は教務主任(5, 6年理科)の他に理科専科が配置されている。(3, 4年理科)校務分掌を生徒指導主任とセットにすることで、学校全体を把握し、早期対応できる体制を整えている。そのため、教育相談支援員(週4日勤務)がお休みの月曜日は授業を組まずに、生徒指導上の諸課題対応や登校支援等に対応している。

③外部関係機関との情報共有

毎週木曜日の4校時の時間に合わせて関係者会議を設定している。構成メンバーは、教頭・生徒指導主任・教育相談支援員・SSW・家庭児童相談員・てだこ未来応援員である。それぞれが関わっている児童について、近況や進捗状況等について報告し、情報共有・共通実践に努めている。

(5)成果

- 昨年度の実践をベースにして、全職員が組織的・計画的に学級活動を実践することで「合言葉をつくらう」「シンボルマークをつくらう」等の学級活動において、児童がよりよい学校生活の実現にむけて合意形成を図ろうと積極的に話し合う姿が多く見られるようになった。



- 教頭・生徒指導主任が要となり、不登校支援や生徒指導上の課題解決、家庭支援等、多岐にわたる諸問題の支援の進捗状況を共有することで、常に組織で対応する体制が整ってきた。

(6)課題

- 特別支援教育の視点をもった学級・学校経営
- 不登校や生徒指導上の諸問題を抱える児童支援について、多面的な角度からアプローチ方法を考えることができる等、教職員個々の生徒指導力の向上。

4 豊見城市立上田小学校の実践

(1)はじめに

本校は児童数901名教職員64名38学級（うち特別支援学級9学級）の大規模校である。2015年に

ゆたか小学校新設に伴い、児童数は千名余りから、600名程に減少した。しかし、その翌年から増加し、今後もその傾向は続くと思われる。また、全面改築により、小学校・子ども園・学童の3施設が同居する複合型施設となったことで、三者合同の情報共有や連携がより一層必要となっている。

この様な中、「安心・安全で魅力ある学校づくり」**「うきうきえがおでたのしい上田小学校」**を目指し、「かしこく・やさしく・たくましい上田っ子」を合言葉に、教育目標の具現化に向けた教育課程の再編や、年間を見通した生徒指導体制の構築等について校長のリーダーシップが求められている。

そこで、チーム学校として機能する組織体制づくりの推進について、「職員研修の充実」と「児童会活動の活性化」を例に紹介する。

(2) 実践内容

① 校内組織の位置づけと研修への連動

「魅力ある学校づくり」を推進するには、教職員一人一人の力量を高め、学校組織としての教育力向上が必要である。本校では児童理解を深める為、毎月第1火曜日に合同部会（教育相談・生徒指導・特別支援教育）を定例で開催できるよう週時程に位置づけ、管理職・3主任・各年代表・SC・SSW・児童生徒支援加配教諭（中学校）と情報共有や、諸問題への対応等を計画的に進めている（表1）。

表1：研修時期と内容

時期(月)	内容
4 ～ 7	児童理解：特別支援教育Ⅰ（講話・ワークショップ） 教育相談週間、保護者面談、QU調査実施 教育力向上：指導提要について（職員会議）
夏季休業	児童理解：特別支援教育Ⅱ（講話・ワークショップ） 教育力向上：指導主事要請（講話：生徒指導） 産業医による講話（ストレスマネジメント等） 学調・QU調査分析
9～12	児童理解：教育相談週間、QU調査実施
1～3	児童理解：特別支援教育Ⅲ（次年度に向けて） QU調査分析

更に、長期休業時には、これまでの児童対応と課題児童・保護者からの相談等を各自で一度整理し、課題意識を持って研修に参加できるように取り組んでいる。



図1 教職員の資質向上研修

そうすることで、教職員一人一人が「魅力ある学校

づくり」について再認識し、チーム上田として学校経営へ参画する組織体制が構築されると考える。

② 児童会活動の活性化

「**うきうきえがおでたのしい学校**」の実現に向け児童会活動の活性化は重要だと考える。そこで昨年2学期後半、6年生に「卒業までにやりたかったこと」を調査すると「全員で遊びたかった」という回答が多く上がった。コロナ対応と児童数の多さから生じる教育活動の制限は、児童の触れ合う機会を減少させていた。そこで、前年度までオンライン放送で対応していた「6年生を送る会」を全員参加が可能な運動場での開催を担当へ助言し、児童主体の取組となった。



図2 6年生を送る会

更に今年度の児童会行事を立案する際、「楽しい学校にするにはどうしたら良いか」を児童と担当教諭が企画案を作成・提案し、今年度も児童の主体性を生かした魅力ある学校づくりについて次のように取り組んでいる。

ア 行事の統合（遠足と1年生を迎える会）

春の遠足は、大人数の為学年毎に目的地が異なっていた。また、1年生を迎える会も全員参加型の開催ができないという状況だったが、行事を統合し「歩くことも楽しもう」という児童の発想を活かし市内陸上競技場を目的地として取り組んだ。1年と6年、2年と4年、3年と5年が手を繋ぎ競技場へ移動した。到着後は広い芝生に全児童が集合し、**「手をつないでレク歌やダンスを楽しんだ。**月曜日の開催だったが欠席者が少なかったことや「前日親子で遠足の準備ができた」という保護者の声もあり、相乗効果もみられた。千名近い大移動ではあったが、交差点や自宅前にPTA役員や地域の方が見守りや安全指導等に協力頂いた。



図3 手をつないでレク

イ 児童会が活躍する縦割り活動

楽しい学校づくりとして、7月に縦割り活動（上田っこタイム）を開催した。その準備は年度当初から、担当教諭と児童会が話し合い、そ

の周知方法や班編成等、計画的に取り組んだ。



図4 目的と活動内容と班編成を掲示

図5 レクの様子

901名を全学年混成29班に編成し、各班の6年生が中心となって「初めましての会+レク」を運営することができた。そこには、児童に寄り添い活動した担当教諭の成長と、担当任せにしないチーム上田の「学校づくり」の成果であったといえる。児童は、この取り組みをきっかけに、次の児童会行事の計画に主体的且つ意欲的に動きだしている。

(3) 校長の指導性（リーダーシップや関わり）

① 学校経営方針の浸透

チーム上田として魅力ある学校づくりを推進するためには学校経営方針の共通理解・共通実践が要となる。第1回職員会議の周知のみで終わらぬよう、週案に添付するミニ便りには「児童理解や学級経営力」と「一般教養や教育情報」を交互に掲載・配布し、参画意識の向上を図っている。

また、上記の取り組みについて児童の変容が見られた時は、児童はもちろん、担任にもその内容伝え「ありがとう」を積極的に伝えている。

② 五者会の計画的運営

校長・教頭・教務・養護教諭・県費事務の五者会を毎週火曜日1校時に位置づけ、週報の確認後先生方の週案に記載された児童の情報や授業参観の中から、不登校・問題行動・保護者対応についてそれぞれの情報と照らし合わせ、手順や役割を決定し組織的かつ早期対応となるよう進める。

(4) チーム学校（機能する組織体制づくり）

① 赴任1年目は校務分掌配置が効果的且つ組織的であるのかに着目し、教職員の学年学級経営、授業力、協働意識を中心に観察し、随時助言を行った。

ア 観察と人材理解（4月）

週毎に参観する教科を決め、授業づくりや学年の連携、学級経営状況の見取りを行った。また、朝やお昼の会、給食・清掃指導を参観し、集団づくりや個別対応等について把握した。更に、校務の計画的な取り組みと会議等の提案がPDCAの視点で作成されているか等、個々の能力を把握し助言することを繰り返し行った。

イ 評価面談と育成プランの提示（5月～7月）

当初面談では、今年度の目標を確認しつつ今後どのような教員を目指しているのか、組織の中でどう活躍したいのか等、個々のキャリア設計について触れ、修養や学校経営への参画意識が高まるよう助言を行った。

ウ 校務分掌配置に向けて（8月～）

個々の専門性や、教育活動への参画意識と調整・連携力、人間性を総合的に判断し、次年度学校経営の要となる教務主任・特別活動主任・校内研究主任・学年主任案を作成した。主軸となる職員には、次年度の学校経営ビジョンを丁寧に説明し、次年度に向けた見通しを持ち取り組めるよう助言を行った。

② 学こ小連携

毎月最終週の木曜日に、上田子ども園、上田児童クラブ代表の三者で行事や施設使用の確認、幼児児童について気になる事を情報共有し、その対応を相談し連携している。また、園児への読み聞かせや挨拶運動等に参加することで、校種間連携を推進している。

(5) 成果

- 児童理解に関する研修を計画的に取り組むことで、チーム学校として、教職員が積極的に参画する組織体制を推進することができた。
- 楽しい学校づくりについて、児童主体となるよう推進することで児童会活動の活性化が図られた。
- チーム学校としての意識が高まっている。

(6) 課題

- 子どもが主体となる取り組みの継続や、職員の参画意識向上と学校教育目標の具現化に向けた組織体制の見直しが必要である。
- 教職員個々の生徒指導力向上に向けた取り組みが継続できるよう、OJTを活用しチームで取り組みたい。

5 竹富町立古見小学校の実践

(1) はじめに

本校は創立128年の伝統のある学校である。児童数は3名（2年生と6年生の複式学級1学級）の極小規模校である。学校の南は前良川、北は後良川に囲まれ、西(後)方に山岳が連なり、東(前)方には海、左前方にカサ崎、右前方にノーマ崎で入江に

っている自然豊かな環境にあり、世界自然遺産の中に位置している。このような環境を活かし、令和3年度から教育課程特例校（海洋教育）として、地域の自然や文化、人材を活かしながら教育活動を進めている。

「地域で子供を育てる」雰囲気がある地域であり、この環境で育つ子供たちは温和で、仲が良く、将来の夢や目標を持ち、地域の行事に参加する子が多い。

児童一人一人が毎日笑顔で登校し、互いに認め合い、支え合う人間関係を育み、心身共にたくましく成長していく児童の育成を目指して日々の教育活動に取り組んでいる。

(2)実践内容

生徒指導の本年度の重点目標である「体験活動の推進」「教育相談の日常化」「児童理解のための情報交換」に重点を置いて取り組んでいる。

①地域の特色をいかした体験活動の推進

令和3年度より教育課程特例校となり、海洋教育を「結ぬ海科」として実施している。子ども達は、結ぬ海科や総合的な学習の時間などで多くの体験活動を行っている。

ア 結ぬ海科

海洋教育を、「地域と共に、地域の中で学ぶ「結ぬ海科」」というテーマに取り組んでいる。低学年 67 時間、中・高学年 73 時間の時数を確保し、地域の人材をいかした体験活動を行っている。

- ・ウムズナー採り体験 (R5) ・カーナ採り体験 (R4)
- ・カヤック体験 (R5) ・SUP 体験 (R4)
- ・ゴミゼロ運動
- ・他の島を知ろう：西表島と竹富町の他の島について比較する。この4つの体験学習や専門家などによる海洋に関係する授業などを計画・実施している。その中で、同じ竹富町の上原小学校や外国の小学校とのオンライン交流を通し学んだ、プラスチックゴミの削減についての竹富町議会で提言を行った。また、海洋教育について学んだことを、学習発表会・校内海洋教育発表会や竹富町海洋教育サミットで発表を行っている。このような経験から、児童は自信をもち、自己有用感を高め、さらに自己肯定感も高めることができていると考える。



写真1 町議会での提言



写真2 カーナ採り体験 (R4)



写真3 カヤック体験



写真4 ゴミゼロ運動

イ 総合的な学習の時間(チョウ観察)

平成7年の100周年事業で整備していただいた「チョウのひろば」で、28年継続し毎週木曜日の朝の活動で実施している「チョウ観察」。



写真5 チョウ観察

観察だけではなく年に2回行うチョウ食草検定や児童がそれぞれテーマを決め、調査を行い結果を発表する。その結果、自主性や表現力・発表力を育むことができた。

②教育相談及び情報共有の充実

ア 教育相談週間の設定

各学期に1回、年間3回の教育相談週間を設けている。1学期は、学級担任による面談。2・3学期は、全職員で教育相談にあっている。

教育相談の内容等については、全職員(校長・教諭・事務主事など)で共有し、課題について確認して、取り組む。

イ スクールカウンセラーによる全児童面談

年間4回のスクールカウンセラーによる、全児童や希望する保護者を対象の面談を実施している。面談後は、校長・教育相談担当(養護教諭)・学級担任など関係職員でフィードバックを行い、今後児童の指導方針等について検討・確認を行っている。必要に応じて、全教職員で行ったり、保護者との連携をしたりすることがある。

ウ 情報共有の充実

教育相談やスクールカウンセラーによる面談後の情報共有は必要に応じて実施している。日常的に、授業中や給食・清掃時間、休み時間などで気になることがあった場合は、校長はじめ関係する教職員との情報共有を行い、具体的な対応の在り方の確認をし、同じ方向性でチームとして支援を行っていくように努めている。

(3)校長の指導性(リーダーシップや関わり)

教育活動を実施するときには、その活動の「ねらいが何か」を明確にし、全職員で共通理解し、計画・実践していくことが大切であると考え。そこで、行事

などを提案の際は、必ず「ねらい」を確認して提案し、全職員が十分理解し、一つになって進めることができるようにしている。

また、カウンセラーとのフィードバックやの際には、必ず参加するようにし、対応が必要な場合は助言を行っている。

(4) チーム学校（機能する組織体制づくり）

本校は、極小規模であるため、全職員で教育活動にあたっている。

児童の様子が気になる場合や教育相談などで気になった点についても、可能な範囲で全職員で共有し、対応についても共通確認してあっている。

(5) 成果

①教育活動をチーム古見として、同じベクトルで推進している。

②海洋教育を中心とする体験活動を児童だけでなく、職員も経験し、充実した学びとなり、学校の魅力のひとつとなっている。

③多くの場で発表したり、交流を持ったりすることで、児童の表現力がつき、自信を持つことができたと考える。さらに、自己有用感が高まり、自己肯定感が高くなってきていると考える。

(6) 課題

①2年生と6年生の複式学級で、全児童と一緒に体験活動を実施している。学年別のねらいを設定するなど工夫を行っているが、学年の差が大きく、発達段階にあった活動ができていない。学年にあった活動内容のさらなる検討が必要である。

6 宮古島市立福嶺小学校の実践

(1) はじめに

本校は、宮古島の最東端にある約2kmの美しい岬。太平洋と東シナ海を一望にできる日本都市公園百景にも選ばれている東平安名崎（ひがしへんなぎき）に最も近い学校で、全児童11名の複式3学級・特支1学級の極小規模校である。低中高学年児童が行事や総合的な学習の時間、その他の活動に全員で活動する機会が多い。現在、学校における課題が複雑化・多様化する中、それらの課題を学校だけで解決することは困難である。そこで、多様な人材を有効活用し、組織として課題の解決を図る「チームとしての学校」そしてキャリア教育を中心としたカリキュラムを展開し、地域の協力の下「魅力ある学校づくり」を展開している。

(2) 実践内容

①福嶺小 IT 部の結成

地域ボランティアの方の協力で福嶺小 IT 部を結成。総合的な学習の時間（福嶺小農業プロジェクト）と IT 部で教科横断的な学習に取り組んでいる。IT 部では、ドローン操縦を学び、また最先端のスマート農業を学び、全児童で地域の協力の下、野菜を栽培し野菜の無人販売を正門前で行っている。

また、リッツカールトン東京のシェフを招き、子ども達が栽培した野菜を使って児童と一緒に調理実習を行った。



『シェフとの調理実習』 『野菜の無人販売』

②全児童で絵本作りし全国出版

児童が「絵本を作りたい」と発したことことから始まった「絵本作り隊」1年生から6年生全員が力を合わせ、ストーリー作りから下絵、色ぬり、タブレットを活用した文書作成と、全ての行程を自分たちで行い、Kindle(キンドル)にて電子書籍として全国出版した。



宮古の新聞で紹介

(3) 校長の指導性（リーダーシップや関わり）

教職員と児童のみでは、負担が大きくなる。そこで地域ボランティアを結成し、地域の協力を頂きながら、多くの体験活動を取り入れることができている。IT 部や野菜作りの活動を全児童で行うことで、異年齢の壁を超え協働する力、相手を思いやる心も同時に育成できている。

(4) チーム学校（機能する組織体制づくり）

本校は学校教育全体を通したキャリア教育を推進し全職員がベクトルを揃え「めざす子ども像」「めざす学校像」「めざす教師像」に向けて一丸となって取り組んでいる。そこには地域との交流を通しながら協働することで無理のない組織体制がつけられている

(5) 成果

6つの自治会長と『福嶺小学校を存続する会結成』7回ほど集まり（22年度から現在までに）、対策や方

法等を検討した。そこで協力体制が整い、地域と学校が繋がった。また地域ボランティアを結成し、IT部の結成や野菜作りプロジェクトへの協力体制が整った。それに、福嶺小 IT 部への期待と応援する方が全国各地から9台のノートパソコンの寄贈があった。それに伴い Wi-Fi 通信料も無料で提供する地域の業者がいらっしゃるなど協力体制がさらに整ったと同時に児童の活動範囲が広がった。

児童も、地域の協力に感謝し協働で多くの野菜作りや「絵本作り隊」の結成から全国出版と、学年隔てなくお互いを尊重し、思いやりを持って多くの取り組みに参加するようになった。

(6) 課題

チーム学校として教師間、地域間は整いつつあるが、教師の負担軽減のためにも地域ボランティアの拡充と活性化が求められる。現在の地域ボランティア12名からさらに増員するため全自治会へアプローチし学校経営について説明とさらなる協力体制の依頼をしていく必要がある。

IV 実践事例

7 今帰仁村立今帰仁中学校の実践

(1) はじめに

今帰仁村は沖縄本島北部にある本部半島北東部に位置している。沖縄の三山鼎立時代は、北山王の居城があり、北部の政治、経済、文化の中心地として栄え、三山統一後は北部統治の要となる。平成12年に今帰仁城跡が世界文化遺産に登録されるなど歴史と自然豊かな村である。本校は、村を東西に2分する今帰仁村役場前十字路から北向けに進み、村道中央線を越地側に300M入った小高い丘に位置し、南側正面に乙羽岳を臨む静かな所にある。普通学級9、特別支援学級4、全校生徒は293名、教職員数は40名である。令和4年度、30日以上の不登校が31名と多く、その要因が「人間関係」「無気力」「不安」等となっている。このほか、個別の支援を必要とする生徒も各学年におり、不登校や生徒指導上の課題にも結びついている。そのため、生徒理解や授業改善等に共通理解を図り、チーム今帰仁中として組織的な取り組み・共通実践をとおして魅力ある学校づくりに努めている。

(2) 本校の生徒指導の重点

- ・生徒間、生徒と教師間の共感的人間関係を築くと共に生徒理解に努める。(かかわる力)
- ・自他を認め、思いやり、協働し、自主性・自律性を含む自己指導能力の育成に努める。(ふりかえ

る力)

- ・対話と活動を重視し、ぶれず、見捨てず、関り続けることを念頭に、将来を見据えた粘り強い段階的指導・支援を行う。(やりぬく力・みとおす力)

(3) 実践内容

「一人の30歩より、30人の一歩！チーム今帰仁中の意識を持つ」

① 校内組織を基盤とした組織体制の構築と教職員の連携の充実

- ・毎週火曜日の4校時に生徒指導部会を位置づけ、管理職、各学年生徒指導担当、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、SSWの参加により、各学年の生徒や支援室、保健室の様子等の確認、検討事項、いじめの認知について確認を行い、運営委員会に資料として提出を行い、各学年主任から学年職員への周知と職員集会において生徒指導主任より全体への報告・連絡を行っている。
- ・各種相談員等(村相談員、要対協)の効果的な活用・連携及び支援チームの結成、ケース会議の開催など、生徒の状況に応じた対応の充実に努めている。



ケース会議



生徒指導委員会

② 支持的風土のある学級経営の充実を図る共通実践

- ・毎月1日を「人権の日」とし、全学級朝の会で人権作文の朗読を聴き、感想と振り返りを行い、その後に学校生活アンケート調査を実施し、いじめの未然防止や早期発見、早期対応・支援に向けた取り組みに繋げている。
- ・全校で実践する3つの共通実践事項
 - 話し手に体を向ける(話し手は声かけをしながら向きが整うまで待つ)
 - 清掃後の振り返り(各清掃場所で振り返りを行う)
 - 今日の MVP・キラ人(教師・友達からの承認と勇気づけ、努力や成長、貢献を見取り学級通信や帰りの会で「キラ人」として発表し自己肯定感・肯定的他者理解を育んでいる。)
- ・全教師による道徳のローテーション授業を実践し、道徳科の授業改善をとおして、道徳性を育む取り組みを実践。



人権の日



道徳授業風景



清掃後の振り返り

③学びに向かう集団づくりを進めるための学級活動や生徒会活動の充実を図る共通実践

・前向きな集団作りをねらいとして、全学級帰りの会で「Vトレ」や休憩時間や放課後を利用して全校で「じゃんけん列車」を実施。

・生徒が生徒主体・主役の行事企画運営。



Vトレ



じゃんけん列車

④協調・協働を大切にした同僚性の構築による「チーム今帰仁中」の実現

・「困っていることはない?」「何かやりましょうか?」等、お互いに声をかけ合い、隙間を埋める働き方を意識した同僚性の基盤(ベース)作り。

⑤外部関係機関と顔の見える関係の構築に努め、問題を共有し、目標を一致させて、薬物乱用非行防止教室の開催等、連携して、事件・事故の未然防止や課題の解決、改善を図る。



交通安全教室

(3)校長の指導性(リーダーシップや関わり)

①生徒指導委員会や個別のケース会議等において不登校生徒や気になる生徒、保護者等の状況を把握し、具体的な対策が組織的に関われるよう指導助言を行っている。

②SSW、SC、村から配置の教育相談員等、外部関係機関との積極的な連携体制(つなぐ)、活用を推進している。

③3つの凡事行動「人の話をしっかり聴く」「明るい挨拶」「環境を整える」を学級・学年・教科・部活動経営での実践の徹底を図る。

④日々の学校、生徒の様子の把握に努め、生徒指導上の問題に関して、「見逃しのない観察」「手遅れのない対応」「心の通った指導」等共通理解・共通実践の徹底を適宜発信している。

(4)チーム今帰仁中(機能する組織体制づくり)

生徒指導に係る情報共有、方針・対応等の決定、個別のケース会議等を行う際には、必ず『チーム』で行うこととしている。メンバーには、関係する教職員だけでなく、SC、SSW、村の教育相談員、その他外部関係機関を加えている。今後さらなる組織体制の活性化には、共通した課題意識を基盤とした家庭や地域、関係機関との情報連携・行動連携のさらなる充実に努めていく必要がある。

(5)成果

①個別のケース会議等、チームとして関係者が連携・協働することにより、生徒、保護者に寄り添った支援体制が構築され、生徒・保護者の安心感の醸成、生徒の変容に繋がっている。

②校内支援室の経営計画を支援が必要な生徒に応じて、共通確認することで、支援室の目的や組織体制が確立でき生徒にとって『安心できる居場所、学習できる場所』として活用できた。

(6)課題

①同僚性を高め、常に組織的対応(チーム)ができる職員の意識改革。

②不登校等生徒の居場所づくりに繋げる新たな外部組織の発掘と連携体制づくり。

③課題解決に向け、チームとして機能するための事例研究等を通じた研修体制の構築とそれに基づいた関係者間の共通理解と共通実践の推進。

8 うるま市立あげな中学校の実践

(1)はじめに

本校はうるま市の中央付近に位置し、在籍777名、普通学級22、特別支援学級7の編制となっている。

今年で創立 62 年目を迎えており、部活動においてはバレーボールやソフトボールなどで県大会や九州大会、全国大会で上位入賞を果たすなどの実績を残している。

教育目標「郷土の誇りを持ち未来を拓く知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成」を掲げ、その具現化に向けて家庭、地域、関係機関と連携を密に図りながら「グローバルで変化の激しい時代を生き抜いていく力の土台づくりに取り組んでいるところである。62 年の歴史の中では生徒による様々な問題行動等が頻発し健全な学校運営、教育活動が実践できない時期もあった。そのような中で平成 3 年に生徒会自らが立ち上がり、「みんなでつくる いいこといっぱい あげな中」をスローガンに、よりよい学校生活に向けた、あげな中 10 箇条を生み出し、魅力ある学校づくりに取り組んできた。その 10 箇条は今年度から新たな 6 箇条として引き継がれ生徒の主体的な活動へつながる大きな柱となっている。しかしながら学校課題は山積しており、学力向上をはじめ、不登校の増加や SNS 等によるトラブル、喫煙や飲酒等の問題行動は後を絶たず、学校は未然防止や指導・支援等の対応に追われているのが現状である。

そのような現状を踏まえ、課題解決に向けた一方策として、校長のリーダーシップと各担当、関係機関等による連携の下、社会性と情動の学習 SEL-8s について市内の小中学校で足並みを揃えた取組みを継続的に実践し生徒の自己指導能力等の育成を図っているところである。また、今回の研究テーマである「魅力ある学校づくり」の推進、サブテーマの～「チーム学校」として機能する組織体制づくり～の視点から、本校の課題解決に向けた取組みの実践例を提示することで会員の皆様から更なるご指導ご助言を賜うこと期待するものである。

(2) 実践内容

① 主体的な生徒会活動の推進

校長として魅力ある学校づくりを進めていくうえで大切にしたいことの一つに主体的な生徒会活動がある。

生徒自らが自分の通う学校に愛着と誇りを持ち、よりよい学校生活を送ろうとする態度や実践は学校全体を明るくし、生徒が行きたくなる学校、保護者が行かせたい学校、地域が応援したい学校へとつながると考えている。

生徒会が掲げ、推進している「みんなでつくる いいこといっぱい あげな中」の 6 箇条は下記の通りである。

- 正しい服装、身なりを心がけよう。
- 明るいあいさつと笑顔が絶えない学校にしよう。
- 何事にも仲間を大切に思いやる気持ちをもとう。
- 人の話を目と耳と心で聞く雰囲気大切にしよう。
- ものを大切に、過ごしやすい環境をつくろう。

○自分の役割を自覚し、積極的に生徒会活動に取り組もう。

② 社会性と情動の学習「SEL-8s」の取組

うるま市では令和 4 年度より「SEL-8s」社会性と情動の学習を市内の全小中学校において推進しており、本校でも理論研究とブロック校による互見授業等の実践に取り組んでいる。

「SEL」とは Social Emotional Learning の略称であり、取り組むことによって、社会的・感情的スキルの向上や自己と他者及び学校に対する態度の改善、学力の向上等が期待される。但し、即効性はなく計画的、中長期的に取り組むことが成果につながると言われている。

本校の抱える不登校や対人関係のトラブルなどの課題からも他者を理解し、共感する力やソーシャルスキルなど人と関わるうえでよい関係性を構築するための能力、自分の感情や考えていること、「自分は何がしたいのか」という自分に気づき理解する力を身につけること、よりよい選択、意志決定する能力等を育てていくことは課題解決へつながるものと捉えている。

③ 自立支援室、教育相談室の活用について

本校では令和 4 年度に不登校生徒及び諸事情により教室に入れない生徒への校内における支援体制を確立し、生徒の社会的自立を促すことを目的に「自立支援室」を設置した。

積極的な活用とスピード感を持った対応を促すため、生徒の状況などに応じて面談や教育相談部会における審査等を後回しにして校長が入室を許可する場合もある。

専任の支援員が配置され、生徒や保護者からの相談、学習のサポート、見守り、登校支援等、学級担任や教育相談担当、SSW等と連携し、生徒に寄り添った支援を続けている。昨年度は 13 名の生徒が利用し、その内の 2 名が教室に完全復帰できた。また、完全復帰までは行かないが 7 名の生徒が一日に数時間は教室で過ごせるようになっている。今年度も 11 名の生徒が自立支援室を利用しており、校内における居場所の一つとして機能させながら教室復帰を目指している。

また、従来から設置されている「教育相談室」についても不登校生徒が教室に入れるようになるまでの相談活動や学習等の場としての機能を有しているが、今年度は加配教員が配置されていないため、担当者が常時相談室に関わるのが厳しい状況にある。そのため、時には学級担任をはじめ、SSWや自立支援室の支援員が対応にあたるなど、生徒の居場所の確保と運用に努めている。

(3) 校長の指導性（リーダーシップや関わり）

学校経営を進めるうえでキーワードとなっているのが

「みんなでつくる いいこといっぱい あげな中」である。生徒会自ら考え示している「いいこといっぱい あげな中 6 箇条」を意識した授業づくりや行事等、すべての教育活動をとおして実践、支援できるよう指示すると共に校長講話やリーダー研修において主体的な生徒会活動の意義等について理解を求めてきた。

自分達の問題は自分達で決める、自分達でできることは自分達でやる、教師が関わりすぎないこと、学校の都合ではなく生徒が何を求めているのか見極めること、寄り添うこと、失敗をさせない導き方もあるが、失敗を恐れず、そこから成長する生徒の力を信じることなどが大切だと考えている。

SEL-8s の取組みでは担当指導主事を招聘しての理論研究会や互見授業に向けての校内研修の内容等に関する指導助言をはじめ、年間を通して計画的・組織的・効果的な取組が継続できるよう「魅力ある学校づくりに関連する市教委予算」の活用を促すなど、取組の充実を図るため積極的に関わっている。

自立支援室の運営に関しても、常に関係職員と情報の共有を図り、必要な対応・支援について指導助言を行うと共に当該生徒や保護者との面談をとおして学校は全力で支援することを常に伝えている。

また、企画委員会、生徒支援部会、教育相談部会、特別支援部会等において、当該生徒や家庭等の現状、経緯、課題等について情報を共有すると共に支援の方針の決定及び関係機関との連携の在り方、交渉等にも直接関わっている。

校長はあらゆる場面で指導助言、決断をしなければならないが、その根拠を分かりやすく明確に示し、学校経営を円滑に効果的に進めることで生徒の成長及び職員の資質能力の向上に反映させていきたいと考えている。

(4) チーム学校（機能する組織体制づくり）

目指す学校像の一つに「生徒ひとり一人に居場所があり、輝ける学校」を掲げている。

本校では管理職を含む教員 46 人の他、スクールサポーター、SSW（2 人）、特別支援教育支援員（2 人）学習支援員、自立支援室支援員が配置されており、各教室をはじめ、生徒相談室や教育相談室、自立支援室、カウンセリング室等において、様々な事情を抱えた生徒に対して、その特性や状況などに応じた支援・指導に取り組んでいる。また、必要に応じて、臨床心理士、うるま警察署、児童相談所、うるま市子育て世代包括支援センターうるま市社会福祉協議会、うるま市教育支援センター「ふたば」、うるま市適応指導教室「さわやか学級」等と連携し、生徒及び家庭等への支援の充実を図っている

(5) 成果

①いいこといっぱいあげな中の 10 箇条や 6 箇条を示し、教師と生徒の共通の目標を意識したことで、生徒会活動に主体性が出てきた。これまでは「求めてくるもの、要求するものがほとんどであったが、様々な学校課題に気づき自分達に何ができるのか考え、実践しようとする態度が育ってきた。

②SEL-8s への取組では具体的な成果はまだ確認できる段階ではないが全職員が SEL-8s の理論研究及び実践を経験したことで試行錯誤しながらも意欲的に取り組んでおり、今後の小学校を含めた組織的、継続的な実践によって生徒の社会的能力等の向上へつながることが期待できる。

③自立支援室の運用では令和 4 年度に 13 名の生徒が利用し、その内の 2 名が教室に完全復帰できた。また、完全復帰までは行かないが 7 名の生徒が一日に数時間は教室で過ごせるようになっている。今年度も 11 名の生徒が自立支援室を利用しており、校内における安全安心な居場所の一つとして機能させながら教室復帰を目指している。令和 4 年度の新規不登校は 1 名であった。

(6) 課題

①主体的な生徒会活動や特別活動を進めていくうえで教師が先に計画を決め、生徒の意見や考えなどが活動等に反映されないケースがまだ見られることから教員の更なる意識改革が必要。

②SEL-8s の理論、授業実践については、初めて学ぶ教師も多く、更に経験値を踏んでいく必要がある。

③自立支援室及び教育相談室の運営を進めていくうえで、生徒支援加配が配置されなかったことの影響は大きい。「チーム学校」が健全に機能していくためには必要な人材が適切に配置されることが重要であると考ええる。また、チーム学校は学校内外の人材を如何に有効に適切なタイミングで活用できるかが課題の一つだと考える。

9 那覇市立石嶺中学校の実践

(1) はじめに

本校では、昨年度より総合的な学習の時間を核としたキャリア教育の推進を通し、未来社会を創造するエネルギー「錬の心」を持った生徒の育成を目指し、様々な教育活動を展開した。自らの学びを調整できる生徒の育成を目指した「錬心ダイアリー」を導入、生徒に生き方のモデルを示す夢実現キャリア講演会の設定、夏休みのリーダー研修会と連動させ異学年の絆を育むことを目的とした学校行事「錬心

祭」など、教育活動全体を通じたキャリア教育の推進に取り組んできた。昨年度のグランドデザイン評価における「わたしには良いところがあり、やればできると思う」の肯定的な回答が84.5%、「私にはなりたい夢や職業がある」が71.0%、「学校での学びが将来の仕事や生活に役立つと思う」が90.3%、「総合的な学習の時間・錬心タイムに意欲的に取り組んでいる」が79.5%と、生徒の回答からは、何のために学習するのか必要性を漠然ととらえてはいるが、自身の学びを主体的に将来のために役立てようという実感にはつながっておらず、特に探究的な学習には依然として課題が見られることから、今年度は総合的な学習の時間「錬心タイム」の改革を校内研究に位置づけ、キャリア学習と探究的な学習の二つを柱としたプロジェクト型探究学習の実践に、全職員で取り組むこととした。

(2) 実践内容

① 総合的な学習の時間「錬心タイム」の改革

錬心タイムにおけるプロジェクト型探究活動をキャリア学習と探究的な学習の二つを柱とした構想図を作成し、各学年フロアにも掲示した。教師だけではなく生徒自身も今年度から共にこれに向かって取り組んでいくんだという意識につなげることができた。また、学年主任を中心にプロジェクト型探究活動の年間計画を作成した。従来の職場体験に代わる「キャリアスマイルプロジェクト」を昨年度から導入、修学旅行の準備に使われていた時間は探究にするために「錬心ツアープロジェクト」に内容を変更、進路学習に使われていた時間は昨年度のワークショップ型校内研究で職員が提案した「ダイヤモンドプロジェクト」に内容を変更している。



キャリア学習と探究的な学習を柱とした「錬心タイム」構想図

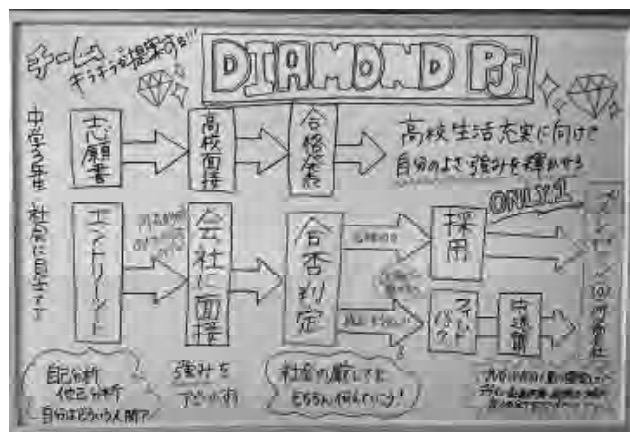
【図1 錬心タイム構想図】

② プロジェクト開発のためのワークショップ

石嶺中学校では年間を通じたワークショップ型の校内研究を充実させることで、職員のベクトルをそろえ、同僚性の構築とあわせて、職員一人一人が自身の強みを発揮しながらチームに貢献でき、学校改革に参画しているという実感につなげることを目指している。また、夏の校内研究ワークショップにはPTAの代表や、石嶺公民館の社会教育指導員にも参加してもらい、共にホワイトボードミーティングを行った。学校改革に向けて保護者や地域の理解を得るとともに、協力体制の構築にもつながっている。回を重ねるごとに職員はワークショップのファシリテーターとしての力量を高め、ロールプレイの表現力を発揮しながら、共感的で同僚性の高い職員集団へと成長している。



【グループのアイディアをロールプレイで発表】



【校内研で職員が提案したダイヤモンドプロジェクト】

③ 「錬心タイム」授業研究会の実施

令和5年度から本格的にスタートしたプロジェクト型探究活動は、生徒自身が興味・関心をもとにテーマを設定し、共通のテーマを持った少人数もしくは1人で探究を進める。個別最適な学びと、検討会や発表会での協働的な学びの促進を目指し

ている。初めての取り組みになるため、どう導いたら教科横断的に社会とつながれるのか模索しながらの実践となっている。6月には3学年の「鍊心大陸プロジェクト」を1、2学年の職員が参観し、授業研究会を実施した。



【グループのテーマ設定理由を聞いて質問し合う】

授業後のワークショップでは、夏休みのフィールドワークで専門家や社会教育とどうつなげるか、アウトプットの質を高めるためにどのように支援するかなどを検討した。

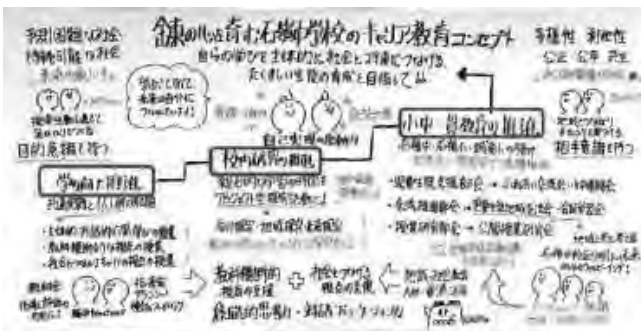


【グループで検討した内容を発表する職員】

(3) 校長の指導性（リーダーシップや関わり）

① コンセプトメイキング

ホワイトボードに本校のキャリア教育コンセプトを表し、学力向上推進、校内研、小中一貫教育の三つをキャリア教育で連動させることで、別々のことに力が分散されるのではなく、何のためにこれをやるのかという意義の共有と、一体的に推進するものであることを全職員で共通確認した。



【石嶺中キャリア教育コンセプト】

② グランドデザイン評価によるマネジメント

本校が力を入れて取り組んでいる教育活動の評価改善を図るために、グランドデザイン評価に昨年度からキャリア教育の推進に向けての項目を設定した。「鍊心タイム」や「鍊心ダイアリー」について教師の取り組みに対する生徒や保護者の現状を把握することで、次年度のグランドデザインにどのように反映させるかを検討する。

③ 改革の主となる研究チーム

今年度は総合的な学習の時間の改革がスムーズに行えるよう校務分掌を見直した。総合主任と研究主任を一元化し、進路・キャリア主任との協働で研究の推進を図られるようにした。またそれを支える各学年主任、特別支援・不登校生徒の探究活動担当者も研究推進部に位置づけた。実践しながら柔軟に対応するプロジェクト型探究活動研究チームを校長がバックアップする校内体制を整え、学び合う教師集団へと成長している。

(4) チーム学校（機能する組織体制づくり）

① 週時程に位置づけた「鍊心部会」

今年度から前述の研究チームに、教頭、教務を加えた研究推進部会「鍊心部会」を週時程に位置づけた。研究主任が作成した導入プレゼンの検討やテーマ設定するためのワークシートや思考ツールの検討、フィールドワークのための手立てや報告書の様式の検討など、「鍊心タイム」の各プロジェクトに関する様々な疑問をここで話し合う。また、各学年の取り組みの進捗状況の確認と、今後の見通しについて話し合うなど、毎時間とても充実している。この積み重ねが研究の足跡となることから、実践的な校内研究の推進が図られている。



【1学年の「鍊心夢プラン」でなりたい自分を描く】

② 関係性を築く自己表現ワークショップ

生徒同士が意見を出し合える支持的風土の醸成のために、まず教師集団で関係性を築く自己表現ワークショップを年度始めの校内研で実施した。校長がゲームファシリテーターを行い、殻を破り仲間の中でありのままの自分でいられるように、少しずつ関係性が温まるゲーム構成にしている。実際に生徒におろす場面でのどのような工夫が必要かをシェアした

がら、新旧職員で楽しみながらチーム力が発揮できる仲の良い職員集団となっている。



【インプロとプロジェクトアドベンチャーのゲーム】

(5) 成果

- ①総合的な学習の時間の年間計画を見直しプロジェクト型の探究学習を設定することができた。
- ②研究推進部会を週時程に位置づけたことで、ショートスパンで実践しながら評価改善ができる。
- ③教師が主体的に改革を推進する校内研究体制の構築につながった。

(6) 課題

- ①生徒が探究の成果を地域社会に発信する「錬心博」の具体的な計画と運営。
- ②プロジェクト型探究活動における社会教育施設、地域人材や資源の活用の推進。
- ③教師による主体的な研究の推進とそれに伴う充実感と多忙感の相関関係の把握。

10 糸満市立潮平中学校の実践

(1) はじめに

本校は、糸満市の北西にある潮平地区、阿波根地区に位置している。21世紀のスタートと共に平成13年4月に西崎中学校より分離・開校し、糸満市内で6番目の中学校となる。

生徒は、潮平小学校区及び光洋小学校区の一部地域から進学してくる。令和5年度の生徒在籍数は298名、普通学級10・特別支援学級3（知的2、情緒1）合計13学級で編成である。

(2) 実践内容

- ① 週時程に設定された2つの委員会：定例化

ア 生徒支援委員会：木4校時

◇構成メンバー：管理職、生徒指導主任、教育相談担当、養護教諭、学年生徒指導

【成果】令和4年度

- 担任（学級・教科）や教育相談担当、自立支援員と連携を深化させ、学校・学級に復帰できた生徒が7名いた。
- 日々の学校生活を充実させ、生徒と良い信頼関係を築き、授業や部活動でも生徒一人ひとりが目標

を持って頑張ることができた。

【課題】令和4年度

- 長期欠席生徒が多かったので、SSW・SCや糸満市こども未来課や関係機関等を含めて、支援体制の強化に努める必要がある。

その他：生活アンケート、家庭訪問、教育相談（指導・支援）、三者面談など

イ 教育相談委員会：月4校時

◇構成メンバー：管理職、生徒指導主任、教育相談担当、養護教諭、学年教育相談係（学年主任）、SC、SSW、こども支援サポーター、市教育相談員（月1回）

【成果】令和4年度

- 学年主任が参加することで、担任会・学年会で迅速な確認、対応策が図れた。
- SCとのコンサルテーションや関係機関との連携や助言を受けて緊急時の対策ができた。
- 校内自立支援教室「すんじゃルーム」での取組では、本人のペースとタイミングを図りながら学校行事（修学旅行・PBL授業・学年レクなど）の参加ができた。
- 小学校の生徒指導委員会にも参加し、連携を図ることができた。

【課題】令和4年度

- 自立支援教室の利用は、学習課題や学級復帰時のタイミングなど、担任（学級・教科）・学年・本人の考えを把握し、共通理解と細かい確認が必要である。

- 教育相談旬間の時間の確保

- 不登校生徒及び自立支援教室等の利用している生徒の適切な評価

- 小中連携の充実に関連する教育相談

②生徒の実態把握

沖縄県版児童生徒質問紙ならびに糸満市で実施しているi-checkの調査結果を通し、分析・検証を行い、生徒理解及び授業改善の深化に繋げている。

(3) 校長の指導性（リーダーシップや関わり）

- ①管理職間の綿密な企画・運営と報連相確

- ②各種会合への積極的参加

- ③「魅力ある学校づくり」事業を活用した支持的風土の醸成を図る。

- ④「ライオン美らaction」事業を活用して健全育成の充実を図る。

- ⑤研究授業の参観および授業研究会への確実な参加

(4) チーム学校（機能する組織体制づくり）

- ①生徒支援委員会の充実
教職員間が職員会議、学年会、担任会の中で共通理解を図り、支援体制を構築する。
- ②校内自立支援教室の充実
主に心理的・情緒的不安な理由で、学級に入室で生徒を一時的に通級させ、様子を見る。
- ③教育相談委員会の充実
教育相談は教育活動全般を通して行われる活動としてとらえる。

いつでも	授業中・休憩時・放課後・部活動
どこでも	学校（教室・図書室・廊下・その他）家庭および地域
だれとでも	校長・教頭・養護教諭・司書・学級担任・教科担任・部活動顧問等・SC・SSW・関係機関等

- ④校内研
ア「聴く力」の育成：ルーブリックや掲示物

イ 支持的風土の醸成を通じた授業改善

- ⑤小中連携推進部会：定例会（月1回・毎月第2火）
潮平小学校管理職との共通理解と情報共有の場
- ⑥その他：人権放送の工夫改善、糸満地区学警連・糸満市民会議との協働体制
未然防止・再発防止、健全育成の充実、居場所づくりの協働
- (5)成果【令和5年6月までも含む】
- ①全学年の出席状況が良好である。特に中学1年生は、全員出席となる学級の出現と連続がある。
- ②学年単位の活動が充実している。学年プログラム委員会と学年主任との信頼関係が整っている。
- ③PTA組織の「校外指導部」が、保護者主体の活動へ企画・運営を始める。
- (6)課題【令和5年6月までも含む】

- ①定例会の資質向上を図る（支援内容を協議する）。
- ②不登校及び配慮を要する生徒の評価方針を整える。
- ③生徒会執行部と学年プログラム委員会との連携強化を図る。
- ④地域活動の協力に関して、「働き方改革」と照らし合わせて協議・検討を進める。

11 宮古島市立鏡原中学校の実践

(1) はじめに

本校は、宮古空港の東方に隣接し、宮古島のほぼ中央に位置している。元来、農村地域であるが、保護者の職業は多岐にわたっている。近年、団地の増加や交通の便、自然環境が良いことから他地区からの移住が多い。

校区民は、勤勉実直で、本校教育への関心が高く、学校行事への参加協力は、本校教育の発展に大きく貢献している。

そうした地域の教育に寄せる熱意が生徒の活動意欲を促し、スポーツ・文化面で対外的に優秀な成績を上げている。学校規模は普通学級6、特別支援学級2、生徒数120名の小規模校である。部活動も盛んで運動部活では、野球部、女子バスケットボール部、男女バレーボール部、男女バドミントン部、美術同好会、郷土芸能同好会などの文化系の活動も行っている。準要保護世帯は20%、不登校生徒、学級に入りきれない生徒も数人いる。また、特別支援学級の生徒や学級の中の発達障害を抱えた生徒への関わり方も課題として存在している。

生徒一人一人が自分のよきや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の中で逞しく生きる生徒の育成を目指し、「学びのまほろばで生徒も教職員も安心・安全で成長できる魅力的な学校づくり」を目指し【チーム鏡原中】としてベクトルを揃え全教職員で組織的・計画的・継続的に「報告・連絡・相談・確認」を大事にして共通理解を図りながら取り組んだ。

キーワードを【全職員】【実態把握】【道徳教育】とし、保護者、地域や各関係機関と連携して、校訓「有志竟成」を校長自ら実践し、学校教育目標にせまる。

(2) 実践内容

①「全職員」

毎週、組織的、計画的に、学年会(月・火)→生徒指導委員会(水)→職員朝会(金)で情報を共有する。

(ア)「学年会」

毎週始めの月曜日か火曜日に学年会を開催し、休みがちな生徒の近況や気になる生徒の実態把握、現在の学年

の様子について情報交換を行い共通理解し、これからの取り組みについて確認した。

併せて、「道徳の授業」についても活用の資料活用・主発問等について話し合う時間としている。

(イ)「生徒指導（支援）委員会」

毎週水曜日に生徒指導委員会を開催している。○各学年共通の連絡事項の確認。○各学年代表が週初めの月曜日・火曜日の学年会で話し合われた内容の報告等。○養護教諭から保健室の様子等の報告等。○教頭・○校長、管理職の指導・助言等で方向性を確認する。その内容は生徒指導主任がまとめ、その週末（金曜日）の職員朝会に全職員確認できる1枚のシートにまとめた「資料：まほろば通信～共通確認事項～（以下：まほろば通信）」を作成している。

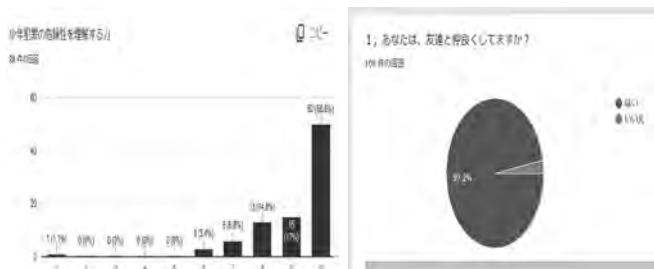
(ウ)「職員朝会」

毎週金曜日に職員朝会を開催している。その中で生徒指導主任が今週の生徒指導委員会での確認事項を「まほろば通信」で説明・報告を全職員で生徒情報の共通理解を図っている。その際「まほろば通信」は机上の置き忘れ防止等を図る為、電子媒体で提供している。

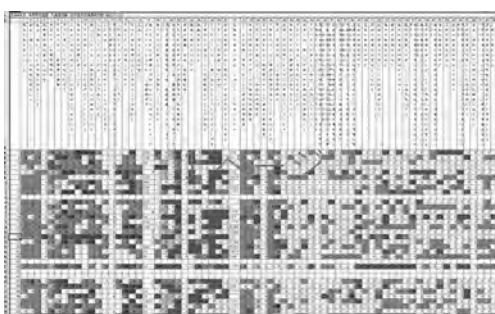
②「実態把握」

(ア)タブレットの活用

毎月の生活アンケートや行事の振り返り等を一人一台タブレットを活用して実施している。全職員閲覧可能に設定している。ログインしての回答なので気になる生徒やいじめの発見、ヤングケアラー等についてなど、早期発見で早期に対応している。



(イ)各種調査等の活用



全国学習状況調査の生徒質問紙、沖縄県生徒質問紙等各種調査を分析、処理。視覚化して共通理解を図り、対

応策を確認して取り組んでいる。

校長で個人の課題・集団の課題等を視覚化して、各学年会で表の見方、活用方法について説明した。

(ウ)定期教育相談：全校生徒対象（担任対応）教育相談旬間1，2年の生徒希望調査を全職員対応する。チャンス相談：生徒への声かけや言葉かけの機会をとらえ相談する。呼び出し相談：観察や諸調査などの資料、生徒の問題に気づいた時、その生徒を呼んで相談する。自発相談：生徒の自発的な来談による相談活動



(エ)二者面談三者面談の実施

気になる生徒、不登校や不登校気味、教室に入りきれない生徒とその保護者に対しては、定期的、長期休業中、臨時的に二者面談・三者面談の実施を行い、「困り感に寄り添い具体的な支援について」相談している。

③「道徳教育」

(ア)指導形態を工夫し、全職員体制で道徳教育を展開する。(ローテーション授業や縦割りチームでの授業等)

(イ)年度の初めには、道徳の時間のガイダンスを行い、「道徳授業3つの約束」や「評価の仕方」等について、全職員・全生徒で確認し、各学級での授業実践に入る。

(ウ)言語活動の充実を図る。(他者対話と自己内対話による支持的風土の醸成)

(エ)学年会等で道徳授業について検討する時間を設け、教材や発問等について確認する。

道徳授業「3つの約束」 安全教科・領域において「授業の3つの約束」として取り入れる。



(3) 校長の指導性（リーダーシップや関わり）

①学校経営の中心に生徒・職員の安全・安心を最優先することを、全職員で確認した。

②年度当初に全職員「報告・連絡・相談・確認」で共通理解のもと生徒指導・学力向上に取り組むことを。

③校長自ら情報を収集し、職員に状況を説明し、生徒の良さや課題を説明、指導の方向性を確認し全職員でベク

たい自分」・「夢実現」へ向けて取り組んでいる。

図2 (キャリアパスポート)

②『生徒理解・支援』の充実へ向けた組織的な取組

(ア) 各会の連動

担任会・企画運営委員会・校内特別支援委員会を、単体で終わらせず連動するようアドバイスをします。

長期休業中には、校内研で全生徒の強み・課題・手だてを分析・考察を行い、継続支援を行っている。

(イ) 毎月の生徒指導アンケートの実施

毎月のアンケートの実施から悩みや不安、課題を抱えている生徒の状況に応じて、「チーム久中」全職員で共有できる体制を整えている。安心・安全な環境づくりに努めている。

(ウ) ゆんたくタイムの実施

学期に1回の教育相談週間を設けている。週時程の中に「ゆんたくタイム」を位置づけて、相談時間の確保ができるよう環境を整えた。また、個々の教育相談シートを作成することにより、切れ目のない支援ができる体制づくりと生徒、保護者との信頼関係の構築につながった。

図3 (毎月のアンケート・教育相談シート)

③『特別支援教育』との連携

(ア) 校長、教頭、教務は、企画運営委員会・担任会・校内特別支援委員会に参加し、不登校や気になる生徒、保護者対応等について報告・連絡・相談・確認を受けている。

(イ) 個別の支援計画の作成

今年度は、「特別支援教育の視点での関わり方」について、担任や担当職員に任せるのではなく全職員で「気になる子」の授業・行動観察を行い、地区特別支援専任コ

ーディネーター・SCの助言をもらい個別の支援・指導計画を作成し、生徒・保護者等への対応をしている。

また、校内研修では、理論研究をはじめ、出前授業等を通して共通理解を行うことで、組織的に共通実践ができています。

図4 (個別の支援・指導計画)

(ウ) 小中連携

年に2回の合同校内研や生徒支援に関する情報交換会、行事等を行っている。

④『保護者・地域』との連携

本校は、地域との結びつきが強く学校行事と地域行事が全てにおいてリンクしている中、地域と連携し教育環境の整備、地域人材の活用、地域行事への積極的な参加、のぼり旗の設置(校区内に10ヶ所)、地域内の清掃や花植え等を行っている。「地域の子どもは、地域で育てる」土壌がある中、地域の絶大な後押しをもらい、本校教育活動が行われている。



図5 (のぼり旗の設置の様子)

(3) 校長の指導性 (リーダーシップや関わり)

①職員同士がつながる・話し合える体制づくりを目指し、校内人事配置を心がけている。

②担任会・企画運営委員会・校内特別支援委員会において、校長として具体的な対策や組織的に関われるよう指導助言を行っている。

③地区特別支援専任コーディネーターの派遣要請、SCとのフィードバック、八重山福祉事務所との連携を通して、職員への情報提供や指導助言を行っている。

(4) チーム学校 (組織体制づくりや活性化)

校長をはじめ、共同経営者である教頭、教務も会に応じて参加メンバーは替わるが、企画運営委員会・担任会・校内特別支援委員会へ参加することで、より組織的に協働的な体制づくりとなっている。また、各会の活性化にもつながっている。

(5) 成果

- ①毎日の学習計画、振り返りシートの活用から、家庭学習の習慣化が図られた。
- ②「チーム」で関わり丁寧な生徒支援を行うことで保護者との関係づくりが構築され、不登校の減少につながっている。(R3: 4名→R4: 2名→R5: 1名)
- ③全職員参加で個別の指導計画を作成することで、現状の見立てや具体的な対応策を実施することができた。
- ④個別の支援計画の作成、保護者との話し合いを実施。生徒、保護者に寄り添った支援から生徒、保護者の困り感が減り、安心・安全な環境づくりができた。

(6) 課題

- ①個別の支援・指導計画のもと実践を行い、より効果的に活用するために加筆・修正等を加え、さらなる計画書づくりを行いアップデートしていく必要がある。
- ②切れ目のない支援を行うためには、離島へき地校で職員は2～3年で異動のため、計画性を持って校務分掌配置等も必要である。また、小学校は隣接はしているが並置校ではないため、小中連携を確実に実施することが大切である。
- ③今後、校内適応教室が必要となった場合、教室の確保は課題である。
- ④特別支援教育支援員、学習支援員の未配置のため、教育委員会と連携し、人材の確保が喫緊の課題である。
- ⑤地域連携は不可欠である。地域との結びつきをより強固にするため公民館役員、学校評議員等と連携し、人と人を結ぶ・つなげることが大切である。

V まとめ

学校現場においては、社会の急激な変化に伴い、ICTの活用も含め高度化・複雑化する諸課題に迅速に対応することが強く求められている。さらにコロナの出現により、家庭や学校においては様々な課題が新たに浮き彫りとなり先生方の負担を大きくしているのも周知の事実である。教師として、校長として子どもたちのために「何が必要なのか」、「何をしなければいけないのか」を改めて考えさせられている。教職員には専門的知識・技能や資質の向上等の対応力。校長においては強いリーダーシップの下、校内外の協力を仰ぎながら、「チーム学校」として組織的かつ効果的な対応力が必要とされている。【魅

力ある学校づくり】のためには【チーム学校】としてどのような取り組みがなされているのか校長の立場なら誰もが知りたいと感じているはずである。沖縄県版魅力ある学校づくりパンフレットにも「授業が分かる・主体的に活動する・夢や希望を持つ」など指標となる参考資料もあるが、学校現場においては、各学校の具体的な実践事例が一番のお手本ではないだろうか。

今年度の本研究における実践事例では、校長先生のリーダーシップのもと、【チーム学校として機能する組織体制作りの取り組みが記載されており、校内外（SC、SSW、教育相談担当や生徒指導担当、様々な外部機関）との連携強化を図っていることも記載されている。

今後とも、本研究の実践、成果、課題等を次年度へ活かすことが本県各学校の「チーム学校」の支援と活性化につながり、「魅力ある学校づくり」の充実に資することを期待したい。

結びに、自校の業務も大変お忙しい中、本研究紀要のために実践事例を寄稿していただきました校長先生方、また、とりまとめの各地区担当の校長先生方に感謝を申し上げます。交流やコミュニケーションの機会が少ないですが、今後とも連携協力し諸課題に対応していきましょう！

各校長のリーダーシップのもと、業務に邁進されることと一刻も早いコロナの終息を願っております。

令和5年9月 沖縄県小中学校長会 生徒指導委員会

教育改革委員会

【小学校】

「創意工夫を生かした特色のある教育活動展開について ～ウェルビーイングの視点を意識して～」

I	はじめに	47
II	調査研究の進め方	47
III	調査項目と結果及び考察	49
IV	まとめ	55

【中学校】

部活動の適正化について ～「働き方改革」への取り組み～

I	はじめに	57
II	各地区（国頭・中頭・那覇・島尻）の先進地域の取組 状況等の紹介	57
III	考察	68

教育改革委員会

◎委員長

小 学 校	氏名	所属校	中 学 校	氏名	所属校
	大城 健	久辺小		伊波 寿光	伊江中
大庭 真由美	与那城小	◎由 博文	宜野湾中		
古賀 義之	当山小	仲間 健	城北中		
◎赤嶺 智郎	とよみ小	大城 直之	糸満中		
下地 辰彦	東小	宮國 幸夫	平良中		
長遠 順二	白浜小	宮良 健	船浦中		

「創意工夫を生かした特色のある教育活動展開について ～ウェルビーイングの視点を意識して～」

沖縄県小学校長会 教育改革委員会

I はじめに

新しい学習指導要領の総則には「学校の教育活動を進めるにあたっては、各学校において、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、児童に生きる力を育むことを目指す（途中略あり）」と示されている。

そのような中、学校では「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」においては、校内研究はもとより普段の授業でも学校をあげて取り組みが行われ、一定の成果が報告されている。

一方「特色ある教育活動の展開」においては地域の教育資源などを活かした教育を行うことで、豊かな学びが展開されることは理解されているが、3年間にわたるコロナ禍での学校運営や子供達を取り巻く様々な教育課題への対応、そして「カリキュラム・オーバーロード」といった教育内容過多も指摘される中で、十分な取り組みや成果が得られたとは言い難い現状もある。

令和5年2月に行われた次期教育振興基本計画（中教審）において次期計画のコンセプトとの1つとして「日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」があげられた。ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、会議では「ウェルビーイングの実現とは、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなることであり、教育を通じて日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上を図っていくことが求められる」と提示している。

以上のことから、学習指導要領の理念と次期教育振興基本計画を踏まえ「特色ある教育活動」の実現へむけての本県小学校の進捗状況、意識調査、そして取組み事例の収集から、良い取り組みを学ぶことに加え、ウェルビーイングの向上につながる取り組みについても考察し、今後の一助につなげていきたい。

II 調査研究の進め方

1 目的

特色ある教育活動の進捗状況や意識調査及び取組み事例収集から、効果的な教育活動につながる事例共有とそこからウェルビーイングの視点を取り入れた考察を行う。

2 対象 県内全小学校（小中併置校、教育一貫校を含む）

3 調査方法 各地区小学校校長へのwebアンケート方式

4 アンケート実施危期間 令和5年7月25日（火）～8月2日（水）

5 調査項目

1「本校の特色」を捉えていますか

2「特色ある教育活動」は児童どの様な教育効果があると考えますか（最も当てはまるもの1つ）

- ア たくましく生きていく力の向上
- イ 豊かな人間性の向上
- ウ 一人一人の個性伸長
- エ 体験活動等によって、視野を広げ、実感をもって課題解決学習に取り組める
- オ 実体験を中心とした学びからの表現力の向上
- カ 地域への愛着と誇りを持つこと
- キ 効果的に知識を身につけられる
- ク 学びに向かう力の向上
- ケ 自己肯定感や自己有用感の向上

3 「特色ある教育活動」は学校教育全体にどの様な効果があると考えますか。

- ア 教師が自分の学校の強みを新鮮な目でもう一度見直し、創意工夫を凝らす
- イ 学校が活性化し教育の質が向上する
- ウ 地域の素材や人材を活用することにより、学習内容が豊かになる
- エ 教師のやりがいを向上させる
- オ 地域に開かれた学校づくりに貢献する
- カ 豊かな人間関係を身に付けさせることができる
- キ 自己教育力の育成
- ク 個性に合った教育を受けさせることができる

4 貴校では、学校全体で「特色のある教育活動」に取り組んでいますか。

- ア 全体で確認をして全ての学年・学級で取り組んでいる
- イ 全体では確認はされていないが全学級で取り組んでいる
- ウ 全体で確認をし、一部の学年・学級で取り組んでいる
- エ 全体では確認はされていないが、一部の学年・学級で取り組んでいる
- オ 全体では確認はしたが、取り組みはまだされていない。
- カ これから周知を図り取り組んでいく予定である
- キ 現時点では全体で確認をする予定はない

5 「特色ある教育活動」を推進していく上で課題となっていることは何だと思えますか。

- ア 教師の意識がそこまで高まっていない
- イ 教材研究・教材準備に関する課題があること
- ウ レディネスを揃えることや学習進度に関する課題があること
- エ 見取り・評価や学習ログに関する課題があること
- オ 学習の定着に不安があること
- カ 教師の推進能力にばらつきがあること
- キ 特色ある教育活動の進め方がよく分からない
- ク 児童生徒の能力にばらつきがあること
- ケ 家庭への理解や協力が得られていない（得られにくい）こと
- コ 地域・学校の特色があまりないこと
- サ コロナ禍等での教育活動の制限

6 「特色ある教育活動」を推進していく上で重要なことは何だと思えますか。（1つだけ選択）

- ア 教師の「特色ある教育活動」へ対する知識
- イ 教師の「特色ある教育活動」へ対する意欲
- ウ 管理職の「特色ある教育活動」を推進する知識
- エ 管理職の「特色ある教育活動」を推進する意欲
- オ 地域と学校を結ぶ役割を担うコーディネーター等の人材
- カ 保護者の理解と一家庭との連携に関すること
- キ 教材研究・教材準備に関すること
- ク コンピュータ・情報通信ネットワーク等の環境
- ケ 地域の自然、学校周辺環境の情報
- コ 地域の教材や地域の人材を生かした学習の位置付け
- サ 地域で児童が活躍する場の位置付け

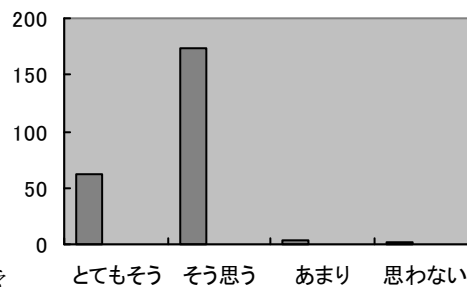
7 「特色ある教育活動」の取組で、他校の参考にあるような事例があれば教えてください

- 7-（1）上記取り組みによる児童への効果をご記入ください
- 7-（2）上記取り組みによる教職員への効果をご記入ください

Ⅲ 調査項目と結果及び考察

1 「本校の特色」を捉えていますか（回答239校）

ア とても思う	62校 (72.4%)
イ そう思う	173校 (25.9%)
ウ あまりそう思わない	3校 (1.3%)
エ そう思わない	1校 (0.4%)



考察：多くの学校（98.3%）で自分の学校の特色は捉えられていることが分かった。より良い学校づくりに「学校の特色」を活かすということは校長として大切だと考えられていることが示唆された。

2 「特色ある教育活動」は児童にどのような教育効果があると考えますか（最も当てはまる1つ） ＜上位回答5：86.5%＞

①豊かな人間性の向上	67校 (28%)
②地域への愛着と誇りを持つこと	57校 (23.8%)
③体験活動等によって、視野を広げ、実感をもって課題解決学習に取り組める	33校 (13.8%)
④自己肯定感や自己有用感の向上	32校 (13.4%)
⑤たくましく生きていく力の向上	18校 (7.5%)

選択理由より

- ・本村がキャリア教育を柱として教育活動を展開し、地域コーディネーターと学校、担任が連携して地域素材を活用し、自ら課題を見つけ解決していく授業を展開している。
- ・地域の人材を活用し、児童が、学校に対する地域の思いを感じる場を作っている。地域に誇りをもつことで自尊感情の高まりが期待できる。
- ・学校教育は、集団生活の中で他者と関わりながら教育活動を通して人間性が広がり、深まり、豊かになっていくと考えるから。
- ・この学校ならではの行事や体験活動を実施することにより、保護者や地域の方々とのコミュニケーションができ、励まされたり、感謝されたりすることで、子どもが自分に自信を持つ機会となっているように感じる。

考察：調査結果と、選択理由から「特色ある教育活動」の児童への効果は、地域のことを学校と地域人材が協力して授業を行うことで「豊かな人間性」「地域への愛着や誇り」「自己肯定感」など子供たちの生きる力に結びつく大切な資質能力の向上が期待されることが分かった。

3 「特色ある教育活動」は学校教育全体にどのような効果があると考えますか（当てはまる1つ） ＜上位回答5：全体の94.5%＞

①地域の素材や人材を活用することにより、学習内容が豊かになる	82校 (34.3%)
②学校が活性化し教育の質が向上する	56校 (23.4%)
③豊かな人間関係を身に付けさせることができる	31校 (13%)
④教師が自分の学校の強みを新鮮な目でもう一度見直し、創意工夫を凝らす	29校 (12.1%)
⑤地域に開かれた学校づくりに貢献する	28校 (11.7%)

選択理由より

- ・地域人材には、その分野の専門性を持った方や知識・経験を伝達し安全確保へ繋げて下さる方がおり、その活用は、子ども達の知識・技能の向上・経験値に繋がり学習内容が充実すると考える。
- ・地域の教育資源を活用することで、学びの有用性を子ども自身が感じやすいと考える。
- ・特色ある教育活動を展開することで、教師も子供も自分の学校に誇りを持ち、何事にも前向きに取り組み、さらにより良い学校づくりを目指そうと好循環が生まれ、学校

全体が活性化すると考える。

考察：調査結果と、選択理由から「特色ある教育活動」は地域の素材や人材を学校で効果的に活用することが大切で、それがうまく行くと学習内容が豊かになり、児童だけでなく教師にも良い効果があることが示唆された。

4 貴校では、学校全体で「特色のある教育活動」に取り組んでいますか（当てはまる1つ）。

<上位回答3：全体の98.1%>

- | | |
|---------------------------|--------------|
| ①全体で確認をして全ての学年・学級で取り組んでいる | 180校 (75.3%) |
| ②全体で確認をし、一部の学年・学級で取り組んでいる | 33校 (13.8%) |
| ③これから周知を図り取り組んでいく予定である | 9校 (3.8%) |

選択理由より

- ・年度当初に全体で取り組みことを確認し、学校全体で取り組むことを基本とするが、その都度無理ない程度で取り組むことを確認しながら「働き方改革」にも考慮して実施している。
- ・「特色のある教育活動」だからと言って、なにか特別なことをやっているわけではない。通常の取り組みとして、全職員で確認して全職員で取り組んでいる。

考察：75%の学校で全学年・学級での取り組みが行われていることが分かった。そのためには、年度当初に取り組みの確認が行われている。また「無理なく」「特別なことでなく」のも全体ですすめていくときのヒントとなることを感じた。

5 「特色ある教育活動」を推進していく上で課題となっていることは何だと思えますか。

<上位回答5：全体の83.2%>

- | | |
|-------------------------------|-------------|
| ①教師の推進能力にばらつきがあること | 73校 (30.5%) |
| ②教材研究・教材準備に関する課題があること | 59校 (24.7%) |
| ③教師の意識がそこまで高まっていない | 28校 (11.7%) |
| ④その他
(予算、職員の異動、コーディネーターなし) | 21校 (8.8%) |
| ⑤見取り・評価や学習ログに関する課題があること | 18校 (7.5%) |

選択理由より

- ・多忙な中、外部との調整・連絡に時間を取られてしまう。
- ・集団の中には「変化を好ましく思わない」人々が一定数存在するため、管理者が理解しつつ、丁寧に「地域の子は地域で育つ・育てる」認識を、全ての教職員と共有する事が大事。
- ・教師が地域に関心をもち関わる力が鍵になるため
- ・地域性や児童の実態を踏まえ学校の特色を理解させ「特色ある教育活動」を確認の上取り組んでいるが、学級、学年の児童の状況や教師の力量によって差ができることがある。

考察：調査結果と、選択理由から、推進上課題となるのは教師の推進能力や教材化する力、または意欲などが課題となっていることが分かった。また、教材研究するための時間の確保なども含めて、私たち管理職が推進したい内容をしっかりと職員と共有しながら、担当者を中心に丁寧にすすめる必要があることが示唆された。

6 「特色ある教育活動」を推進していく上で重要なことは何だと思えますか。

<上位回答5：全体の86.6%>

- | | |
|----------------------------|-------------|
| ①教師の「特色ある教育活動」へ対する意欲 | 59校 (24.7%) |
| ②管理職の「特色ある教育活動」を推進する意欲 | 51校 (21.3%) |
| ③地域と学校を結ぶ役割を担うコーディネーター等の人材 | 43校 (18%) |
| ④地域の教材や地域の人材を生かした学習の位置付け | 21校 (8.8%) |
| ⑤教師の「特色ある教育活動」へ対する知識 | 18校 (7.5%) |

選択理由より

- ・どのような教育活動を展開するうえでも、教師の意欲がまず必要であると考えます。
- ・児童や保護者、地域、職員の実態を校長がしっかりと把握し、学校経営方針を作成できる能力が必要。それが教師、子供、地域のウェルビーイングを高める第一歩になると思

う。

- ・本校は地域コーディネーターが常時連携のとれる状況が有る為、事前の準備やバスの手配等を行っているため教師の負担軽減となっている。

考察：特色ある教育活動に対する教師、管理職の推進意欲や知識、また、地域コーディネーターの人材活用が推進に重要であることも示唆された。

7 「特色ある教育活動」の取組で、他校の参考にあるような事例があれば教えてください ＜各地区より抜粋＞

国頭地区：名護市立東江小学校

(1) 取り組み内容（学年、教科、具体的な活動）

- ①テーマ：三光☆お仕事フェスティバル～自分の将来の夢を見つけよう～
- ②対象学年、教科： 5、6年 教科：総合学習
- ③ねらい：児童の夢や、将来やってみたいと思う職業を見つける手助けをするため、地域にある職種について伝え知り、それに関する仕事の情報を得ることで、自己の生き方を考える機会とする。
- ④主な内容：各会場に事業所ごとにブースを作り、講師を中心に事業所独自の体験講座を実施する。体験時間は45分（片付けや次の体験準備含む）で、1人：45分×2コマの体験講座を実施。各事業所共通に、事業所紹介・仕事についての概要等のお話をさせていただく。
- ⑤地域との連携（参加企業）：
 - ・エステルームソルシエール ・ゆくる整骨院 ・(株)大同火災海上保険北部支社
 - ・ダンスフィットネスサークル amor ・GODAC 国際海洋環境情報センター
 - ・金融広報委員会 ・建築士会

(2) 取り組みの様子



(3) 取り組んでの効果

＜児童への効果＞

- ・将来の職業観や、夢や希望について考えることができる。

＜教職員への効果＞

- ・キャリア教育の視点を取り入れた日々の授業づくりにより効果をもたらす。

＜地域への効果（参加企業）＞

- ・子ども達にあまり知られていない職種もあったが知ってもらえた。
- ・自分たちの仕事内容についても詳しく知ってもらえ、興味をもってもらえた。
- ・授業参観日にセットされていたので、多くの保護者への宣伝となった。

中頭地区：中城村立中城小学校

(1) 取り組み内容（学年、教科、具体的な活動）

- ①テーマ：地域の老人会と活動（スポーツテストやサトウキビ体験、トウモロコシ栽培など）
- ②全体の主な内容：地域の老人会の方々の協力を活用し、比較的に時間のある老人会の方々を活用し、コミュニティースクールの充実を図っている。
- ③対象学年、教科： 全学年 教科：生活科、体育（スポーツテスト）
- ④ねらい（スポーツテスト）： 地域のお年寄りの方と楽しみながらスポーツテストを実施し、さらに親睦とスポーツ交流を図り有意義な時間を過ごすことで、児童の競技力の向上とコミュニケーションを深める機会とする。

⑤主な内容

- ・各学年、各スポーツテスト場で敬老会の方々から、指導を受けて実施する。
- ・50m走、ボール投げは、マスターズの上位入賞者と競争し、競技力向上を図る。
- ・各学年児童、これまでの自己の記録と比較し、反省記録に記入する。

⑥地域との連携

- ・中城村老人クラブ連合会 30名

(2) 取り組みの様子



(3) 取り組んでの効果

<児童への効果>

- ・これまでよりも、老人会の方々とテストを実施することで、楽しくテストが実施できた。
- ・実際に現役で競技を行っている老人会の方々から指導して頂き、技能的な向上が見られた。
- ・各スポーツテストの場で、老人会の方々と競争することで、意欲的に取り組んでくれた。
- ・地域の老人会の方々と交流が図られ、つながりや関わりができた。

<教職員への効果>

- ・子ども達が意欲的に取り組む姿勢が見られ、運営がスムーズにできた。
- ・専門的な立場から、指導して頂き、今後の指導に生かしたい。
- ・午前中でスポーツテストが終了し、時間的なゆとりがあった。
- ・地域の老人会の方々と今後も交流し、地域人材を積極的に活用したい。
- ・様々な面でサポートがあり、負担等の軽減が図られた。地域の特性を知る機会が増えた。

<地域への効果(老人会)>

- ・子ども達と交流することで、楽しみながら競技を行うことができ有意義だった。
- ・地域スポーツクラブに興味を持ち、日頃から運動に親しむ子どもが増えることを願って、今後も体育的な指導に関わりを持ちたい。
- ・地域の子ども達と交流することで、地域の子どもの様子を知ることができた。

那覇地区：那覇市立曙小学校

(1) 取り組み内容(学年、教科、具体的な活動)

- ①テーマ：朝のスポーツ活動
- ②対象学年、全学年 教科：朝の時間(体育)
- ③主な内容：朝の時間にボール運動や陸上運動、縄跳び、器械運動等、年間通して行う。
- ④地域域との連携：家庭との連携

(2) 取り組みの様子



(3) 取り組んでの効果

<児童への効果>

- ・前年度に比べて、遅刻が減少した。
- ・朝ごはんを食べるなど、基本的な生活習慣の改善が見られる。
- ・体力の向上
- ・落ち着いて集中して学習に参加できる子が増えてきている。

<教職員への効果>

- ・児童が落ち着いて集中して学習に参加できる子が増えてきている。
- ・朝スポに参加している児童を中心に、児童オリンピックにも参加した際は、保護者が受付や招集、アップ等を担当（支援）して頂き教職員の負担軽減になった。

<地域への効果（家庭）>

- ・早寝・早起き・朝ご飯を励行する家庭や基本的な生活習慣が整えられた児童がより増えた。

島尻地区：豊見城市立とよみ小学校

(1) 取り組み内容（学年、教科、具体的な活動）

- ①テーマ：地域の宝ラムサール条約指定の「漫湖」を活かした海洋教育
- ②対象学年、全学年 教科：横断的に実施（総合、体育、音楽、国語）
- ③ねらい：「漫湖」の自然、海洋文化に親しみ、その価値を理解して、自分達の力で持続させようと努力しながら地域の宝「漫湖」での学び地域や社会へ発信していく。
- ④主な内容：
 - ・3年生：漫湖の自然を発見しよう→漫湖ってすごい！でも、ゴミがあるなー
 - ・4年生：漫湖の自然を守るために私たちにできること 水鳥センター
 - ・5年生：空手を知ろう、伝えよう：海に囲まれた沖縄で生まれた空手を学び、その技と精神を世界に発信しよう。
 - ・6年生：漫湖で生まれたハーリーを体験しよう：600年の歴史ハーリー発祥の地豊見城：豊見城龍船協会と連携
- ⑤地域との連携：豊見城市ハーリー協会、漫湖水鳥・湿地センター、沖縄県空手会館、沖縄県空手振興課

(2) 取り組みの様子



(3) 取り組んでの効果

<児童への効果>

- ・故郷のことに興味を持ち、愛着を持つようになった。
- ・体験活動による実感のある理解から、自信を持って活動に取り組んでいる。
- ・学校が楽しいという児童が多くなった。
- ・前年度に比べ自己肯定感が向上した。

<教職員への効果>

- ・体験活動の大切さを理解し、地域の自然や人材を活用する授業が増えている。。
- ・地域の専門家を利用することで、学習に深まりが出ている。

<地域への効果（家庭）>

- ・地域の施設、人材にとっても活用されることで存在意義が高まり、喜びの声を頂いている。

宮古地区：宮古市立福嶺小学校

(1) 取り組み内容（学年、教科、具体的な活動）

- ①テーマ：IT部及び野菜作りプロジェクト
- ②対象学年、全学年 教科：総合的、教科横断的に学習＋放課後
- ③ねらい：地域の方に顧問を依頼し福嶺小IT部を結成し、放課後の時間を活用し、子供対にて様々な活動を行う。
- ④主な内容：地域ボランティアの方の協力で福嶺小IT部を結成。総合的な学習の時間（福嶺小農業プロジェクト）とIT部で教科横断的な学習に取り組んでいる。IT部では、ドローン操縦を学び、地域の名勝である「東平安名崎」を上空から撮影し、昔と今の自然環境の変化等について学習している。
また、スマート農業に関しては、近隣の東京農大（宮古亜熱帯農場）と連携しITを活用した先端農業やドローンを使った農薬散布などについて学習を予定。
また最先端のスマート農業を学び、全児童で地域の協力の下、野菜を栽培し野菜の無人販売を正門前で行っている。また、リッツカールトン東京のシェフを招き、子ども達が栽培した野菜を使って児童と一緒に調理実習を行う
- ⑤地域との連携：

(2) 取り組みの様子



(3) 取り組んでの効果

<児童への効果>

- ・児童の活動の範囲が広がり、積極的に参加している。
- ・地域の協力に感謝するとともに、学年隔てなくお互いを尊重し、思いやりの心を持つようになった。
- ・楽しみながらITについて学んでいる。

<教職員への効果>

- ・全職員協力的で、職員個人のスキルアップにも繋げている

<地域への効果>

- ・やり始めて間もないのでこれから確認していく。

八重山地区：竹富町立白浜小学校

(1) 取り組み内容（学年、教科、具体的な活動）

- ①テーマ：地域の特色を生かした体験活動（稲作、海洋教育）
- ②対象学年 全学年 教科：総合的、生活科
- ③ねらい：地域の自然や伝統文化の理解及び再発見を通して、郷土への愛着を育む。
- ④主な内容：稲作体験（全）、刺し網漁体験（全学年）、サンゴの白化現象調査（3～6年）

(2) 取り組みの様子



(3) 取り組んでの効果

<児童への効果>

- ・地域の自然や伝統文化の理解及び再発見。
- ・郷土への愛着、多様な人との関わりに繋がっている。

<教職員への効果>

- ・地域の自然や伝統文化の理解、教材開発及び工夫改善、人間関係の広がり。

<地域への効果>

- ・地域の方々は「子どもたち、学校の応援団」として、「地域の協力あつての教育活動の充実」の実践を通して、子供たちと活動することにより、地域の自然や伝統文化を伝えられることにやりがいと喜びを感じていると考える。

IV まとめ

今回、沖縄県全小学校への「特色ある教育活動」の調査により、各学校校長が自校の特色をしっかりと捉えながら教育活動を推進していることが分かった。また、児童の豊かな人間性、地域への誇りと愛着、自己肯定感、自己有用感の向上に効果があり、学校としても学習内容が豊かになり、活性化されると感じていることも分かった。

「特色ある教育活動」推進するうえでの課題としては、教師の推進力のばらつきや意識の高まりが足りないこと、また、教材研究、準備時間が確保しづらいことなどがあげられた。同時に、特色ある教育活動に対する教師や管理職の推進意欲や知識、また、地域コーディネーターの人材が推進に重要であることも示唆された。

各学校の「特色ある教育活動」から、地域の自然や文化、人材を上手くいかした取り組みが紹介された。どの取り組みも児童が意欲をもって取り組むことが何われ、その結果、知識的、身体的な向上や人間関係、コミュニケーション力を身に着ける、地域への理解、愛着、誇りを持つことなどに良い効果があることが分かった。

また、同時に教師側にも、指導力の向上はもちろんのこと、地域理解や地域とのつながりを生み、人材活用による業務軽減にもつながることが分かった。充実した教育活動を行い児童が成長することから教職の「やりがい」を感じられることも示唆された。

さらに、特色ある教育活動に関わる地域の人々や企業や各種団体にも、色々なスキルや時間を学校へ提供するだけでなく、児童の学習に関わること、交流により、様々な恩恵も受けていることも分かった。学校に関わる方々にとっても「やりがい」を感じていると考える。

以上のことから、学校が積極的に「特色ある教育活動」を推進することは、最初に掲げた「ウェルビーイングの実現とは、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなることであり、教育を通じて日本社会に根ざしたウェルビーイングの向上を図っていくこと」に大きく貢献するのではないかと考える。

これらの結果を受け、私たち校長は、強いリーダーシップを発揮し、今後も「特色ある教育活動」をさらに各学校で推進することが求められる。そのために、校長は自校の良さや特色をしっかりと把握し、職員や保護者そして地域とコミュニケーションを図りながら進めていくことが必要だと考える。そうすることで「教育を通じたウェルビーイングの向上」が図れることが今回の調査で示唆された。

2023年度「教育改革委員会」研究報告書

部活動の適正化について

～「働き方改革」への取り組み～

I はじめに

社会全体が新型コロナウイルス感染症とともに生きていかなければならない状況が続いて3年が過ぎ、コロナも5月8日から5類へ引き下げされているが、学校現場は感染防止に対応しつつ「働き方改革」への推進に向け取り組んでいる。文部科学省では、生徒にとって望ましい部活動の環境を構築する観点から、部活動ガイドラインを策定し、部活動の適正化を推進している。他方、学校の働き方改革は喫緊の課題であり、中央教育審議会の答申や給特法改正の国会審議において、「部活動を学校単位から地域単位の取り組みとする」ことが指摘されている。また「沖縄県教職員働き方改革推進プラン」において、①学校運営体制の改革 ②学校業務の改革 ③教育委員会による支援 ④部活動のあり方の見直し …の4点を教職員の業務改善の取り組み方針として示している。

そこで、中学校教育改革委員会では一昨年度から、部活動に特化した働き方改革の取り組みとして研究を進めてきた。今年度も引き続き、部活動の適正化に焦点を当てて、各4地区（国頭・中頭・那覇・島尻）の先進地域の取組状況を紹介します。今後の「働き方改革」推進へつなげていきたい。

II 各地区（国頭・中頭・那覇・島尻）の先進地域の取組状況等の紹介

○目的

各4地区（国頭・中頭・那覇・島尻）の先進地域の取り組み状況等を紹介します。部活動適正化の推進に向けて取り組む機会とする。

○対象4地区

国頭 ・ 中頭 ・ 那覇 ・ 島尻

1 国頭地区の取組 (3) ⑦参照

(1) 部活動の意義

部活動は、共通の趣味や関心をもつ生徒による集団であり、目標の追求を通して心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、生涯にわたって豊かな趣味や特技をもち充実した生き方を求めていく基礎となる活動を行うところにその意義がある。

- ①生徒がもっている共通の趣味や関心を追求する活動
- ②学年や学級の所属を離れた異年齢の集団による生徒の活動
- ③教師の指導のもとに、生徒の自主性、自治的活動が行われる活動
- ④学校生活をより充実し、豊かにする活動
- ⑤個性を伸長し、自主性を育て、社会性の発達を図ろうとする活動

(2) 部活動の目的

- ①専門的な技能・教養を高めることにより、個性を伸ばし、生活に自信を持ち充実した学校生活を送る。【やりぬく力】
- ②共通の目的に向かって活動することで、望ましい人間関係を築く。【かかわる力】
- ③向上心、探求心、忍耐力、自主性を養う。【やりぬく力】
- ④時間の有効な使い方と、余暇の善用を身につける。【みとおす力】

(3) 運営上の基本方針

- ①部活動の運営上の約束・注意事項など基本事項は、部活動顧問会で確認する。
- ②担任をはじめ全職員との連携を図り、活動の意義の深化を図る。
- ③生徒のキャプテン会を組織して活動の自主性を養う。
- ④保護者や地域の方の協力を得て、生徒の活動の活性化を図る。
- ⑤原則として生徒及び教職員（指導者）は設置されている部活動に所属し活動する。
- ⑥各部活動の顧問（指導者）は、管理職に一ヶ月先の日程を提出する。
- ⑦休日、祝祭日及び長期休業中の部活動に関して、学校長の許可（顧問から校長へ）を得て顧問不在でも外部コーチと保護者2名以上が部活を見守ることができる場合は部活動を認める。安全面（ケガ・熱中症対策等）施設の使い方、施設などについて顧問と連携を密にし、十分に留意すること。

(4) 組織

- ①参加を希望した本校の生徒及び教職員（指導者）、校長の認めた外部指導者で構成する。
- ②校長が許可し、その管理下にある課外活動である。

(5) 会議

- ①原則として、月に一度顧問会を持ち、その後にキャプテン会を持つ、又必要に応じて、臨時に顧問会・キャプテン会を持ち、目的の達成に努める。

(6) 入退部

- ①入部については、保護者が「入部願い」を学級担任に提出し、その承諾を経て各指導者に願い出る。(4月)
- ②退部については、保護者が「退部願い」を各部指導者に提出し、学級担任、顧問と協議のあとに認められる。
- ③転部については、生徒の実態を教育的に配慮し、保護者の申し出により、学級担任と指導者で判断する。※転部をする際にも、部費を納める事とする。

令和5年度の部の対応として(実際の参考事例・提案用)

令和5年 月 日

(A)部は次年度から地域移行化を進めていこうと計画しています。今現在、コーチや保護者の方に休日の部活動の対応をしていただきとても助かっています。ありがとうございます。A部は、協力体制がしっかりできているのでぜひ地域移行化をすすめてはどうかとの話があり、沖縄県からも地域クラブ参加条件の内容が届きましたので、前向きに検討してみたいと考えています。これまで学校で検討してきた内容の確認と令和4年度の2月に県から出された地域クラブ化の条件をみて、次年度の方針を話し合いたいと考えています。よろしくをお願いします。

(1) 令和5年度の活動計画について

【検討・確認事項】

- ①平日は、学校対応。休日の練習をコーチと保護者(2名)で対応を年間を通してお願いしたいが可能か? ※練習試合は、顧問とコーチで調整。
次年度からは、スポーツ保険をかけたの対応を検討(別紙:スポーツ保険)
練習試合や大会は顧問も参加しての実施となる。
- ②平日の練習について
現状として、コーチが毎週水曜日 2時間年休を取得して対応している。
学校外なら17時~19時で対応できる(地域クラブとして)が、どうするか?
- ③コーチの登録について
最大2名の登録ができる。4月上旬の登録。
- ④令和5年度の全体の保護者の日程案について
令和5年 月 日() 時~
県大会 月 日()

(A) 部 令和5年度の活動方針について (B部：C部も適用)

	学校	地域 (コーチ・保護者)
練習日	○平日の3日間 (月・木・金) ○土日は、練習対応無し	○平日の1日間 (水) ○休日の練習対応 ※休日は土日のいずれかを休みにする。
時間	○練習時間は、教育計画の部活動の時間内。	○基本的に休日3時間、平日2時間程度。 ○平日 (水) は17:00～19:00の予定 ○学校外施設の移動に関してスポーツ安全保険を適用する
場所	○学校体育館	○学校・学校外施設 総合体育館や区の体育館など
大会	○学校を通して申込をする。ベンチには監督として教職員が入る。	○コーチ () ・名) が大会に参加する。
練習試合	○学校を通して練習試合をしても可能	○コーチが直接相手チームに申し込めるように地区専門部に周知する。(顧問に練習試合の計画を知らせる) R5、4月からの予定
予算	○村の予算、部活動育成費を使用して、チーム登録料や個人登録料を提出する。学校の予算で購入できる物品を買う。 ○県外派遣などの予算もいくらか補助がある。	○保護者会で会費を徴収して、練習試合や消耗品などに使用する。
登録	○県のチーム登録、個人の登録をする	○中体連へのコーチ登録を確実にを行う。
ケガ等の対応	○学校の災害給付制度を使って対応する。	○年間1人800円のスポーツ安全保険をかけて対応する。
その他	○月ごとの練習計画を作成し、校長に提出。	○水曜日・土日の顧問不在の練習についてコーチと対応保護者が責任者となる。

(下記：実際の参考事例)

① 役員会・保護者会の決定事項

委員会への確認事項

*スポーツ保険の掛け金は、各部活動で対応

2 中頭地区の取組

(1) A中学校 (部活動時間を通年16時前後開始、18時完全下校)

下記のA中学校の日課表は、3年前の新型コロナウイルス感染症の影響を受け、学校生活の中で少しでも人との接触時間の短縮を図るために日課表の見直しを行った。1校時の始業時間を8時30分スタートにすることで、先生方や生徒達に放課後の時間を有効に生み出す工夫を設定している。また、部活動開始時間も16時前後から開始し、部活動完全下校も通年18時と設定している。ここ数年、この日課表で学校運営を行い職員、生徒、保護者、地域も理解して取り組んでいる。

朝読書の時間は確保されていないが、A中学校では意図的に帰りの会を各学級輪番に図書室で実施を行ったり図書委員会が読書推進を積極的に取り組む活動等を行っている。

日 課 表							
	普通日課			特別日課			
	始業	終業	分	始業	終業	分	
登校	～8:15			～8:15			
短学活	8:15	8:20	5	8:15	8:20	5	
朝会・集会等	—	—		8:25	8:40	15	
1校時	8:30	9:20	50	8:50	9:40	50	
2校時	9:30	10:20	50	9:50	10:40	50	
3校時	10:30	11:20	50	10:50	11:40	50	
4校時	11:30	12:20	50	11:50	12:40	50	
給 食	準備	12:20	12:35	15	12:40	12:55	15
	会食	12:35	12:55	20	12:55	13:15	20
	片付け	12:55	13:00	5	13:15	13:20	5
清掃 ミーティング	13:00	13:15	15	13:20	13:35	15	
休憩	13:15	13:35	20	13:35	13:55	20	
5校時	13:35	14:25	50	13:55	14:45	50	
6校時	14:35	15:25	50	14:55	15:45	50	
短学活(5校時)	14:30	14:40	10	14:50	15:00	10	
短学活(6校時)	15:30	15:40	10	15:50	16:00	10	
下校	15:40			16:00			

(2) B中学校 (野球部を地域『クラブチーム』に移行)

B中学校では、令和4年度9月にA部顧問より、同部活動の地域移行を考えているが学校長としての意向について見解を求められた。

文部科学省が進めている部活動の地域移行や働き方改革の推進の観点から、同部活についてモデルケースとして地域移行化を進めることについては、了承し進めていくこととした。

その後、令和4年度2月に外部コーチが委嘱されている運動部活動について、外部コーチ及び保護会代表者と学校長が意見交換しながら、令和5年度の地域移行に向けて取り組みを進めてきた。

意見交換の中で、令和5年度の部活動について、地域移行化できる部活動については、保護者会での確認後、学校の部活動としての位置付けではない形での活動にしていくことを確認した。

また、地域移行化しない場合でも、学校の教員が部活動の顧問としての役割を担うことについては、大会の引率、大会申し込み、勤務時間内での対応のみにとどめることを、学校長の方針として伝えた。

また、令和5年度からは全部活動に保護者会を結成することを義務づけ、会計業務については教員ではなく保護者会で担ってもらうこととし、学校として一斉の部結成会や部費徴収については廃止することとした。

その中で、野球部、サッカー部、男子バスケットボール部について地域移行を進めていくこととした。

令和5年4月から先陣を切って、野球部が地域（クラブチーム）に移行し再スタートした。22年間、本校の外部コーチを務めていたA氏は、新型コロナウイルス感染症拡大が収束した時期、民間のスポーツクラブには感染対策を取った上での活動再開が認められたが学校部活動の再開は認められなかった。「民間チームは活動できるのに」と感じていた昨年秋、学校側から「地域クラブ化してみたら」と持ちかけられた。うるま市は、教育委員会が積極的に部活動の地域移行を進める先進地でもあり、また学校からのバックアップもあったのでクラブ化に動き出した。新入部員1年生17人が入部している。

(現在、9人の生徒がB中学校以外のうるま市内の3中学校から通っている。)

6月の中頭地区中学校体育連盟総合体育大会（地区中体連）には、B中学校クラブチームとして大会参加をしている。練習に関しては、平日は2時間、土日祝祭日は3時間、B中学校のグラウンドで活動を行っている。

3 那覇地区の取組



◆ A 中学校ソフトボール部の取組

(1) 概要

那覇市の北東に位置する那覇市立A中学校は1974年創立。ソフトボール部も創立と同時に創部、令和5年度には学校とともに50年目を迎える。地区夏季大会では1978年に初優勝、1983年から10連覇、1998年から※5連覇(1988・1999は男女アベック優勝)、その後も4度優勝、令和5年度は地区新人戦、夏季大会と2冠達成。那覇地区にあって現在活動しているチームとして最も歴史があり、途切れることなく続いているチームとなっている。指導者も輩出し、地区内のB中学校監督(顧問)は本校ソフトボール部OBである。

現在部員は13人、C中学校1名を加えた合同チームとなっている。那覇地区は、現在女子のみの3校、部員及び学校数も減少傾向である。

現在、活動を支えているのは外部コーチ他多くの支援者・指導者である。

登録している外部コーチは1名、それ以外にも土日、大会前の平日放課後には多く指導者がグラウンドで子どもたちの指導に当たっている姿がある。

(2) 外部指導者による指導・支援

①指導者と本校ソフトボール部との関係

外部コーチのAさん他多い時には10名以上の指導者が指導に当たっている。数は部員数に比し多い。そのほとんどが本校ソフト部を30年以上指導しているAさんを通じてのつながりである。

②指導の実際

平日であっても、都合をつけ放課後指導している方もいる。また仕事終わりの時間に駆けつける方もいる。特に休日の練習時には多くの方が指導にあたっている。

指導内容については、主に専門性を活かした技術指導である。子どもたちに計画を立てさせ、その計画に合わせ、指導者それぞれが特に打ち合わせをすることもなく、阿吽の呼吸で必要な指導を行っている。練習試合時には審判も担ってもらっている。

③休日の地域移行について

現顧問はソフト経験者ではないものの顧問・指導者として長年ソフトボールと関りがあり、外部指導者の方々からの信頼も厚い。互いの立場を尊重しながら、部活運営、指導に当たっている。次の顧問も専門か長年ソフトボール(部)に携わっている者が望ましいが、例えそうでなくとも現状の支援体制であれば、移行については可能との感触を現顧問は持っている。

課題はいくつかある。まず長年関わっている外部コーチAさんの後継者である。30年以上に渡り他の外部指導者をまとめ、外部指導者「陣」として、指導に当たっている。まとめ役、本校への「指導者」の引き込み役としてその果たす役割は大きい。持続可能な部活動、特に持続可能な地域移行のためには、持続可能な外部指導者「陣」が必要である。

Aさんの人柄、人脈によるところが大きく、Aさんに代われる方が一緒に指導する体制を早急に作り出すことが求められる。

また、休日の地域移行に係る説明、理解、実際のスタートも互いに信頼関係のある現顧問と外部指導者「陣」であるときに行ったほうがスムーズであり、行政の示す具体的な移行計画が待たれるところである。

休日移行については、行政が示す計画によっては、今後様々なことも考えられる。その一つが学校をまたぐ形での生徒参加の可能性であり、そのことがさらに別の課題を生み出す可能性もある。様々なことを想定しながら、示される移行計画を基にして一歩踏み出せる準備を行いたい。

(3) 部動の地域移行(休日移行)

文科省は休日の部活動から段階的に地域移行していくことを基本として令和5年度から令和8年度までを改革推進期間と設定している。県においても国の方針や地域移行に関する検討会議の意見を参考に令和5年度内に地域移行推進計画を策定するとしている。さらに学校設置者である市が県の計画を踏まえ学校に示すことになるため具体的な地域移行のイメージにはもう少し時間がかかる。

地域移行の課題の一つに指導者の確保が挙げられるが、本校にあっては、現在支えている外部指導者、支援者がそのまま担ってもらえるのであれば、休日地域移行の実現可能性は高い。その場合であっても、設置者や学校側からの生徒、保護者、指導者を含めた地域への丁寧な説明が必要である。

(4) 部活等を取り巻く状況

学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン（R4.12月 スポーツ・文化庁）前文や県の研修資料「部活動の地域移行について」（R5.1.25 令和4年度市町村教育長・教育委員研修会）において、従前の体制での運営の困難さ、そしてその具体的な課題が示されている。

本校においても、ガイドラインや県研修資料に示されている状況がある。複数顧問の配置どころか顧問配置すら難渋している。そのことが職員への負担感、不平等感へもつながってくる。さらに運営継続のために部活動数(同好会を含む)減を検討せざるを得ない状況となっている。他校においても部顧問を生み出せない状況、生み出すことがこれまで以上に困難な状況がある。

一方保護者の中には、学校の働き方改革に理解を示すとともに、小学校では積極的に関わっていたが、中学校ではどうすればよいのか分からない。できることは何でもやりたい、と協力の意思を示す方も多くいる。学校の働き方改革は学校側(教師)の負担減ばかり叫んでもより良い協力には結びつかない。子どもを中心に据え、学校と保護者、地域が互いに知恵を出し合い、できることから取り組むことが必要である。

4 島尻地区の取組

(1) A市における部活動改革（地域移行）の取り組み

① 平成30年度の取り組み

A市ではスポーツ庁委託事業「運動部活動改革プラン」で、運動部活動の在り方に関する調査研究事業を行なった。A中学校1校3部活動（男子卓球部、バドミントン部、男子バスケット部）に対して、外部指導者の確保及び研修、学校とのコーディネート支援を行なっている。スポーツ庁、県教育委員会からの業務委託先はA市で市内に本社がある「A社」が業務再委託を受けて事業を行なってきた。

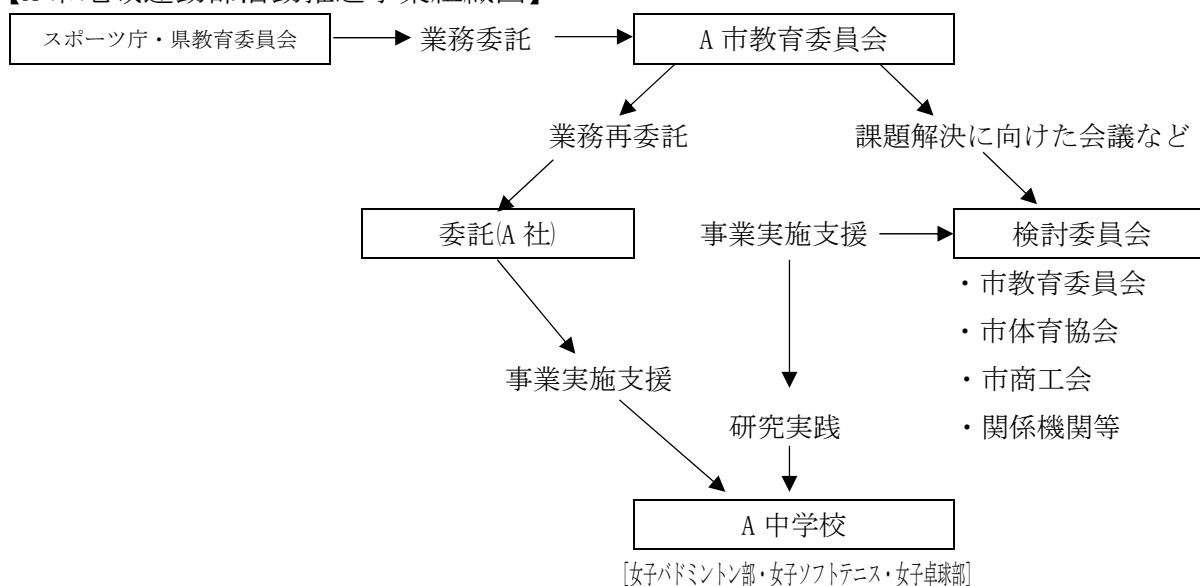
市教育委員会、市経済部、市商工会、中学校等の有識者による検討委員会を開催し事業推進の仕組み検討や財源確保の可能性等について議論がなされた。

② 令和3年度の取り組み

A市ではスポーツ庁委託事業「地域運動部活動～休日の部活動の段階的な地域移行に関する実践研究～」として『A市地域運動部活動推進事業』を行なった。市内中学校1校（A中学校）3部活動（女子バドミントン部、女子ソフトテニス部、女子卓球部）に対して、外部指導者の確保及び研修、学校とのコーディネート支援を行なっている。学校の働き方改革が進む中、運動部活動において顧問教員に競技経験がないことや部活動が教員の長時間労働につながっている等の課題解決に向け、市教育委員会、市長部局、学校、地域、民間企業及び団体が連携した部活動支援体制の構築及び実践研究を行なった。

本事業も、スポーツ庁、県教育委員会からの業務委託先はA市で、「A社」が業務再委託を受けて事業を行なってきた。実証期間及び実施回数は10月～2月（コロナ禍により1月より中止）、全18回（参加率：76%）行なっている。

【A市地域運動部活動推進事業組織図】



1) 事業実証アンケート結果

生徒、保護者へのアンケート調査ならびに教員へのヒアリング調査した結果、生徒の満足度は77.4%、保護者の満足度は78.2%がとても良かった・良かったとの回答であった。また、地域へ移行することの不安点については、生徒・保護者ともに50%以上は特段不安はないとの回答であった。なお、受益者負担による実施については、月1,000円以下から1,000円程度が妥当であるとの回答が78.2%であったことから、受益者負担だけでの継続は非常に難しいことがわかった。

2) 検討委員会意見

ア 財源について

外部資金の確保による可能性について、商工会等の連携及び企業版ふるさと納税などをあげられたが、地域団体においても支援できるほどの財源確保が難しい。また、地域からの支援を得るだけではなく、中学生が地域活動を手伝いする等による双方の循環も含めて仕組みづくりを行なうことも一つの解決案として検討ができるのではないかとの意見があった。

イ 人材について

部活動指導員等の活用なども可能性はあるものの、全ての部活動の受け皿を地域が担うことが難しく、また、教員の兼職兼業も含めて議論が必要であるとの意見があった。

③ 令和4年度の取り組み

令和4年度はA市内中学校3校（A中学校・B中学校・C中学校）4部活動（A中バドミントン部、A中ソフトテニス部、B中バレーボール部、C中バレーボール部）に対して、外部指導者の確保及び研修、学校とのコーディネート支援を引き続き行なっている。A市地域運動部活動推進事業検討委員会も引き続き行なわれ事業実証アンケートなどもまとめられている。実証期間及び実施回数は10月～1月で、4つの部活動で46回（各部平均12回）が実施されている。

1) 現場からの声

これまで、専門の指導者が配置できておらずに過去の練習内容を生徒たち自身で取り組んでいたため、今回の事業で専門の指導者の指導を受けられる機会が得られたことで、生徒たちや保護者の方々にとても好評である。

2) 検討委員会主な意見

① 財源について

ア 既存のクラブチーム指導者の報酬（月謝）と地域クラブ活動の指導者の謝金単価（受益者負担）が異なりギャップが生じる。

イ 地域で基金化していけなければ、持続可能な活動を厳しいだろう。一方で、支援する市内事業者が儲からないと応援はできない。

② 人材について

ア 教員アンケートによると、13～16名（3校併せて）の教員が兼業兼職による指導を希望していることがわかった。

イ 人材バンクの立ち上げ、体協とも協力していきたい。

ウ 指導者には、指導者の資質や有資格が必要とされていくだろう。指導者ライセンスなどの取得整備は必要。

3) 総評

- ① 指導者の資質等を担保し、地域クラブ活動運営に必要な財源確保に向けて、受益者負担の適正な金額設定の検討と同時に外部資金調達の可能性と手法を見いだす必要がある。
- ② 地域クラブ活動の適正な数を踏まえ、教員の兼業兼職も含めた指導者の確保と資質向上の研修等の必要がある。

4) 部活動地域移行のポイント（業務の再委託先の A 社資料より）

部活動の地域移行は、現在の状況の状況把握と地域移行に向けた制度設計をすることが重要なポイントである。不足しているもの、必要な要素（人材確保・財源確保等）を把握し、これからの仕組みを構築していくことが重要であることが示されている。

制度設計について	人材について	財源確保について
<ul style="list-style-type: none">・ 部活動の意義、定義を再検討・ 実態調査の実施・ 部活動の適正化・ 平日の部活動の取り扱い・ 地域コーディネーターの配置・ 事務局の設置	<ul style="list-style-type: none">・ 指導者のスキル・ 受け皿の確保及び新規設立・ 受け皿の認証、評価・兼職兼業の設計・ 研修、講習制度の構築・ 受け皿団体のガバナンス	<ul style="list-style-type: none">・ 受益者負担・ 自治体による予算化・ 外部からの確保 (企業版ふるさと納税) (企業スポンサーなど)

(2) B 町における中学校部活動指導員配置事業の取り組み

B 町ではこれまであった「外部コーチ制度」を、令和 5 年度から「中学校部活動指導員 配置」事業として行なっている。事業の目的は「B 町立中学校の部活動の活性化及び適正化並びに教職員の負担軽減を図ること」としている。

以下は事業の概要について（町の要綱からの抜粋）

1) 指導員の要件を満たす者を教育長が任命

- ① 学校教育に関する理解と適切な指導
- ② 教育現場にふさわしい人格と意識
- ③ 競技等における専門的指導ができる

2) 指導員の指導時間

- ① 週 5 日以内かつ月 44 時間以内
- ② 指導時間は休業日は 3 時間以内とし、平日は 2 時間以内とする
- ③ 指導員は、学校教育計画に基づき、学校長の監督を受け要綱に掲げる職務を行なうことができる。

3) 指導員の謝金

- ① 1 時間につき 1,600 円を上限とする

4) 指導員の職務

- ① 実技指導、大会引率及び監督

- ② 部活動の管理運営
- ③ 保護者への連絡や指導計画の作成
- ④ 事故発生時の現場対応
- ⑤ 用具・施設の点検及び管理
- ※ これまで、教員が担っていた業務を行なうことが可能となる
- 5) 指導員の義務
 - ① 定めた研修を受けなければならない
 - ② 主な研修内容(制度、教育的意義と位置づけ、サービス、生徒指導、安全教育、学校教育の目標や方針に関すること)
- 6) サービス
 - ① 職務上の命令に従う義務、守秘義務等

Ⅲ 考察

中学校の部活動は、これまで生徒のスポーツや文化的活動に親しむ機会を確保し、生徒の自主的・主体的な参加による活動を通じて、達成感の成就、学習意欲の向上や責任感、連帯感の獲得、自主性の育成に寄与するものとして大きな役割を担ってきた。しかし、近年、中学校生徒数が減少するなど少子化が進行している社会情勢、およびコロナ禍の中、中学校の部活動においては、昨年度のアンケート結果から競技等の経験のない教師が指導せざるを得ない状況、休日も含めた部活動の指導や大会の引率、運営への参画が求められるなど教師にとっての業務負担となっている実態がアンケートからもうかがえた。

令和2年9月「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」をスポーツ庁は示し、令和5年度以降、休日の部活動の段階的な地域移行を図るとともに、休日の部活動の指導を望まない教師が部活動に従事しないこととする方針を示している。

昨年度のアンケート結果からも部活動の適正化に向けて、少子化の現状の中、地域の持続可能で多様なスポーツ環境を各行政・地域・学校と連携して整備していくことが求められていることから、今年度は先進地域の部活動の在り方について紹介し、少しでも参考となり取り組んでいく地域・学校部活動が増加し、部活動の活性化及び適正化並びに教職員の負担軽減につなげていければ幸いである。

学力向上推進委員会

学力向上推進の実践的な取組

I 小学校編..... 69

国頭地区	玉城史江	(本部町立小中一貫教育校上本部学園)
中頭地区	池味勇	(嘉手納町立嘉手納小学校)
那覇地区	仲地千佳	(那覇市立城西小学校)
島尻地区	瑞慶覧長洋	(南風原町立津嘉山小学校)
宮古地区	与座篤	(多良間村立多良間小学校)
八重山地区	友寄兼秀	(与那国町立比川小学校)

II 中学校編..... 105

国頭地区	渡慶次靖	(宜野座村立宜野座中学校)
中頭地区	具志堅博昭	(恩納村立うんな中学校)
那覇地区	金城久枝	(那覇市立真和志中学校)
島尻地区	大湾悟	(八重瀬町立具志頭中学校)
宮古地区	垣花正人	(多良間村立多良間中学校)
八重山地区	石原昌英	(竹富町立大原中学校)

学力向上推進委員会

◎は部長

小学校	氏名		所属校	中学校	氏名		所属校
		小波津京子	今帰仁小			比嘉克章	久辺中
	池味勇	嘉手納小		具志堅博昭	うんな中		
	◎仲地千佳	城西小		◎新城高広	首里中		
	瑞慶覧長洋	津嘉山小		島袋篤	豊見城中		
	砂川修	北小		垣花正人	多良間中		
	友寄兼秀	比川小		大濱用四郎	西表中		

小 学 校 編

9年間の学びとあこがれをつなぐ教育活動の実践 —みんなが応援団 組織で学びを支える取り組みを通して—

本部町立小中一貫教育校 上本部学園
校長 玉城 史江

I はじめに

今年5月、世界規模で流行した新型コロナウイルス感染症が、5類へ移行された。この3年間、臨時休校等により人との接触を断たれた生活の中で、学力低下等に加え、学校不適應、心身耗弱と更なる課題が学校教育には突きつけられた。またコロナ禍で培ったスキルを踏まえ、児童生徒の学びの機会や質の保障とともに、令和3年1月に中央教育審議会で示された、全ての子供たちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実による「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「令和の日本型教育」の構築の実現に向けた取り組みが、現在求められている。

本校では、小中一貫教育校として9年間の学びを一体的に捉え、ふるさと学習を基盤とした教科・領域の横断的な授業、英語実践を軸とした体験的な授業など、小規模校のよさに根ざした人間力育成の教育課程編成に取り組んでいる。しかし、その一方で令和4年度の諸調査等より基礎学力の未定着に加え、高学年においては57%の児童が「自分で計画を立てて学習ができていない」という実態が浮き彫りとなった。

上記の実態から、学校における学びの場、人、もの、機会を整え、家庭学習との往還を図ることが重要であると考えた。また学びの質を高めるために、ICT機器の活用を通じた「個別最適な学び」と他者との交流を通して多様な意見を共有しつつ合意形成を図る「協働的な学び」の一体化の充実を目指し取り組む必要性を強く感じる。

そこで、校内研修を「『確かな学力』を育み伸ばす小中一貫教育 ～自力解決と学び合いが深まる課題の工夫～」とし、共通実践を特定教科（特別活動・道徳科・総合的な学習）とし、小中ペアによる教科での授業改善を校内研修に据えている。また学びに向かう基礎固めとして、学ぶ環境づくりなど全職員が応援団となり、児童生徒の学びを支える取り組みを行っている。

II 地域と本校の概要

本校は、本島北部の本部半島の先端部に位置し、北東部の今帰仁村に隣接している。東部から南東に連なる本部富士等の連山が見渡せる風光明媚な場所に位置する。また、校区の中央部に位置しており、具志堅区、新里区、備瀬区、豊川行政区（石川、豊原、山川）、謝花行政区（謝花、北里、嘉津宇）の集落を校区とする。令和元年10月に旧上本部小学校運動場敷地に新校舎が完成。



令和2年4月1日より国頭地区3校目となる小中一貫教育校「上本部学園」としてスタートした。現在、小学部214名、中学部99名が在籍しており、敷地内には上本部幼

稚園がある。また県立本部高校と連携型中高一環教育を推進している。

本校は、他の小中一貫教育校とは異なり、学年区分を小学部（小1年～小6年）中学部（中1年～中3年）とし、小学校1年生から中学部英語専科による英語教育のほか、音楽、図工等においても中学部の専科教諭による乗り入れ授業を行っている。学校経営に「実践的な英語教育」「ふるさと教育」「人間力の育成」の3つの柱を掲げ、地域の協力の下、人材や自然資源を生かした教育活動を展開している。

Ⅲ 学力向上推進への校長の関わり

本町では『武本部』の精神で未来を担い明日を切り拓く人づくりの推進」を目標に掲げ、学力向上推進計画において、社会を担い、豊かに生きていくために必要な「人間性」「学び」「自立心」を合わせた総合的な力を「人間力」とし、その育成を目指している。また『沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ』では、充実期の重点として「自立した学習者の育成」、「中学生期における学力課題の改善」をあげており、ICTの活用等による「個別最適な学び」と、「特定教科等授業研究の組織的な取り組み」を推進している。県、町の施策を踏まえ、本校の児童生徒の実態、地域の実情を鑑み、経営ビジョンを明確にし、全教職員体制で児童生徒支援に努めている。

1 方策1 日常化する・・・小中連携

- (1) 学校経営ビジョンの周知（年度当初・月初め・学期末）
- (2) 組織として取り組むための情報共有、共通実践
- (3) 授業観察とフィードバック
- (4) 小中教職員で協働して取り組める校内研の実施 ⇒特定教科

2 方策2 そろえる・・・自立した学習者の育成に向けた取り組み

- (1) 小中教職員での諸調査の分析
- (2) 「じんぶんノート」の取り組み（学び方を知るノートの提示）
- (3) 朝、放課後の学推教師による補習

3 方策3 支える・・・組織として児童生徒に関わる体制づくり

- (1) 情報共有を主軸においた組織運営
 - ① 児童生徒理解、教員支援等・・・町SC、県SC、町SSW、町雇用職員
 - ② 架け橋プログラムの充実・・・幼稚園教諭、支援員、預かり担当
 - ③ 初任者の資質向上・・・拠点校指導員、指導教諭
 - ④ キャリア教育の推進、ふるさと学習の充実・・・本部町魅力化スタッフ
 - ⑤ 中高一貫教育の推進・・・本部高校連携担当職員、魅力化スタッフ
- (2) あこがれをつなぐ小中連携した活動・・・生徒会役員とのトップ会談
- (3) 学びの環境づくり・・・みんなが応援団「ひと」「場所」「もの」の環境づくり
- (4) 特別支援教育の視点を踏まえた学級、教科経営・・・週案を活用したミニ研

4 方策4 見通す・・・授業改善、学校改善に向けたマネジメント

- (1) 学校評価に基づく、学校経営ビジョンの見直し
- (2) コミュニティースクール導入に向けた組織づくり、教育課程の見直し

5 方策5 つなぐ・・・地域資源を活用したふるさと学習・実践英語の取り組み

- (1) 区長と連携した行政区生徒会の活動
- (2) 地域企業と連携した「ふるさと学習」「実践英語」の実施
- (3) 本部町魅力化スタッフと連携した本部型キャリア教育の推進

IV 学力向上推進の具体的な取り組み

1 小中一貫校の特色を活かした取り組み（方策3）

(1) 中学生を活用した音読の練習

小学校3年生国語の授業では、その取り組みの一つとして、中学生との連携がある。20分の休憩時間を利用して、中学生に音読のチェックをしてもらう。



【中学3年生に音読のチェックをしてもらっている様子】

(2) 小6の特別活動の取り組み「1年生サポート大作戦」

小学部6年生の学級活動の取り組みとして運動会に向けた「1年生サポート大作戦」と題し、3つの取り組みを実施。小中一貫教育校の課題として小6年生のリーダー育成がある。中学生が学校行事や生徒会行事をリードするため、通常の6年生のような活躍の場が少ない。小学部リーダーとしての活躍の場の工夫の一つである。



【歌の練習】

【Chromebook を活用して運動会の目標決め】

【ハッピーダンスの練習】

2 自学学習に向けた取り組み（方策1・方策2）

(1) 学力向上推進教師・学習生活支援員による取り組み

本町では、教員免許を持つ学推教師と学校生活を支援する支援員が各校に配置されている。朝と放課後の補習を含め、授業における教員のサポートを担っている。また夏休みは、校区内の5行政区において、「もとぶっ子地域学習教室」を公民館を活用し、夏休みの課題の支援や一学期の補習を行っている。



【学推教師との補習の様子（左：中学部 中央：小学部低学年 右：小学部高学年）】

(2) 学びの場づくり

ア いつでも、どこでも学べる環境づくり

1階と2階の教室前には、自主学習や補習ができるスペース、「じんぶん広場」があり、その周辺には、家庭学習用問題や発展問題を準備し、自主学習に取り組める環境づくりを行っている。



【放課後の自主学習の様子（左・右：高学年じんぶん広場にて 中央：校長室前にて）】



【中学部2階補習スペース】



【小学部2階高学年じんぶんの広場】



【低学年教室前】

イ 学びの手助け

「どう勉強したらいいのかわからない」「何を勉強したらいいのかわからない」児童のために、自学学習に向けて「じんぶんノート」のお手本を作成し、貸し出しを行っている。また家庭学習や朝の学習、授業の補足問題を準備し、自分にあった問題を児童自身が選び学習できるようにしている。



【お手本のじんぶんノート】



【じんぶんノートの内容例】



【終了したじんぶんノート】



【じんぶんコーナーの掲示物】



【じんぶんだより】



【入試問題コーナー】

「じんぶんコーナー」は、町雇用の学推教師が担当し、月1回「じんぶんだより」を発行、予習・復習プリントや検定、高校入試の練習問題等の作成や補習を行っている。

ウ 掲示物の工夫

教室周辺の掲示スペースには、授業で取り組んでいる内容に関連のある掲示物を掲示。内容や楽しく、興味をもって学べように工夫を行う。作成は教員業務支援員が担当している。



【1年生の教室前の掲示】

【低学年教室前】

3 給食study・MIMの取り組み（方策3）

給食準備時間を活用して、特に基本的なひらがなやカタカナの読み書き、かけ算九九が習得できていない低学年の児童を対象に15分の学習時間を設定。対象児童の習得レベルに合わせて内容も工夫。またMIM（多層指導モデル MIM）を活用し、特殊音節を中心に文字や語句を正しく読み書きできるよう指導している。そのための教員研修も行っている。



【学推教師と給食 study】



【校長と給食 study】



【教頭と給食 study】



【小学部職員の「MIM」研修会】



【「MIM」の取り組み（小学部2年生）】

4 組織で取り組むための情報の共有（方策4）

(1) 面談の実施

校長としては、教員のほか、町雇用職員との面談を実施し、業務内容の確認をはじめ、困り感や学校経営、学級経営、児童生徒等に関する情報共有の場を持ち、学校運営上の把握や改善等に役立てている。

(2) 町雇用職員等との情報共有の場の設定（隔週の水曜日）

放課後になるとスクールバスを待つ時間を利用して、「ちょっと教えて」と、児童生徒が学校職員と一緒に自主学習に取り組む姿が校内のあちらこちらで見られる。また、授業中、校舎内を徘徊する児童もおり、教員以外の職員は、「どう声かけを行っていいものか、そもそも声を掛けてもいいのか対応に困っている」との声から、隔週の水曜日に管理職と学推教師、支援員、用務員、教員業務支援員等の町雇用職員及び学校事務員とで情報交換会を開催し、課題に対する対応を確認。全職員が応援団として取り組む体制づくりを目指している。

5 ふるさと学習（方策5）

(1) 「もとぶ型キャリア教育」を推進

総合的な学習の時間を軸に小学3年生から中学3年生まで系統立てたカリキュラムを基に、ふるさと本部について理解を深める。そのため、総合的な時間20時間をもとぶ教育魅力化プロジェクトのスタッフが授業づくりから授業運営までをサポート。美ら島財団の協力の下、学習を展開している。

【探】探究課題		【活】活動例	
学年	視野	テーマ	
		自然への関わり方	社会への関わり方
中3	国内外	【探】本部町をどうしていきたいか 【活】本部町PR.こども議会	
中2	国内外	【探】本部町・沖縄県の特徴とは 【活】郷学旅行、サンゴ学習	
中1	国内外	【探】社会に発揮したい能力は何か、そのためにどう成長していくのか 【活】職場体験	【探】国際社会をどう生きるか 【活】SDGsワークショップ
小6	国内	【探】勉強と仕事の違い、働く姿勢 【活】職場見学	【探】なぜ戦争になるのか、戦争が起こるとどうなるか 【活】戦跡めぐり、修学旅行
小5	県内	【探】動植物に溢した生態系、保護/駆除活動の意義 【活】地域の河川観察 在来種外来種講話 グリーンベルト	
小4	町内	【探】人間と植物の関わり (栽培の目的) 【活】畑作体験	
小3	町内	【探】人間と動物の関わり (飼育の目的) 【活】ウミガメ飼育体験、栽培センター見学、牛舎見学	

【探求課題体系一覧】

(2) 行政区生徒会

本校は5つの行政区からなり、各区の区長と連携し、行政区生徒会を組織している。学校外の活動については区長を中心とし、各行政区で行われる慰霊祭や行事等に参加している。

V 成果と課題

1 成果

- (1) 町雇用職員（学推教師、支援員、魅力化スタッフ等）と連携・協働した取り組みを行うことで、教員の働き方改革や全教職員で児童生徒のサポート体制をとることができた。
- (2) 学ぶことに必要な場所、人、ものを整えることで、朝、放課後など自分の隙間時間を活用して学習する児童が多くなってきており児童の姿勢に変容が見られた。

2 課題

- (1) 基礎学力の定着に向けた学校での学びと家庭での学びの往還の浸透
- (2) 特別支援教育の視点を踏まえた授業改善、学校、学級、教科経営の組織体制
- (3) 効果的なICTの活用と協働的な学びとのバランスある授業展開

嘉手納町学力向上推進における小学校学力向上の取組み

－ 小中一貫部会の充実と魅力ある学校づくりに向けて －

嘉手納町立嘉手納小学校
校長 池味 勇

I はじめに

嘉手納町には公立の小学校2校、中学校1校の計3校があり、それぞれの学校において子ども達が主体となった魅力ある学校づくりに取り組んでいる。また、学校数に加え各学校間の距離も比較的近くコンパクトにまとまっているため、小小や小中の連携が図りやすく、嘉手納町学力向上推進委員会では連携・協働の強化を図るため「小中一貫部会」を設置し、嘉手納型小中一貫教育を推進している。そのような中、令和4年度「第45回中頭地区学力向上実践推進大会」では、屋良小学校の取組がシンポジウムの内容に取り上げられ、地区内へ先進的な取組として紹介された。そこで、嘉手納町学力向上推進の取組を屋良小学校の事例並びに嘉手納小学校の取組も合わせて報告する。

II 地域の概要

嘉手納町は嘉手納ロータリー周辺に公共施設がまとまって配置されており、学校教育活動における公共施設見学等において利便性が高い。特に、屋良城跡公園や道の駅かでな、比謝川自然体験センター、マルチメディアセンター、未来館など、嘉手納町の歴史や自然、文化、平和教育など、様々な活動に活かせる施設についても比較的近隣に点在していることから、学習活動を行う上でとても活用しやすい状況にある。また、コロナ禍のため直近の3年間は中止となったが、平成26年から秋田県大館市との授業体験交流事業や大館市教職員招聘事業を実施しており、教育先進地である秋田県大館市から授業づくり等への様々な取組を本町教育行政に落とし込み、各学校での実践化が図られている。

III 学力向上推進への校長の関わり

各学校での学力向上推進の取組については、嘉手納町指導行政の基本方針を踏まえた町学力向上推進委員会の計画を基に取り組みされており、各学校長は推進委員会の推進役員として町施策と各学校の取組をつなぐとともに、各学校の取組が統一・徹底・連動していけるよう、リーダーシップを発揮して様々な取組の主導に努めていく。

IV 学力向上推進の具体的な取組

1 嘉手納町学力向上推進委員会における小中一貫部会の取組

(1) 目指す児童像

「I」を伸ばし「We」の世界を広げる児童生徒
～3つの資質・能力を身に付けた児童生徒～

(2) 嘉手納型小中一貫教育のねらい

必要性をふまえたなかで、「I」を伸ばし「We」の世界を広げる児童生徒の育成を目指し、小中一貫部会では、以下の実現をねらい嘉手納型小中一貫教育を推進する。

- ① 小学校と中学校の義務教育の9年間を一貫した系統的・計画的な教育の実現
- ② 小学校と中学校の教員が教育上の目標や課題を共有して、見通しのある効果的な教育活動の実現
- ③ 児童生徒の校種間（異学年）の交流を通して、豊かな人間性や社会性を育成の実現

(3) 小中一貫部会における各班の役割

- ① 授業改善班（各校の研究主任）

R4担当校：屋良小学校

- 小中学校の教師による指導案検討会及び幼小中の教師による授業研究会の企画運営
- ② 生活向上班（各校の生徒指導主任） R 4 担当校：嘉手納小学校
小中学校で身に付けさせたい学習規律の確立や望ましい生活習慣の確立に向けた取組
取組例：学習規律の確立（聞く力等）、児童生徒のあいさつ、返事、反応等
- ③ 交流連携班（各校の児童会・生徒会担当） R 4 担当校：嘉手納中学校
小学校 1 年生から中学 3 年生が参加する小中合同行事等を企画運営
取組例：小中合同遠足、小中交流合唱祭、小中体力測定会、小中レクレーション大会等
- (4) 各班の具体的取組（本報告では小学校分のみ記載）
- ① 授業改善班（各校の研究主任） R 4 担当校：屋良小学校
ア 三校合同授業研究会に向けた取組
ア) 班会 年間 4 回
イ) 指導案検討会（3 校合同での指導案検討会の予定が各学校に変更して実施）
ウ) 三校合同授業研究会 令和 4 年 9 月 2 日（金）3 校 5 教科で実施
- ② 生活向上班（各校の生徒指導主任） R 4 担当校：嘉手納小学校
ア 三校の生徒指導計画を見直し、校種等の発達段階も考慮しながら統一性を持たせる。
全体計画、組織図、〇〇っ子の約束、よい子の一日、生活目標 等
- (5) 成果と課題
- ① 成果
ア 三校合同授業研究会では、小中学校を見通した学習内容の繋がりに気づくことができ、児童生徒の変容を見取る授業参観の視点とそれに基づいた授業研究会の実施で、子どもの姿から捉えた授業改善の在り方を深めることができた。
イ 各校の生徒指導計画の内容を、校種等の発達段階も考慮しながら可能な部分は揃えたことで、共通した取組や方向性を確認することができ、小小連携や小中での一貫した指導につなげることができた。
- ② 課題
ア 公開授業の数が多いと参観する職員の数が減るため、意見交流を深める必要も鑑みると次年度は各校 1 授業を検討する必要がある。

2 特色ある学校の取組

(1) 屋良小学校 校長：稲嶺 盛幸

～屋良小学校学力向上推進について～

本校の学力向上推進組織は、町学推組織との整合性を図るため、校務分掌と関連させた

- 学びいっぱい・夢実現プロジェクト（授業改善・校内研修・キャリア教育、ふるさと学習等）
- やさしさいっぱいプロジェクト（生活向上、生徒指導等）
- イベント実行プロジェクト（児童会・生徒会交流合同イベント、体力向上、安全指導の充実等）へ位置づけて推進した。

① 活動の実際

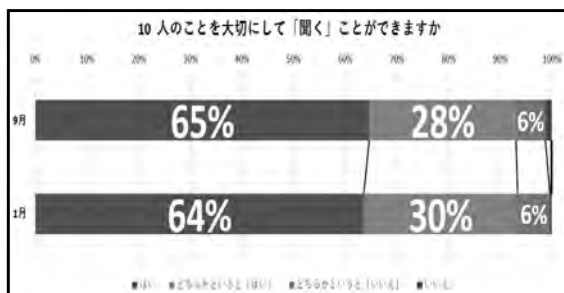
ア 学びいっぱい・夢実現プロジェクトを中心に

授業改善・校内研を推進する上で最も大事にしたのが「相手のことを大切にしたい聞き方の指導定着を通じた支持的風土の醸成」であった。

その定着を図りながら、嘉手納授業改善いきいきプラン「嘉手納の探究型授業」

- 子ども声をひろったねらいの設定○個で考える時間の確保○ねらいに合った学び合いの場の設定 ○「めあて」に正対した「まとめ」◎「視点を示したふりかえり」

授業改善で「主体的・対話的で深い学びを目指す」



二回の学校評価（児童）では、数値に大きな変化はないものの引き続き「相手のことを大切にした聴き方指導・定着」を基盤とした授業改善を進めることを再確認した。

② 授業と連動した家庭学習の定着

- ・目標冊数の設定
- ・ノート交流、課題プリント
- ・自主学习サポートノート

【児童の学習力をふりかえる機会となった臨時休業】

新型コロナウイルス蔓延により臨時休業が繰り返される中、児童が自ら考え学ぶ「学び方」について全職員で以下の課題を確認することができた。

- ア 学習内容を指示がないと、自ら学んでいく・自ら学びたいという力・意欲が身につけていないのではないかな。
- イ 学習内容を教師が決め、計画を示し評価していることが児童の学ぶ力の育成へつながっていないのではないかな。
- ウ 教師が評価し、量の多さを重視し、児童自身による目標や評価がないのが、目的意識・達成感への希薄さへつながっているのではないかな。

上記の現状や他調査結果等を踏まえ、自学自習サポート「屋良っ子夢ノート」の作成・取組を通して将来に向かって学び続ける「自立した学習者」の育成を図ることとした。

エ 自学自習サポート「屋良っ子夢ノート」の取組

○活用イメージ

週時程に自学タイム（10分）を設定し、日々の授業の振り返りを生かし、復習内容や更に調べてみたい内容を決め、家庭学習へつながるようにした。



○低学年と高学年の実例

■3学年

日	やるもの	宿題
1日	①ノート	7/14宿題
2日	②授業	④E1/P
3日	③7-12セット	⑤自習10分
4日	④音	⑥カード
5日	⑤お絵かき	⑦宿題

メモ（明日の予定）や宿題は、登校後に記入

今日の振り返りと自学の計画は「自学タイム」で記入

宿題は、教師からの課題を行う

振り返りと自学内容の連動が、図られつつある

■6学年

日	やるもの	宿題
1日	①宿題	②宿題
2日	③宿題	④宿題
3日	⑤宿題	⑥宿題
4日	⑦宿題	⑧宿題
5日	⑨宿題	⑩宿題

宿題は、教師からの課題を行う

宿題と自学の時間を可視化

自学は、必要な学習を各自で計画する

○計画的学習の変容

「自分で勉強の計画を立てることができますか」という学校評価（児童）の質問回答では、積極的回答の「はい」が9月：47%から1月：60%へ向上した。



○夢ノートの取組を通して

【児童】

- ・今日の一日を振り返り、自主学習の計画を立てる子が増えてきた。上級生の取組みを見学させてもらったことで、児童の意識が高まってきた。
- ・自分で決めたことを、実行できると自信につながるという体験を重ねていく。

【教師】

- ・試行錯誤の1年であったが、「何のために」という目的を明確にして、どのように取り組んでいくのかを全職員で話し合い、探っていったことが1番の成果であった。
- ・授業と家庭学習のつながりを意識した更なる授業改善や教師の働きかけを工夫する。

【保護者】

- ・夢ノートを通して、家庭との連携が密になってきた。子供の学習に関心を持つ保護者が増えてきた。
- ・学校便り等を通して取り組みを積極的に発信し、さらに家庭との連携を図る必要がある。

③ 屋良っ子 夢スクール（地域の人々との交流を通して勤労の意義について考え、将来の進路選択に向けて意欲を育てる）



（フラワーアレンジメント）



（ 絵手紙で気持ちを表す）

6年生の振り返りでは「普段の生活で勉強するとき何も考えずに勉強するのではなく、自分の夢をかなえようという気持ちで勉強するとやる気も出てくるし、また頑張ろうという気持ちにつながるということが分かりました。」これは、自分の夢をかなえようという気持ちで勉強するとやる気も出てくるという気づきから、教師は何のためにという目的意識を持たせる働きかけを行うことや、子供のやりたいを引き出す魅力ある授業を日々行っていく大切さを実感した。

(2) 嘉手納小学校 校長：池味 勇

～嘉手納小学校学力向上推進について～

本校では、子ども達が主体となった魅力ある学校づくりに向け、嘉手納町指導行政の基本方針や嘉手納町学力向上推進計画の内容を押さえながら、知育・徳育・体育の学校教育目標の3つに加え、特別支援教育の4つの視点で学力向上推進の取り組みを実践してきた。その中から、令和4年度に実践した主な取組について報告する。

① 活動の実際

ア 共通実践と一事徹底の取り組み（教師の日常的な共通実践と児童への指導事項）

○ 共通実践（教師の姿勢）・・・「日常的なボイスシャワーの実践」

- ・日常生活や授業におけるプラスの声かけ
- ・ポジティブフォーカス（できないことではなく、できていることに目を向ける）

令和4年度 嘉手納小学校 振り返りシート				
月	週目	共通実践（日常的な授業改善の視点）	自己評価（4が良い評価）	
1	承認・勇気づけのボイスシャワーの実践（よさを見つける）		4	3 2 1
2	聞く態度の指導（人のことを大切にできく子）		4	3 2 1
<振り返り>				
.....				
.....				

【週案に添付し、毎週振り返る】

○ 一事徹底（指導事項）・・・「人のことを大切にできく子」

- ・聞き方名人をめざそう

イ よく考え進んで学ぶ子（知育）

○ 嘉手納の探究型授業

児童一人ひとりが課題意識を持ちながら、自分の考えを持ち、話し合い活動を通して思考力を高め、課題を解決していく授業



めあて→自分で考える→話し合い共有する→まとめ→振り返り

○ 授業と連動した家庭学習の充実

授業で取り組んだ事が家庭学習を通してしっかり定着できるように、授業と連動した課題を出している。又、令和4年度後半から「自学自習サポート『夢ノート』」を活用し、学校からの宿題と自分で考える自学自習を「夢ノート」に書き込ませている。

児童が自分で自分の生活を振り返ることによって、自分の課題に気付き、自分のやりたい学習を考えられるように「夢ノート」を活用している。させられている学習ではなく、自分で考える学習を行うためにも、「夢ノート」の活用は大変有効だと考えられる。「夢ノート」という記録の形は、「やりたいこと、なりたいものを実現するためには、今、そしてこれから何をすべきか」というプロセスを考えることにつながる。毎日の自学自習は、児童の夢実現にも大きく関わってくる。



【夢ノート】

○ 課題解決の力を育むキャリア教育（学ぶことや働くことの尊さを実感させ、社会的自立の基礎を育てる。）

児童の夢や目標を掲示したり、「嘉手納っ子夢スクール」を実施し、児童が様々な職業に従事している地域の方々の話を直接聞いた



【ぼくの私の夢】

【夢スクール】

り、体験したりする活動を通して、様々な職業に関心を持つと共に、将来「なりたい自分」に向かって努力していくことの大切さを実感した。

ウ 思いやりのある子（徳育）

- 黙清掃の徹底（黙って清掃を行う。自分の役割を自覚し、時間内に清掃を終える）
黙って清掃することで集中力を高め、早く終えて友達を手伝うことにより「仲間と協力する態度」の育成にもつながった。



【黙清掃大会(他学年の様子を見学)】 【清掃用具を大切に扱う】

- 人権教育の充実（自分の大切さと共に、他人の大切さ、違いを認め、共感する）
「嘉手納町人権擁護委員会」の方を招いて「人権教室」を実施した。また、児童会を中心とした「いじめ0宣言」の実施や毎月行っているアンケートで、人権の理解や意識は高まりつつある。

更に令和4年度は「人権の花運動」にも取り組み、栽培活動を通して、友達と協力することや命の大切さを考えるきっかけにすることができた。



【人権教室の実施】



【人権の花の取り組み】

エ 心身ともにたくましい子（体育）

- 1校1運動（縄跳び運動）

本校は体力テストの結果から、持久力に課題があることが分かった。そのため、持久力を高めるよう体育の授業で縄跳び運動に取り組んでいる。又、「校内縄跳び大会」を行うことで縄跳びに対する意欲を高めると共に、学級で協力して取り組むことや目標に向かって頑張ることの大切さを実感することができた。



【縄跳び大会に向けて】

② 成果と課題

ア 成果：令和4年度は「みんなで（組織）する。つづけて（継続）する。とことん（徹底）する。」を合言葉に多くの実践を積み重ねてきた。ベテランと若手がそれぞれの持ち味を生かして取組を推進したことや、コロナ禍でも取組を止めずできる方法で実践したことが、教育活動の質の向上につながった。

イ 課題：コロナ禍により外部人材の活用は十分できなかった。令和5年度は、地域コーディネーターとの連携・協働をとおして地域人材の活用を充実させ、特色ある取り組みにつなげていきたい。

V 成果と課題

- 1 成果：嘉手納町学力向上推進計画のもと、「小中一貫部会」や各学校における「子ども達が主体となった魅力ある学校づくり」の取り組みなど、小中3校が連携してベクトルを揃えた取り組みを推進したことが、各学校の特色ある取り組みの推進と町課題の解決につながった。
- 2 課題：コロナ禍で活動を控えていた3校児童生徒の交流活動については、児童生徒主体の魅力ある学校づくりへとつながることからも、教師の適切な関わりのもと、児童会や生徒会を中心とした交流活動を展開していきたい。

ふるさと首里を誇りとし知・徳・体の調和のとれた児童育成を目指して

— 教育課程の効果的な推進による学力向上 —

那覇市立城西小学校 校長 仲地 千佳

共同研究者

上江洲 卓（那覇市立城東小学校）石川 博基（那覇市立城北小学校）中山 盛延（那覇市立城南小学校）
上間 幹夫（那覇市立大名小学校）大村 朝彦（那覇市立石嶺小学校）

要旨

県の施策、那覇市学力向上推進計画（ふくぎじんぶな〜プラン）に基づき、首里管内小学校6校は教育課程を円滑に進め、確かな学力の育成に取り組んでいる。

成果○校長の方針の下、学推担当のリーダーシップによって学校全体の組織運営が機能している。

○各校とも課題解決に向け、校内研究の推進や授業力向上の取組を実施することにより、児童の確かな学力向上に繋がっている。また「自立した学習者」の育成は、これまで培ってきた家庭学習の取組や基礎的・基本的学習の定着の取組、教師の授業力で成り立っていると考えられる。

課題●安全安心な学校づくりを地域ぐるみで行うとともに、持続可能で効果的な研究推進と合理的配慮に基づくインクルーシブ教育や授業改善を推進する。

那覇市立城西小学校〈児童 630 名〉

1 学校・学級の支持的風土の醸成

①基礎的・基本的学習の構えを揃える取組

「城西スタイル」「小中一貫共通実践事項」の実践。

②児童会による学校をよりよくするための自治的活動の推進

「やさしさポスト」設置や各月行事の取組を児童会が行う。

③パワーアップタイム、漢字力アップタイム、家庭学習等を児童、職員・保護者共通理解のもと推進する。

④インクルーシブ教育の充実

- ・特別支援教育コーディネーターを中心とした研修
- ・愛着障害理解や生徒指導理解など「信頼される教師」を目指したワークショップ形式の研修会を開催。

2 校内研修の充実

① 一人一授業公開 示範授業、初任者研修、経年研修等を実践する。

学習指導要領を基に管理職等から助言を受け次時に生かす。

② 学校課題を解決する校内研究の実施

令和5年度県指定「SDGs 達成に向けた教育実践」校とし、ESD 教育を基に地域特色を生かした総合的な時間、生活科等の年間指導計画（ESD カレンダー）作成、授業実践、講師を招聘した研修会を行っている。今日的な課題を児童が積極的に ICT 機器を活用、フィールドワークを行い、個別最適な学習と協働的な学びの実現ができるよう努めている。



7月 セタのお願いコーナー



家庭学習お知らせコーナー



本校特支コーディネーターによる研修



【6年公開授業（総合）】

那覇市立城東小学校〈児童 489 名〉

1 「確かな学力」の育成

- (1) 石嶺中校区小中一貫教育
 - ・城東小・石嶺小・石嶺中 3 校共通実践「授業実践 10 か条」
〔図 1〕
 - ・各学校での校内研「研究授業」に参加，授業研究会へ積極的に参加
- (2) 基本的生活習慣の確立
 - ・「よくわかる！城東小学校」（学校経営に関わる学習面・生活面の規則）を作成，全家庭へ配布〔図 2〕
 - ・「学習の心構え 10 か条」を全校一斉による確認と実践，ふりかえり
- (3) 年 2 回の「がんばろう旬間」学校と家庭が連携した家庭学習の定着の実施
 - ・家庭学習の質や量，がんばりリレーノートを実施，優れた取組ノートを展示，表彰〔図 3〕
- (4) 県到達度調査への取組を通して
 - ・学級担任・専科・管理職も交えた，当該学年までの学習の定着状況・習得状況を揃える
- (5) 学習を支える施設や情報機器の活用
 - ・学校図書館の活用や I C T の活用

2 校内研修の充実

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」「言葉による見方・考え方」の視点に立った授業づくり
 - ・「ロングレンジ」（主体的な交流学习）の実践
 - ・教科指導や I C T，学級経営等々各専門分野のエキスパートによる校内研修
- (2) 研究授業の充実
 - ・隣学年研 5 回，全体研 1 回実施〔図 4〕
 - ・全体研前に，全職員を対象に「模擬授業」を実施することで，全職員での授業づくり

3 その他

- (1) 生活リズムアンケート調査
 - ・生活リズム確立のため，学校と家庭で課題の共有と指導
- (2) 年間を通したマネジメントサイクルの実践
 - ・年度末及び年度初めに課題を明らかにし，課題解決に向けての日々の実践，評価，改善を目指した P D C A の実践

石嶺中校区 小中一貫 授業実践10か条

- 1 互いに認め合う支持的風土の醸成
- 2 言語環境・教室環境の充実
- 3 身につけたい力を踏まえた「めあて」の設定
- 4 「めあて」に正対した「まとめ」と「振り返り」
- 5 学習のねらいに迫る意図的・計画的な発問
- 6 思考を広げ深める発問の工夫
- 7 言語活動を重視した表現する能力の育成
- 8 思考を広げ深めるための教具・ICT機器の活用
- 9 児童・生徒の思考過程に沿った構造的な板書
- 10 思考の足跡が見えるノートの指導



図 1



図 2



図 3



図 4

那覇市立城南小学校〈児童 388 名〉

1 児童一人一人のよさや可能性を伸ばす学級経営

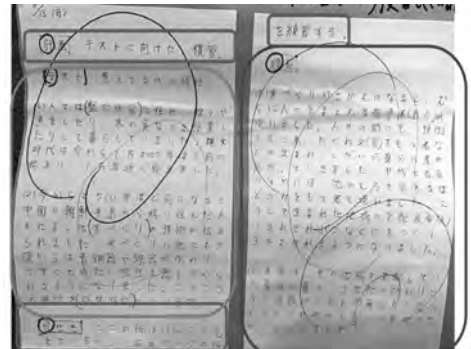
- ① 授業の基盤となる支持的風土のある学級経営
 - ・ 学習規律、言語環境、教室環境の充実
 - ・ 困ったさんアンケートの実施と教育相談の実施
 - ・ 「人権の日」によるスマイルデーカードの掲示実施
- ② 「自己指導能力」の育成
 - 子どもの見取りや多様な学び（自学自習力）について育み、合意形成・意思決定や自己有用感を大切に学習活動の展開
 - ・ 個に応じた家庭学習の工夫と充実
 - ・ 話し合い活動の実施と充実
 - ・ 道徳教育の計画的な実施
- ③ 児童会を中心とした活動の推進
 - ・ 各委員会の計画的な活動と自主的活動の推進
- ④ 合理的配慮に基づく学級運営と授業改善
 - ・ 校内支援委員会におけるアセスメントの充実と組織的実行



け 計画	「〇〇ができるようになりたい」「〇〇をくわしく知りたい」のために、どう取り組むとよいと考えて、計画を立てます
テ テスト	計画にそって、学習の仕方を自分なりに工夫・絵や図を使う・仲間分けする 内容によって、予習、復習など、学習方法の工夫
ぶ 分せき	○「計画がうまくいった理由」 ○「うまくいかなかった原因」 できた・できるようになったこと、これからはがんばることをはっきりさせる
れ 練習	○まちがえたところをやり直し ○いた問題にちようせん ○できていれば、別問題にちようせん

2 主体的に取り組む児童の育成

○学推の取組で各学期に「家庭学習強化旬間」を設け、家庭学習の取組について子どもと一緒に確認している。その中でも今年度は子どもの自学自習力と高めていくために「けテぶれ学習」を推奨し、取り組んでいる（子ども自らが課題を設定し、その課題解決に向けて学習し、分析をしていくようなサイクルを回していく）。



3 小中一貫教育に関する取組

○小中一貫コーディネーターを中心に前年度の課題を踏まえ、計画的に共通実践事項に取り組む他方、合同授業研究において「授業リフレクション」を導入し、子どもの見取りに焦点化した授業研究会を実施した。

- ・ 西南授業スタイルの実施
- ・ 授業リフレクションによる授業研究の実施



那覇市立大名小学校〈児童 171 名〉

1 児童一人一人が大切にされ、よさや可能性を高め伸ばす学級経営

- ①諸学力調査等状況を把握し、落ち込みの見られた箇所を全職員で確認し、授業改善を実践する。
- ②学習を支える力の育成で、約束事項大名っ子7つの道具を共通実践し学習環境を揃える。



- 2 「確かな学力」の育成とその土台づくり
- ①教育計画に5か年プラン・プロジェクトⅡダイジェスト版、「問い」が生まれる授業サポートガイド等を入れ込み共通確認として提示。
 - ②朝の委員会活動に取り組み、美化や栽培等学校の環境向上に取り組んでいる。
 - ③あいさつ運動、トイレクリーンキャンペーン等を見童たちが主体的に計画し取り組んでいる。

【重点事項1】既習事項の定着を図る取組の充実
今年度研究主題である「国語」について研究主題の共通確認と授業改善について。

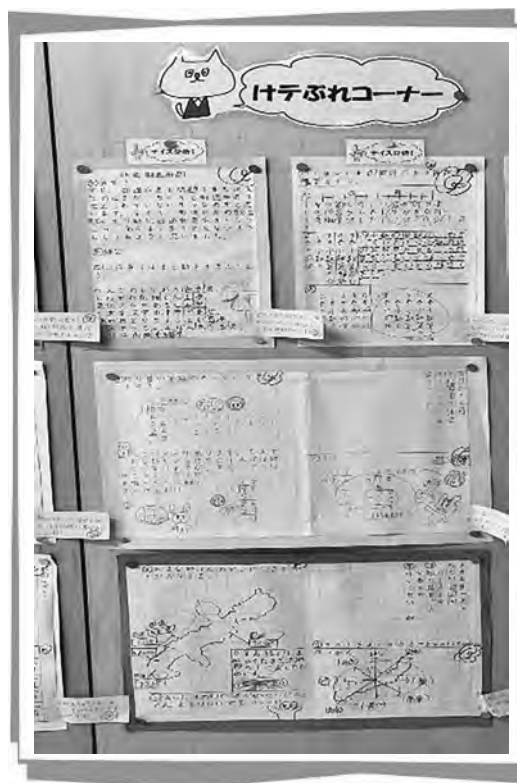
○年度始めに、本校校内研のテーマ「文章を正しく読み、自分の思いや考えを適切に表現できる児童の育成」を提示し、研修計画や趣旨を全職員で確認した。

○理論研で学んだことの実践

【重点事項2】全国学テ等の結果を分析し、落ち込んでいる問題を共通確認し、今後の指導に取り組む。

○自学自習の取り組みの一つとして「けテぶれ」の実践、実践ノートの掲示などに取り組む。

○職員ひとり一授業を公開してお互いの意見を聞き、指導力向上を図る。



児童一人一人に学ぶ力・学び合う力を身に付けさせ 確かな学力の定着を図る取り組み

南風原町立津嘉山小学校
校長 瑞慶覧長洋

I はじめに

津嘉山小学校では児童に「確かな学力」を身に付けさせることをめざし、グランドデザインの中で重点目標として、「聴き合い・学び合う子の育成～相手の話を尊重して聴き、助け・支え合いながら学ぶ子の育成～」に取り組んできた。また、その中で特に今年度は授業改善の視点として「聴き合い学び合う授業の実践」、支持的風土づくりの集団づくりとして支持的風土の4つのポイントを生かした「温かい人間関係づくり」を中心に取り組んでいる。

この重点目標をさらに改善し充実させるために沖縄県学力向上推進5カ年プラン・プロジェクトをもとに、3つの視点と5つの方策を基に、本校児童の学ぶ力・学び合う力を身に付けさせ確かな学力を定着を図る取り組みを推進していきたい。

II 本校と地域の概要

津嘉山小学校は沖縄本島南部、県内で唯一海に面していない南風原町にあり、那覇市に隣接したベッドタウンとしての住宅が増加している。同時に昔から豊かな農村地域でもあり、「津嘉山かぼちゃ」や「はえばる美瓜（なべーらー）」などの農産物が有名である。

学校は、南風原町南西部の自然に恵まれた丘上に位置し、学校から校区が一望でき、その景観は安らぎと夢を与える教育の場にふさわしい位置にある。校区は津嘉山区のみで構成され、全児童数は987人、職員数73人の在籍で学級数41学級（特別支援学級を含む）の大規模校であり今後も増加していく見込みである。

津嘉山区には琉球王朝時代に高津嘉山から飛行に成功したと言われる「飛び安里」の言い伝えや、ウルトラマンの生みの親「金城哲夫」の生誕地、また津嘉山大綱引き、組踊り等が残るなどの特徴があり、地域の学校教育に対する思いが強い地域である。

また、スポーツ少年団の活動も盛んであり、バスケット男女、バレー、野球、サッカー、バドミントン等の団体が常時活動しており、全県的に優秀な成績をあげている。



津嘉山小学校 正門前



校地から津嘉山区を望む

Ⅲ 学力向上推進への校長の関わり

- 1 学校経営方針、学校経営のグランドデザイン、指導の重点の確認
- 2 全教師の日々の授業観察を行いながら、学力向上推進主任、校内研修主任との連携をはかり学年チームとしての取り組みを支援する。
- 3 教職員評価システムを通してめざす目標ベクトルを揃える。
- 4 各教諭の経験等を把握し、キャリアステージにあった役割やアドバイスをを行う。

Ⅳ 学力向上の具体的な取り組み

1 学力向上推進の視点

- (1) 児童の実態を踏まえた目標を設定し、学力向上推進の主体的な計画を立てる。
- (2) 学校、家庭・地域社会の役割を明確にし、実施時期、実施対象、実施方法などを明らかにした具体的な計画に基づいた学力向上を推進する。
- (3) 具体的な取組の共通理解を図り、継続して取り組むことができる日常的な学力向上を推進する。
- (4) 児童の実態に基づく具体的な達成目標を設定し、日常的な取組をする中で活動を評価して取組を見直しながら実践するマネジメントサイクルに基づき実効性のある取り組みを展開する。

2 取組の重点

- (1) 学びの質を高める「5つの方策」を推進する。

①質的授業改善

- 学んだことの意義や価値を実感し、自己肯定感を高める個人内評価等の取り組みを日常化する。
- 支持的風土の4つのポイントを生かした授業づくりを日常化する。
(規範意識を醸成する・自己存在感を与える・共感的な人間関係の育成・自己決定の場を与える)
- 資質・能力を育むために、単元を見通した授業改善を日常化する。

②組織的共通実践

- 見取る視点・観点を共有し共通実践する。 ○学習の基盤となる資質・能力の育成。

③発達の支援

- 確かな児童理解 ○支持的な風土をつくる学校・学級経営の充実 ○学びに向かう集団づくり

④学校組織マネジメント

- 学校課題解決に向けた組織マネジメントの機能を高める。
- 学校評価と関連付けたカリキュラム・マネジメント及び年間サイクルの確立。
- 授業改善・学校改善に向けた校内研究体制の充実

⑤学校連携・地域連携

- 市町村の特色を生かした施策推進による学校づくり
- キャリア教育の視点を踏まえた校種間の連携強化
- 学校・地域・家庭の互恵的関係の構築

3 取組内容

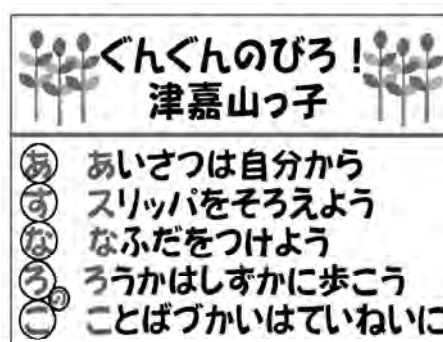
(1) 学力向上推進プロジェクトⅡ【方策1．方策2】を中心に教育活動を展開した。

①【方策1】日常化する（質的授業改善）

- ア 児童が学んだことの意義や価値を実感し、自己肯定感を高める個人内評価等の取り組みを日常化する
- イ 生徒指導の4つのポイントを生かした授業を日常化する。
（規範意識・自己存在感・共感的な人間関係・自己決定の場）
- ウ 資質能力を育むために、単元を見通した授業改善の日常化

②【方策2】そろえる（組織的共通実践）

- ア 規範意識・マナーの向上
- イ 見取る視点・観点の共有化
- ウ 学習を支える力の共有



共通実践の合言葉

(2) 見通しをもって自ら学習する児童の育成をめざし、「振り返り」の充実に努める。

○振り返りを次の学習に生かすことに重点を置き、児童自身が自らのよさや課題、習熟状況を把握し、必要な学習内容や方法等について自ら検討・実施するなど見通しをもって自ら学習しようとする意識の醸成をめざし、次の実践に努める。

- ① 毎時や単元を通しての振り返りの視点を身に付けさせる。
- ② 振り返りの時間確保のためのタイムマネジメントの確立。
- ③ 振り返りを、次時へとつなぐ本時の展開（導入・展開・終末）振り返りの視点の掲示の検討。



「振り返りの視点 掲示物」

(3) 校内研修を中核とした授業改善への取り組み

①学年での取り組み

・全国学力学習状況調査や標準学力検査等の結果や分析して課題を明確にし、具体的な取り組み目標を設定する。

②全職員参加の公開授業・授業研究会の実施

低学年部、中学年部、高学年部別に分かれ、全職員参加の主事招聘授業を行い、授業研究会で研究を深める。

④校内研修に即した内容で、一人一授業を、2学期を中心に公開授業を行う。

○聴き合い・学び合う授業の実践

ペア・グループ学習を一単位時間の授業の中に積極的に取り入れる。

発問・問い返しの工夫により思考を深める



見通しを持ち一人学び

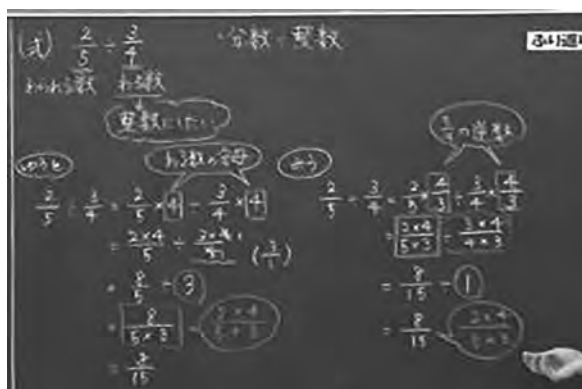


ペアで発表し合う



タブレットで共有

○授業の中で大切だと感じたことやキーワードを「吹き出し」として表す



ポイントを吹き出しで板書



大切な事項を吹き出しでノート

(4) 支持的風土の4つのポイントを生かした児童会活動による自治的活動の推進

児童が学校に登校するのが「楽しい」と感じ、積極的に活動する学校・学級集団作りをめざし、学校・学級の中で全児童が生活できるよう、支持的風土の4つのポイントを生かした児童会活動をめざす取り組みを行った。

支持的風土の4つのポイント			
自立	自分のよさを生かした目標設定 自分のよさ、努力、成長の内面化	目的意識 メタ認知力	非 認 知 能 力
承認	教師・友達・保護者からの承認・勇気づけ 努力や成長、貢献を見取り、伝える	自己肯定感 自己理解	
所属	役割・つながりの「しかけ」(絆づくり) 他者貢献、自治的な活動ができる機会を	主体性 協働性	
安心	規範意識の醸成(居場所づくり) きまりは、何のためにあるのかを考える	規範意識	

支持的風土の4つのポイント



〈児童会活動のスローガン〉

☆具体的な例☆

全児童を巻き込んだ「一年生を迎える会」の実践～一年生を笑顔にするには？～

1年生を迎える会では ①2～6年生 ②各委員会(6年生)を対象に代表委員会を開き、ねらいの確認と役割分担を実施しねらいと役割分担を話し合った。このねらいの確認と役割分担の共通確認をおこなうことで児童の参画意識をうながし、児童が中心となる行事になるように実践をした。児童は自分たちの意見が反映された迎える会に積極的に参加し、迎えられる新入生、迎える在校生がひとつになった行事が開催できた。



第1回代表委員会(各委員会)



第2回代表委員会(2～6年生)



第3回代表委員会(最終確認)



委員会ごとで役割分担



一年生を迎える会当日①



一年生入場の様子

また、この全校児童を巻き込んだ「一年生を迎える会」の活動から児童会を中心に取り組むを継続して、「児童会テーマの作成（全児童へのアンケート実施）」、「学校のマスコットキャラクターの作成」等を行い児童の児童会活動への参画意識の高揚をはかった。



児童会テーマ



マスコット「つかキラビ」

V 成果と課題

1 成果

- 共通実践事項「あすなるのこ」に日常を通して実践することによって、学習を支える力に定着が見られた。
- 単元を通して、ふり返りを次時につなげながら学習内容をしっかりと押さえる授業構築への筋道が見えてきた。
- 授業改善リーダーを中心に、全国学力学習状況調査や標準学力検査等の結果から課題分析をとおして、課題解決に向けての取り組みが進んだ。
- 支持的風土の4つのポイントを生かした児童会を中心とした自治的活動を推進したことにより児童の学習活動に対する意欲が高まった。

2 課題

- 児童の自主学習力を伸ばす取り組みについて研究を深めていきたい。
- 次の学習につながる「振り返り」についてさらに実践を進めていきたい。

伝え合い、理解し合うことで成長が実感できる児童の育成

－ 学び合いの授業を通して －

多良間村立多良間小学校
校長 与座 篤

I はじめに

中教審答申では「個別最適な学び」と「協働的な学び」の重要性が提言されている。また、沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡには学力向上推進の3つの視点「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」「組織的な関わり」が示されている。

本校で取り組んでいる成長の実感を意識した授業づくりは、「個別最適な学び」「協働的な学び」および3つの視点に向かう取組になる可能性があると感じている。そこで、取組の方向性や方法等を確認しながら、日常的な授業改善を進める研究として、主題を設定した。

II 地域と本校の概要

多良間村は、宮古島と石垣島とのほぼ中間に位置し、面積約20km²で楕円形をした多良間島と、約8km離れた水納島の2島からなり、海と森に囲まれていて、「日本で最も美しい村」連合に加盟している。人口は約1100名、基幹産業は農業で、さとうきびを中心に葉たばこ、野菜等の農作物が栽培されている。また、畜産業も肉用牛を中心に盛んに行われ、四千頭余の肉用牛が飼育されている。

また、多良間村は、伝統行事を大切にしている。国指定重要無形文化財に指定されている「八月踊り」には多くの児童が役割を得て参加するので3日間は休業となる。(過去3年間は新型コロナウイルス感染防止のため中止となった)近年は、新しい芸能「ふしゃぬふエイサー」を創作し、伝統にしたいという活動もあり、子供たちへの普及を目指している。



運動会でのふしゃぬふエイサー

多良間島には高等学校がないので、子供たちは中学校を卒業すると、多くは沖縄本島のそれぞれが志望する高等学校へ受験・進学する。ほとんどの生徒は親元を離れた生活を行うこととなる。いわゆる「十五の島立ち」



獅子舞(村制110周年記念式典) ヨーンシー(村の古文書研究報告会)である。小学校としても島立ちに向けて、精神面や生活面の自立を期しての支援を、低学年から意識的に取り組んでいく必要がある。

本校は全校児童65名である。また、特別支援学級に12名が在籍している。このように多様な特性の児童集団において、自立を目指し、自己肯定感を育むためには、児童一人一人の特性を互いに理解し、協働的な学びをすすめる、成長の実感を得させることが重要である。

Ⅲ 学力向上推進への校長の関わり

主な関わりとして、次の2つをあげる。

1 ビジョンの提示

学校グランドデザイン

児童一人一人の居場所づくりの意義

授業改善の方向性（授業観の確認、目標の確認、理論の確認 など）

2 授業観察

観察の観点の提示

フィードバック・承認

必要に応じた示範授業の実施

週案のコメントによる激励



Ⅳ 学力向上推進の具体的な取組

1 推進の視点

- (1) 全学年での日常的な授業改善を進める。
- (2) 組織的な研究とするために、校内研修・校内学力向上推進と関連付ける。
- (3) 主体的な学習を実現するために、『学び合い』を取り入れた授業改善を進める。
- (4) 学校全体として、学力向上推進の土台となる支持的風土の醸成、自己肯定感の高まり等をねらいとしたソーシャルスキルトレーニングを取り入れる。
- (5) 研究の検証のために、児童アンケート、学校評価、全県的な学力テスト等の結果を用いる。

2 研究の実際

(1) 実践内容

① 学び合い

児童同士が思考や表現をつなぐためには、学級が児童にとっての居場所となっている必要があり、支持的風土をつくることも重要であることと、主体的な学びとその実感を得させるためには、教師の解説や説明を減らして児童同士の会話を増やすことが重要であることの認識を全教職員で共有した。

そこで、「目標・課題の全員達成を目指す」「一人も見捨てない」「子どもには能力があることを信じる」学び合いの基本的な考え方を掲示ことを重視する『学び合い』（西川純提唱）の実践を職員に提案した。



校内研究では、学校教育目標に向かっていくことを確認しながら、具体的な方法については職員集団に任せることとした。具体的な実践は主に次のとおりである。

- ・オンライン講演の実施

前年度の4月には校内研修会で西川純氏のオンライン講演会を実施し、『学び合い』についての理解を深める機会をつくった。

- ・実施教科を広げる

前年度から算数だけで行っていた実践を他教科にも広げ、教科や単元に沿った方法を模索する。

- ・互いの授業を見せ合う

日常的に互いの授業に入る事を許す雰囲気作りを進める。校長の授業観察はできるだけいずれかの学級を実施する。

- ・授業づくりについての対話の機会

月曜の職員集会の前に二週に一度、十五分間の時間を設けて、授業づくり、学級経営、児童の様子などの実践事例や困り感を出し合うこととした。

- ・校長による授業公開

今年度の4月に、学び合いについての理解の助けにする事をねらいに、5学年の算数の授業を行った。児童らは次第に、確認のために声をかけ合ったり、こまっている級友を探したり、助けを求めたりなど、互いの関わりを進めていった。授業研究会では、様々な質問や意見が出され、改めて学び合いについて考えて話し合う機会となった。



学び合いの様子（6年生）



学び合いの様子（3年生）

② ソーシャルスキルトレーニング（SST）

児童同士の人間関係の改善・向上は児童の自己肯定感の育成に不可欠である。本校児童集団の特徴として、言葉の使い方や伝わり方について無自覚的で未学習なことが多いとの課題が挙げられている。そこで、SSTを取り入れた学級経営を進めることを確認した。前々年度は星槎大学大学院の阿部利彦氏のオンライン講演会を二度行ったこともある。

今年度の主な取組は次のとおりである。

- ・学年や学級の実情に応じる必要があるため、一斉で同内容のSSTの実施ではなく、必要あるいは有意義な内容を、学級担任の判断で特活や道徳の時間に設定する。

- ・年間に3～4回程度行う。
- ・市販の書籍のワークシート集を活用する。
- ・SSTの基本的な流れは右図のとおり。
- ・ソーシャルスキルの定着に向けて授業や行事などの各場面で声かけや確認を行う。

あそぶやくそくがある時どうする?

学校に登校するとクラスの友だちのAさんとBさんに『今日の昼休みは、3人で遊ばせられました。私は『うん、3人で遊ぶことにしよう』とやくそくをしました。ところが、Cさんが『わたしもいっしょに遊びたい』と言ってきました。

あなたが『私』だったらどうしますか。○をつけましょう。

① 『3人で遊ぶやくそくからごめんね』と言う。

② 『AさんとBさんに仲間に入るか聞いてみる』と言って一緒に遊ぶかどうか決める。

③ 『いいよ。一緒に遊ぼう』と言ってAさんとBさんに『Cさんも一緒に遊ぼう』と伝える。

④ 『別の人と遊んだら?』と言う。

⑤ 『今日はむり』と断る。

【わたし】と【Cさん】のやくに分かれて友だちや先生と場面練習をしてみよう

多良間小学校 SSTの基本的な流れ

- ① インストラクション**
 - ・目標とするスキルや、それを獲得する重要性を説明する。
- ② モデルの提示**
 - ・具体例を演じて見せる。
 - ・ペープサート・ロールプレイにして場面をイメージする。
 - ・ゲーム・話し合い活動の始めに行動の確認
- ③ 行動リハーサル・伝え合い**
 - ・実際の場面を想定して、繰り返し練習する。
 - ・ワークシートを記入して伝え合う。
- ④ ふり返り・まとめ**
 - ・向上したスキルや自分の気持ちの変化をシェアする。
 - ・ワークシートのまとめを書く。

(参考資料)
教育技術
あたまと心で考えよう SSTワークシート

自分や友だちの体って大切?

私は、休み時間にAさんとBさんとCさんの4人で楽しく遊んでいました。すると、Cさんの後ろにBさんのズボンを下ろしました。ズボンを下ろしたBさんは、大笑いしていました。Aさんも笑ってました。Cさんは「やるなよ」と笑ってズボンをはきなおし、周りには他の学年の友だちも遊んでいます。

あなたが『わたし』だったらどうしますか。○をつけましょう。

① みんなが笑っているから一緒に笑う。

② おろされたCさんが笑っているから自分もCさんのズボンを下ろす。

③ みんなに『笑わないほうがいいよ』と言う。

④ Cさんに『いやなら笑った方がいいよ』と言う。

⑤ Bさんに『そんなことしたらだめだよ』と言う。

⑥ 何も言わない。

★悪口を言われたら

お話を読んで、考えてみましょう。

Aさんには気のあわない人がたりのクラスにいます。いっつも悪口を言われるので、あまりあつたことはありません。ある日、友だちのBさんからその子が、Aさんの悪口を言っていた、ということを知りました。Aさんほどおどおどして、一生懸命にやらせようきを持って、たりのクラスに行きました。Bさんはその子と、じょうずで、たいてやろうと思っただけです。

Aさんはどうしたらよかったですか? あてはまる番号の前に○をつけましょう。

① 悪口を言った人が悪いから、たいていよかったです。

② 同じように、その人の悪口を言いふらせばよかったです。

③ おどおどしても、たたくのはよくない。たたくのはがまんして、先生に相談するほうがよかったです。

④ たたくのはよくないから、とにかくしつこくがまんをしようと思ったほうがいいよ。

⑤ その子に、なんでそんなことを言ったのかと、聞きに行けばよかったです。

⑥ 悪口を言った理由を聞きましよう。

・会話に入ってこない友だちに

お話を読んで、考えてみましょう。

バスに乗って、出発しました。私は、友達と、しりとりをしたり、おしゃべりしたりして、楽しく過ごしていました。おしゃべりしながら、一番はしの席のBさんが、おしゃべりしなくなりました。みんなのほうをみているのですが、ずっと話さなくなりました。

あなたがAさんだったらしたら、このような時、どうしますか? あてはまる番号の前に○をつけましょう。

① 「いっしょに、しりとりしようよ」とさそう。

② 他の友だちに「Bさんがせんせんしゃべってないよ」と話しかける。

③ 「どうしたの?」と聞いてみる。

④ 「たまたまばかりだと、つまんないよ」と言う。

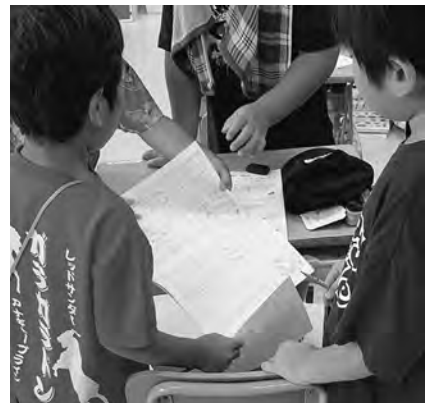
⑤ 「おしゃべりしなよ」と話しかける。

SSTワークシートの例

③ その他の取組から

- ・たらびんノート展覧会

たらびんノートは本校独自の家庭学習帳は数年前前に製本されたものが多数残っている。互いのノートの使い方を確認して自身の家庭学習の仕方を見直してもらおうねらいで、学年を超えて見せ合えるように実施している。



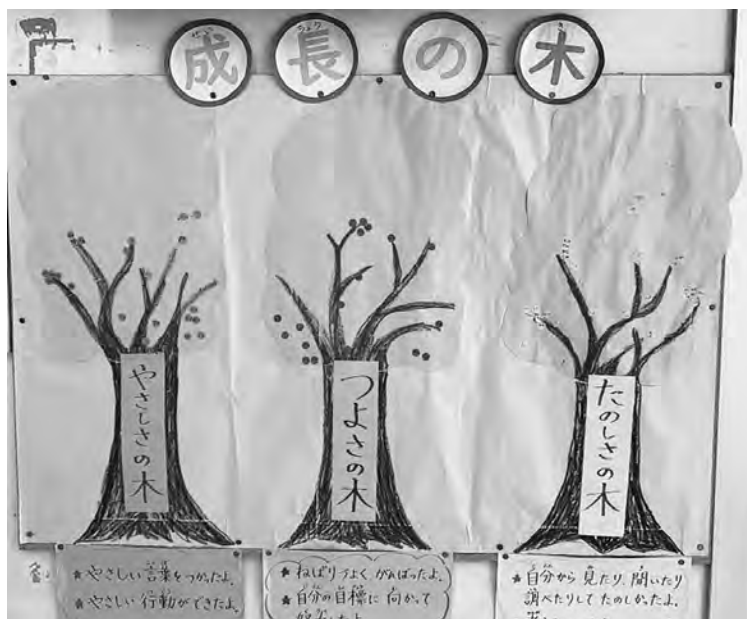
・たらびん生活チェック

児童の生活リズムの確認のために年に2回程度実施している。多くの項目は「できた」が多いのだが、「早寝・早起き」と「家の手伝い」の項目が「できた」の割合が低い傾向はこの数年にわたり続いている。

令和5年5月実施（5/15～5/19）	できた（％）	できなかった
はやおきができた	50.9	49.1
朝ごはんをしっかり食べることができた	96.4	3.6
8時15分までに登校することができた	83.6	16.4
お家のやくそく時間にかえることができた	76.4	23.6
たらびんノートや宿題をきちんとすることができた	85.5	14.5
次の日に必要なものを準備することができた	78.2	21.8
家の手伝いを進んですることができた	49.1	50.9
好き嫌いせずにご飯を食べることができた	90.9	9.1
夜ごはんの後、はみがきをすることができた	87.3	12.7
早くねることができた	69.1	30.9

・成長の実感

校内研究の前年度の課題の1つに、学校経営の重点でもある「成長の実感」についての検証の方法が難しい事があげられている。授業や行事の「ふり返り」から読み取ることも可能ではあるが、信頼度が気になる側面もある。そこで、試みではあるが、「成長の木」の掲示物を全員が見える廊下に掲示し、それぞれの児童が成長を実感したときにシールを貼ってもらうこととした。シールを貼るタイミングや貼っていいかどうかの判断が難しい、高学年があまりシールを貼っていないなどの意見・課題もあるので、今後見直しを図っていく必要がある。



3 検証

1 全国学力学習状況調査・沖縄県定着状況調査の結果から
令和5年度 6年 全国学力・学習状況調査の平均正答率

	多良	平均無回答率	沖縄県	県との差	全国	全国との差
国語	54	3.2%	65	-11	67.2	-13.2
算数	50	0%	58	-8	62.5	-12.5

令和5年度 沖縄県定着状況調査の平均正答率

4年生	多良間	沖縄県	県との差	宮古島市	宮古島市との差
国語	43.7	44.6	-0.9	42.8	0.9
算数	36.1	41.2	-5.1	39.1	-3.0
5年生	多良間	沖縄県	県との差	宮古島市	宮古島市との差
国語	57.9	56.6	1.3	50.7	7.2
算数	67.0	61.6	5.4	59.5	7.5

② 校内研修 児童アンケートの結果（令和5年7月 全学年） から

	肯定的な回答		否定的な回答	
学校での授業・学習はたのしいと思いますか。	56.7%	33.3%	5.0%	5.0%
自分から進んで学習に取り組んでいますか。	44.1%	47.5%	3.4%	5.1%
授業の途中で自分の考えや意見を友だちと伝え合うことができますか。	43.3%	38.3%	11.7%	6.7%
授業の途中でこまっている友だちに教えたり、わからないことは友だちから教えてもらったりしていますか。	58.3%	11.7%	15.0%	15.0%
ソーシャルスキルトレーニングで実施したことを意識して学校生活を送っていますか。	41.7%	43.8%	12.5%	2.1%

V 成果と課題

1 成果

- ① 児童は、授業について概ね良好な捉えをしている。
- ② 調査で無回答率が低いことから意欲的に取り組もうとする児童の姿がうかがえる。
- ③ 教職員は、学び合い及び SST について理解を進め、実践を進め始めている。

2 課題

- ① 学習の定着や評価、SST の定着について否定的な回答がある。
- ② 学び合いや SST 及び成長の実感の検証方法についての検討を継続する。
- ② 児童や職員と対話を重ねながら、校長としての関わり方を見直していく。

VI おわりに

教職員とともに授業改善の取組を進めてきた。校長の授業に対する考えを概ね受け入れてもらい、心強く取組を推進することができている。今後とも全職員が協働的に参画できる学力向上推進を目指したい。

幼児児童生徒一人一人に「生きる力」の基盤となる
「新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力」を育む

与那国町立比川小学校
校 長 友 寄 兼 秀

I はじめに

与那国町は小学校3校、中学校2校あり「郷土ドゥナンを拓き、創造的な知性を備え、人間性豊かな人材の育成を目指す」ことを掲げた与那国町の教育5カ年プランが令和2年度にスタートし今年度4年目を迎えた。各小学校は全校児童7名から50名程度で複式学級を持つ超小規模校となっている。そのため3校が合同で行う行事等も多く、各小学校間での交流授業、5学年での合同宿泊学習、6学年全児童が台湾へ派遣される地域国際交流事業（台湾タバロン小学校との交流授業）、など様々な場面において1つの集合体として活動している。学力向上推進においても「学力向上推進部会」を中心に合同での研究を進めてきた実績がある。特に幼稚園2カ年、小学校6カ年、中学校3カ年計11年間を通し、『15の島発ち「自立・自律」』をめざして力を合わせて取り組んできた。以上のことより、本研究は、与那国町立3小学校の共同研究として報告するものである。

II 地域と本校の概要

与那国小学校は、明治18年に創立され、今年138年の校歴を誇り、与那国町の中で一番古い学校である。現在児童数54名、教職員数11名の小規模校だが、昭和20年代には、700名余の在籍を数え、校歌にもその興盛ぶりが詠われている。山・川・海の三拍子そろった豊かな自然の中で、児童はのびのびと様々な活動に取り組んでいる。

久部良小学校の近くには久部良漁港があり、漁業を中心とした久部良地区の高台にある。海神祭や豊年祭、金刀比羅祭等の多様な地域教育資源があり、特色ある教育課程を編成できる地域に根ざした学校である。

比川小学校は、明治34年鬚川分教場設置に始まり本年度で122年になる。近年は児童数が10名を割り、本年度は7名2学級の超小規模校となっている。職員と児童合わせて12名が共に考え、共に行動し、共に感動することを「まるんな（和）の心」という校訓のもと実践している。

III 学力向上推進への校長の関わり

全職員が学力向上に向けた共通の取り組みを実践する中で、学年間の温度差がなく同じように進めることで、学校全体の意欲が高まり、組織体制も強化され大きな成果を期待することができる。校長として日々の取組状況について確認し、温度差が出ないよう日々の指導・助言に努めることが重要と考える。（与那国小）

学校評価や児童アンケート等を学校長の作成した学校グランドデザインに示した知育・徳育・体育の視点で分析させ、全職員で共通実践できるように週時程等を協議・作成させた。また、人材育成の視点も含め、各校務分掌担当との密な相談を行いながら共通

理解・共有化を図った。(久部良小)

2 1世紀型及び令和型の学力に対する職員の意識改革と児童の非認知能力の育成を学力向上の基盤として推進するべくリーダーシップを発揮していけるよう取り組んでいる(比川小)

IV 学力向上の具体的な取り組み

1 与那国小学校

◎視点1「自己肯定感の高まり」視点2「学び・育ちの実感」視点3「組織的な関わり」を踏まえた学力向上の具体的な取組を、5つの方策に示した。

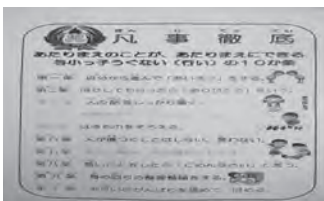
◇方策1 質的授業改善

- ①主体的な授業づくり 校内研 「児童が問いをもち、主体的に学ぶ授業づくり」
- ②「問題の焦点化につながる発問」と「めあて・まとめ・ふりかえり」の実施
- ③生徒指導の視点を生かした授業づくり (自己決定, 存在感・共感的な人間関係・規範意識)



◇方策2 組織的共通実践

- ①学習規律 (授業の開始時刻, 黙想, 立腰, 机上の整理など)
- ②凡事徹底 (うぐない十か条)
- ③与小っ子検定の実施 (漢字や計算の確実な定着 年3回学期末実施)
- ④朝と昼の2回の帯タイム (マイフナータイム) で漢字, 計算などの基礎・基本事項の習得



◇方策3 発達の支援

- ①月に1回の生徒指導連絡会・特別支援連絡会で情報の共有, 相談
- ②WEBQUの調査・活用と教育相談の充実
- ③児童会・委員会活動 ④縦割り活動 (クラブ・朝の清掃活動)

◇方策4 学校組織マネジメント

- ①学校教育目標からめざす学校像・児童像の共有
- ②職員参加の授業検討会・研究授業
- ③全職員の公開授業による授業力の向上
- ④ICT機器を活用した授業研究および校務改善



◇方策5 学校連携・地域連携

- ①地域人材の活用
- ②家庭学習強化月間（てびき・学習計画表の活用）
- ③交通安全あいさつ運動
- ④生活リズムチェック（こども自身のふりかえり）
- ⑤Google Meetを活用したハイブリッド授業の実施
- ⑥HPで情報発信
- ⑦町行事への参加（秋の交通安全パレード）



2 久部良小学校

確かな学力の育成

(1) 「朝学びタイム」「ゆいタイム」の取り組み

国語・算数学習の基礎・基本の定着を図るため、週時程の工夫において、1校時開始前の10分間に「朝学びタイム」を設定。月曜日・木曜日は読書活動（保護者・地域ボランティアの読み聞かせを含む）、火曜日・金曜日は漢字練習に取り組み、午後の帰りの会前の10分間、「ゆいタイム」を設定。算数学習の弱点補習に取り組んでいる。



(2) 学力向上強化月間の取り組み〔5月・11月・1月〕

- ① 年間計画を通して、年度中の諸学力調査を目標に強化月間に取り組み、調査実施後に結果分析、次回の取り組み内容を見直す等、RPDCAサイクルでよりよい取り組みに向けて全職員が共有し組織的な取り組みを意識しながら推進している。
- ② 取り組みの基本として、生活記録カードを用い、児童の実態を「見える化」し、保護者と確認しながら、よりよい生活習慣を整える。家庭学習の取り組みについては日頃からの取り組みを振り返りながら、成果・課題を意識させる。また、各学年のがんばりノートの提示やリレーノートを行うことで、友達の勉強方法やノートの使い方を比較させ、よりよい取り組みを知る機会とし、家庭学習の充実を図る。新しいがんばりノートは、校長からもらうことで、本人の励みにし、やる気を高めることにしている。



(3) 組織的な授業改善の取り組み

- ① 久部良小ベイシック3（スリー）
 - 教室環境〔ユニバーサルデザイン的〕
 - ・刺激の少ないユニバーサルデザイン的黒板
 - ・ロッカーの整理・整頓
 - ・机上整理



- ・机横かけの工夫
- 学習環境
 - ・時間のけじめ ・学習用具の準備(忘れ物なしの徹底) ・話を聞く姿勢
- 支持的風土づくり
 - ・互いに認め合い、誰でも発表のできる学級づくり
- ② 久部良小授業スタンダード
 - 問題把握→めあて→見通し→自力解決→
 - 他者との思考の交流→まとめ→適用問題→振り返り
 - 本校の重点目標である授業45分間のタイムマネジメントや、めあてとまとめの連動、発問の工夫、協働的学び等を意識した、算数学習を中心に授業スタンダードという学び方を通して、主体的・対話的で深い学びをめざす。また、生徒指導4つのポイントである「規範意識」「自己肯定感を高める」「自己決定の場」「支持的風土づくり」を授業に積極的に機能させる。
 - ※問いが生まれるサポートガイド等の積極的な活用



豊かな心と健やかな体の育成

(1) 道徳科授業の充実

- 授業参観において、保護者へ道徳科「考える授業」の公開を年間に3回行うことで、豊かな心の育成の視点や特に「いじめ問題」についてよりよく学ばせる工夫を公開している。

(2) 読書活動の充実

- 毎月第1・3木曜日に読み聞かせボランティア「ピッピの会」と保護者が読み聞かせを実施し読書意欲を高めている。10月の読書月間では、先生おススメ本や児童同士で本の紹介、図書委員が昼休みを利用して、読み聞かせを行っている。



(3) 地域教育資源を活用した特徴あるカリキュラムマネジメント

- 総合的学習の時間等での地域教育資源を活用し、他者とよりよく交流し、主体的・協働的学びを基本に地域行事に参加するなど体験学習を行う。キャリア教育の視点で、地域の魅力をよりよく知り、故郷に誇りを持ちながら、将来への夢実現をめざす意欲を育てている。

(4) 体力向上強化月間「くぶRUNタイム」

- 12月には、体力向上強化月間として、お昼休みの前半に10分間「くぶRUNタイム」を設定し、与那国一周学習カード活用し、走った距離をそのカードに印をつけながら与那国一周をめざし全学年で楽しく競い合う、走る運動を運動場で

行っている。

3 比川小学校


(1) 学習での共通実践

- ① 「問題解決型比川小学校指導スタイル」の実施
- ② ○めあて○問題○見通し○考え○まとめ○振り返りなどの掲示物の統一
- ③ 主体的な学びの確保→児童が考えたり対話したりすることを優先
- ④ 授業だけでなく、家庭学習等の自学学習においても振り返りに重点を置く(メタ認知の育成)
- ⑤ 比川一人学びスタイルの実施

「問題解決型比川小学校指導スタイル」 ～共通実践事項(改訂)～

- ① 学習の10箇条の徹底(黙想・立腰指導)
- ② 板書ノートを作成し、タイムマネジメントを意識した45分完結型の授業を行う
- ③ 「比川一人学びスタイル」の共通理解と共通実践を図る
- ④ 板書と学習ノートの統一、整理する能力の向上を図る(ふりかえりなど)
- ⑤ 前時までの学習や児童の声を拾い、めあてやまとめを設定する
- ⑥ 授業で使用するキーワード、学習の目標時間等を掲示して活用を促す
- ⑦ 複式授業のわたり時間を生かした児童の自力解決時間を充実する
- ⑧ 教師と児童、児童同士の伝えあい・学び合い活動を工夫する
- ⑨ めあてとまとめを正対させる
(必要に応じて、めあて作成時にまとめのリード文を書く)
- ⑩ 振り返りに十分な時間を確保する

全教諭で統一した授業スタイルを実施していきましょう。
令和3年2月3日 改訂



比川一人学びスタイル (高学年用) 2019.4

0 目的の明確化
本時の学習の目的を明確にする。

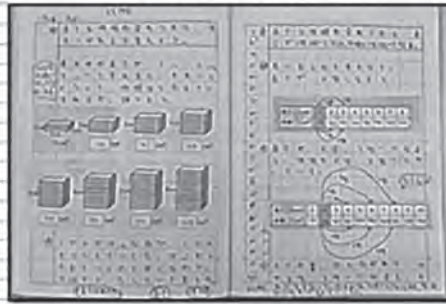
1 問題意識
問題意識を明確にする。
「めあて」を設定する。
「見通し」を設定する。
「考え」を設定する。
「まとめ」を設定する。
(自分で考えたり対話したりしながら)

2 めあてを立てる
本時の学習の目的を明確にする。
「めあて」を設定する。
「見通し」を設定する。
「考え」を設定する。
「まとめ」を設定する。
(自分で考えたり対話したりしながら)

3 見通しをもつ
本時の学習の目的を明確にする。
「めあて」を設定する。
「見通し」を設定する。
「考え」を設定する。
「まとめ」を設定する。
(自分で考えたり対話したりしながら)

4 学習の振り返り
本時の学習の目的を明確にする。
「めあて」を設定する。
「見通し」を設定する。
「考え」を設定する。
「まとめ」を設定する。
(自分で考えたり対話したりしながら)

一人学びの姿



自分の時間を守りながらノートの整理しよう
自分の考えがわかるノートにしよう
(レイアウトも工夫し、言葉・数・図・表・グラフで表す、比川学校)
書いてみるよりもよくわかる(自分の考えも口から出して耳でチェックし書いてみる)
口頭でもわかるようにしよう
口頭でもわかるようにしよう
口頭でもわかるようにしよう
口頭でもわかるようにしよう

5 今日の学びを振り返る
キーワードを振り返り、リード文を書く
ノートに書いて振り返る
本日の学びを振り返る

7 振り返りのポイント
○学んだこと
(自分から学んだこと)
○友だちから学んだこと
○先生から学んだこと
○自分から学んだこと

8 学習問題点を振り返る
本日の学びを振り返る
本日の学びを振り返る
「アイディア」を振り返る

「めあて」を明確にする
「見通し」を明確にする
「考え」を明確にする
「まとめ」を明確にする

「めあて」を明確にする
「見通し」を明確にする
「考え」を明確にする
「まとめ」を明確にする

「めあて」を明確にする
「見通し」を明確にする
「考え」を明確にする
「まとめ」を明確にする

(2) 校内研修の充実

- ① 全教諭が研究授業の実施（年間4回）自己肯定感の高まりを意識した授業作り
- ② 非認知能力についての理論研究

(3) **chromebookの活用** 学習の個別最適化及び少人数からくるマイナス部分の解消

(4) **非認知能力の育成** 教育活動全般を通して非認知能力の育成に取り組む

IV 成果と課題

1 成果

今年度は学校教育目標を新しく制定し、目指す学校像や児童像を共有することから始めた。児童らはなりたい自分に向けて、日々の生活を【自律・協働・創造】の視点でふりかえり、新たな目標に向かおうとする姿が見られた。課題に対しては、全教科を共通して取り組む具体策などを夏休みの校内研で共有し、授業改善の視点で取り組むことを確認し、日々の授業実践に努めることができた。（与那国小）

児童の実態を分析し、それに応じた一日の日課である週時程を工夫することで、学力向上推進の取り組みをよりよいものにできた。その他取り組みも学校グランドデザインをもとに 職員間で話し合わせながら進めることで組織的取り組みがスムーズにできた。（久部良小）

授業だけでなく学校教育全般を通して非認知能力を育成することを意識し指導にあたったことで、特に「やりぬく力」「コミュニケーション能力」「メタ認知」等が大きく向上したことが児童の日記や職員の振り返りから実感できた。（運動会や学力向上実践報告会等での発表を通して）（比川小）

学校間の溝を無くし、児童のみならず教師間の交流を日常的に行うことにより、与那国島子どもたちにより良い学習の場を作り出すことが可能になった。

幼・小・中11年間を通した人間形成を意識することで、すべての児童に対し「自立・自律」した人として成長する礎を築くためのきっかけを作ることができた。

2 課題

ICT 機器等を活用した個別学習の充実等、自立した学習者の育成に向けて共通実践を実施し、児童のより良い成長のために具体的な改善策を工夫・計画・共有していく必要がある。（与那国小）

知・徳・体の体育においては、働き方改革の視点を考慮することになると授業時間以外の時間設定が困難であった。教員主導だけでなく、地域ボランティアの活用を工夫する等、体力向上への取り組み方を見直す必要がある。（久部良小）

学校教育計画の各指導計画に「期待される非認知能力」を挿入した。年間を通した見取りと改善が必要（比川小）

「個別最適な学び」と「協働的な学び」及び「学校における働き方改革」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくための方策を検討する必要がある。

中 学 校 編

確かな学力を身につけ、主体的に学習に取り組む態度を育む生徒の育成

－ 地域と協働した日常的な取り組みを通して －

宜野座村立宜野座中学校
校長 渡慶次 靖

I はじめに

現代社会はグローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化にともない、複雑化、高度化するさまざまな課題への対応に直面している。

中央教育審議会の初等教育分科会は 21 世紀を生き抜くための力を育成するため、これからの学校は、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力や習慣の育成等を重視する必要がある。これらは、様々な言語活動や協働的な学習活動を通じて効果的に育まれることに留意する必要がある。さらに、地域社会と一体となった子どもの育成を重視する必要がある。地域社会の様々な機関等との連携の強化が不可欠であるとしている。

本校では、県の学力向上推進施策「学力向上推進 5 か年プラン・プロジェクトⅡ（学びの質を高める 5 つの方策）」、国頭教育フロンティアプラン及び宜野座村教育主要施策を踏まえ、「自ら心と頭(知)を磨き、体を鍛える」を合言葉に生徒の実態を明確にし、課題解決に向けた具体的方策を立て、行政、家庭、地域社会と連携して日常的に取り組むことにより、本校生徒の学力向上を推進することとした。

II 本校の概要

沖縄本島中央部の東海岸に位置し、東は太平洋に面し、南は金武町、西は恩納村、北は名護市に面し交通の要をなしている。人体にたとえると「臍」の部分に当たり、平成 11 年 10 月に「てんぷす宣言」を県内外に発している。（方言で臍はてんぷすと言う。）

本村は、東西 7 km、南北 8 km とほぼ同距離で、総面積は 31.30 km² である。村の総面積の 50% にあたる山手の山林原野地域が軍用地として接収されている。村の人口は 6,337 人、世帯数 2,757（令和 5 年 6 月末現在）で昭和 47 年以降年々着実に増加している。集落は、松田、宜野座、惣慶、福山、漢那、城原の 6 区からなり、村の西側を南北に走るがらまん岳をはじめとする山々には四季の変化がみられ、「水と緑と太陽」の自然環境に恵まれた農業を中心とする村である。

本校は宜野座村唯一の中学校として、漢那、宜野座、松田の 3 小学校からの入学生で組織され、通学距離は遠いところでも 6 km 以内である。地域・保護者の学校に対する関心は高く、PTA 活動や部活動支援等も盛んである。また、本村には県立宜野座高等学校も設置されており、教育環境に恵まれた全校生徒 249 名の学校である。

Ⅲ 学力向上推進への校長の関り

1 地域とともにある学校づくり

地域に開かれた教育活動の実践を中核に位置付け、学校、家庭、地域が連携・協働して日常的な取り組みを推進する。行政との連携

2 日常的な授業改善の取り組み、校内研修の充実

「教える」から「考えさせる」授業への転換。対話を中心とした授業改善。教科の枠を越え、視点を揃えた授業研修会の充実。

3 働き方改革

教職員の働き方改革なくして学力向上推進はないと考え、質的・量的観点から以下の取り組みを推進している。

(1) 質的負担軽減

①同僚性と協働することの重要性の意識向上

互いに支え合える風土、チームづくりを目指し、全職員で業務にあたり特定の職員は業務負担が集中しないよう校務分掌を配置。また、自分以外の職員が担っている業務への意識も持つよう、日常的に声をかけ取り組んでいる。

②安心できる職場づくり

面談や日常的な会話をとおして、現在の状況や困り感を解消するための対話を心掛けています。また、職員のアイデアや行事等の創意工夫を推進するためボトムアップしやすい雰囲気づくりに努めている

(2) 量的負担軽減

①週2日の部活動休養日の設定。ノー残業ディの周知徹底。各種行事等の精選と取り組みの見直し等。

②部活動の地域移行の推進。村教育委員会と連携し県の研究指定を受け、研究を推進している。

③在校時間の管理

在校時間 60 時間を超える職員へは適時、面談をするように心がけている。業務の負担や困り感の共有。「帰りやすい雰囲気づくり」への協力等。

Ⅳ 具体的取組事項

(1) 確かな学力の定着を図る取組について

① 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る

ア 学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容を踏まえた授業計画を立て、わかる授業を目指す。

イ 毎時間の指導目標を確認し、生徒に学習のめあてを示すことで、目標をめざす授業を展開する。(週案の充実を図る)

ウ 授業展開の過程において目標に準拠した評価を行うなど、生徒の学習状況を踏まえた指導の手立てを行う。(指導と評価の一体化を図る)

- エ 各学年において、生徒一人一人に身に付けさせるべき内容を確実に定着させる取組を行い、「学年のたすき」として引き継いでいく。
- オ 体験的な学習や具体物を活用した思考や理解、反復学習などの繰り返し学習を通して理解させる。
- カ 全国学力・学習状況調査、学力到達度調査などの諸調査の分析結果から定着状況を把握し、つまずきのある生徒に対して、個別指導や補習指導を計画的に行う。

(補習指導は他の教育活動とのバランスを考えながら計画する)

② 学習を支える力の育成（学習規律の徹底）を図る

- ア 学習態度、返事、話す、聞く態度の指導を徹底する。
- イ 学習用具の準備・片付け、机や椅子の整理、時間を守る（ベル席等）、提出物の対応などの指導を徹底する。
- ウ 授業と連動させる「宿題」の与え方の工夫・改善を行い、家庭学習の充実と習慣化を図る。
- エ 早寝、早起きなど、子どもの健康的な生活づくりの実践の充実を図る
- オ 朝食をとる、好き嫌いを減らすなど、バランスのとれた食事の意識化を図る
- カ あいさつや決まりを守る規範意識、道具の準備や後片付け等のマナーの育成を図る
- キ 「地域教育資源」を有効的に活用する

(2) 思考力、判断力、表現力等の育成について


- ア 既習事項を根拠として「知識・技能」と「知識・技能」を『つなぐ』など、考えを引き出したり、思考を深めたりする学習活動を取り入れる。
- イ 国語科で培った言語能力を他教科でも意図的・計画的に活用する。
- ウ 各教科等の指導計画に「言語活動」を位置づけるとともに、授業の構成や進め方を工夫し、学習活動を展開する。
- エ 観察や実験のレポートの作成、論述などの学習活動を展開する。
- オ 総合的な学習の時間を中心に、教科等を横断した課題解決的な学習や探求的な活動の展開を取り入れる。
- カ 全学年人権コラム（月1回）の取り組みで、自分の考えを表現する場を設定する。


(3) 主体的に学習に取り組む態度の育成について

- ア 課題に向き合い考える時間を設定し、生徒一人ひとりの「問い」を引き出す授業展開の工夫を行う。
- イ 授業の振り返りを充実させることで更なる学習意欲を引き出し、家庭学習等の更なる学びを生み出すよう努める。

- ウ 諸評価により生徒の学習状況を把握し、個に応じた指導法を工夫する。
- エ ICT等を活用し、興味関心を高める。

V 学力向上に係る主な取組

	実践事項	実践の内容
確 か な 学 力 の 向 上 を 図 る 取 組	(1) 授業力向上に向けた取組 	① 学力向上推進5か年・プロジェクトⅡ (方策1：日常化する) 授業改善の取組 各種資料の分析・活用及び組織的な取組の充実 (方策2：そろえる、方策3：見通す) 全校体制で共通実践の取り組みを推進する。(校内研との連携) ・「主体的に聴く」ことのできる生徒の育成 ② 年1回の指導法改善に関する公開授業を実施し、相互授業の常態化 ③ 『宜野座中学校学びのスタンダード』の共通実践に努める ④ ICT機器の活用 ⑤ 県学力到達度調査・入試・全国学力学習状況調査に向けた強化月間の取組の実施 ⑥ 共通掲示カード(めあて等)(『宜野座中学校学びのスタンダード』)の活用
	(2) 主体的に学習に取り組む態度の育成	① 学力向上推進プロジェクト (方策3：学びに向かう集団づくり)をもとにした学級経営及び授業改善の取り組み ○支持的風土をつくる学級経営 ○生徒指導の4つのポイントを生かした授業 ○確かな生徒理解 ○学びに向かう集団づくりを進める学級活動及び生徒会活動 ② 全校体制による朝の読書活動の充実 ③ 『宜野座中学校学びのスタンダード』を活用し、自ら「考え・深める」機会を設ける。
	(3) ICTを活用した授業実践	① 各教科における計画的で効果的な活用 ② IT指導員の効果的な活用
	(4) 学習規律の徹底	① 学力向上推進プロジェクト


		<p>(方策3：学びに向かう集団づくり) 学習環境の充実</p> <p>② 一時徹底「授業開始時の黙想及び挨拶」の徹底</p> <p>③ 1分前着席の取り組みの充実(自治的な活動)</p> <p>④ 宜野座っ子学習「5つのやくそく」を日ごろから意識させる。</p>
	<p>(5) 家庭学習の充実</p> 	<p>① 学年・学級経営の一環として実施</p> <p>② 家庭学習ノートは自主活動として取り扱い、最初の一冊目は全員に一斉に配付し、二冊目以降はノートを終了したら校長に提出。</p> <p>③ 主要教科では、授業と連動した課題を与える工夫。</p> <p>④ 学習委員会と連携した取り組み(常時活動)の充実を図る。</p> <p>⑤ 学級通信等で家庭学習の取組状況を家庭へ周知。</p> <p>⑥ 宿題や自主学習ノート未提出の生徒に対する声かけ。</p> <p>⑦ コロナ休業期間中には課題とメッセージを配布し、できるだけ学びを進めるよう努めた。課題を評価し、メッセージを同封する等、生徒の主体性を引き出す工夫を行った。</p>

豊かな心の育成	(1) 人間関係づくりの力を育む取組	<p>① 特別活動・道徳教育の充実。</p> <p>② 全学年で統一した道徳ノートの活用</p> <p>③ コロナ禍でも差別を生まない道徳教育の充実</p> <p>④ スクールカウンセラーによる通信の活用</p>
	(2) 自己の将来や生き方を考える指導の充実	<p>(方策5：つなぐ)</p> <p>① 総合的な学習の時間での「職場体験学習」の実施</p> <p>② 高校説明会の実施(2・3年対象)(高校との連携)</p> <p>③ 地域教育資源を生かした進路学習の実施。</p> <p>④ 小6対象出前授業で先輩講話を実施。</p>
	(3) 平和教育の充実	<p>① 平和体験学習の実施</p>



(2)①職業人講話・進路学習会の取り組みで将来について深く考えることができた

(3)①平和学習を工夫して実施できた

健 や か な 体 の 育 成	(1) 運動・遊びを通し体力づくりの充実 	① 部活動の活性化 ② 体力テストの積極的な取組 ③ 体育授業の発表会の実施 ④ 地区中体連に代わる引退試合の実施
--------------------------------------	---	--

VI 成果と課題

1 成果

- (1) 学習規律や生徒状況、共通実践を職員間で共有し家庭へ周知することで、学習環境の充実（黙想・規律・1分前着席・教室環境）に努めることができ、落ち着いた環境で授業を行うことができています。
- (2) 学年会・教科会で連携した授業改善
 - ・前年度の課題であった「振り返り」については、各教科で振り返りシートを工夫し学習内容の定着を図り、次の学びへのつながりを行うことができた。
 - ・横断的な問題作成を教科会で話し合うことができた。
- (3) 定期テスト前に全生徒対象とした補習の時間を実施することに加え個別指導を充実させ学力向上に繋げることができた。また、沖縄県生徒質問紙（7月・12月）では「先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」の項目で「当てはまる」と答えた生徒が県の平均に対して非常に高い数値となった。
- (4) 検定に挑戦する生徒が増え、学力の向上につながっている。
- (5) コロナ禍でも行事の持ち方や学習の進め方を工夫し、様々な場面で生徒の主体性を引き出すことができた。
- (6) 生徒指導の4つのポイントを意識した学級経営・学年経営に努めた。沖縄県生徒質問紙（7月・12月）では、年度が進むにつれて生徒の自己肯定感が向上する等の成果が得られた。

2 課題

- (1) 学びのたしかめ（7月・12月）から、正答率の改善が叫ばれる。主体的・対話的な授業の展開を全職員一丸となって取り組む
- (2) 幼小中高の連携、接続を意識したキャリア教育
- (3) さらなる行事の精選工夫と新たな取り組みの創造と実践。

主体的に課題に取り組む生徒の育成 － 魅力ある学校づくりの推進を通して －

恩納村立うんな中学校
校長 具志堅 博昭

I はじめに

これからの社会は加速度的に変化し、予測困難な時代になると言われている。よりよい社会と幸福な人生を切り拓き未来の担い手となるために、子どもたちは受け身で対応するのではなく、「主体的に問いを立てて、他者と協働しながら解決していく力」が必要となる。現行の学習指導要領の大きなポイントは、グローバル化の進展や高度情報化社会を見据え、子どもたちがより良い人生を築いていくための教育の果たすべき役割が焦点化されたことである。

また、育成を目指す資質・能力が明確化され、それらを実質化するために「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が示された。

さらに、全教科の目標及び内容が「育成を目指す資質・能力の3つの柱」として「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力・人間性等の涵養」に整理され、各教科の授業を通してこの3つの力を育成することが求められている。

そこで、学校教育における質の高い学びを実現し、生徒が学習内容を深く理解し、資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう、学校・家庭・地域が連携・協働し、魅力ある学校づくりを推進することで、主体的に課題に取り組む生徒の育成が図られると考え、本主題を設定した。

II 地域と本校の概要

恩納村は、亜熱帯性気候に育まれた植生や、白い砂浜とサンゴ礁が広がる青い海といった風光明媚な自然環境を生かして、漁業や農業が盛んで、多数の特産物が存在する。また、コバルトブルーのきれいな海は、多くの観光客を惹きつけ、世界有数の観光地となっている。

一方で、2000年代に起こったサンゴ礁の白化や海洋生態系の減少といった環境の問題をはじめ、オーバーツーリズムや人口減少、少子高齢化など様々な長期課題を抱えている。

恩納村は、これらの問題に取り組むために、2018年7月に「サンゴの村宣言」を行い、サンゴの保全を通して村の価値を上げていくことを宣言した。その上で、世界一サンゴと人にやさしい村づくりを目指して、「サンゴのむらづくりに向けた行動計画」やSDGsの取り組みを進めている。恩納村では、サンゴの村宣言を環境だけの取り組みにとどめず、経済や社会の分野の施策と相乗効果を生み出していくために、SDGsに取り組んでいる。

SDGsとは、2015年に全国連加盟国によって採択された全人類共通のグローバル目標で、これまで別々に考えられてきた17の目標を中心とした環境、経済、社会の課題が、相互につながっていることを捉えていく枠組みである。海がきれいになる（SDGs14番）ことによって、観光業がより発展する（SDGs8、12番）。観光業が発達すれば、貧困が減る（SDGs1番）などの好循環を起こすことが期待される。SDGsのそれぞれの目標をつなげて考え、同じゴールを目指し行動するという発想で、恩納村は、地域の課題を解決に取り組んでいる。また、恩納村は、2019年には、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた優れた取組を行う都市として、「SDGs未来都市」及び「自治体SDGsモデル事業」に選定された。



本校、恩納村立うんな中学校は、令和2年に開校し、今年4年目を迎えたばかりの新しい学校である。教育目標を「自律」「協働」「創造」とし、開校以来、体育祭や文化祭などの学校行事において、生徒会が企画・運営し、ゼロから創り上げるなど、生徒の自治的活動を推進した学校運営を行っている。さらに、開校当初から、一人一台端末と高速大容量通信ネットワークが整備され、恵まれた環境のもと、ICT を活用した授業による「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に取り組んでいる。

また、総合的な学習の時間において、1年生による「地域散策、サンゴ学習」、2年生による「職場体験、企業模擬面接」、3年生による恩納村の魅力伝えるための「村課題解決プロジェクト」を、行政・企業と連携・協働して行い、地域の教育力を生かした体験的なプログラムを全学年で計画し、学生らしい自由な発想で、校訓にある「英明果敢」に取り組んでいる。



Ⅲ 学力向上推進への校長の関わり

- 1 タブレット端末を活用した授業実践のための校内研修の充実
- 2 産・学・官の連携・協働による地域村課題解決プロジェクトの推進
- 3 スケジュール管理手帳やAIドリルを活用した自己調整力の育成を推進

Ⅳ 学力向上推進の具体的な取組

- 1 タブレット端末を活用した授業実践
 - 5教科による研究授業・授業研究会を実施し、全教科での授業改善を図る。
 - 研究内容をふまえた生徒アンケートを実施し、取り組みの振り返りを行う。

各教科において、単元を見通して育む資質・能力を明確にした授業実践、自他の意見や考えを交流する場面、思考を整理する場面等々を設定することにより、多面的な見方・考え方に触れ、主体的・対話的で深い学びができると考え授業実践をおこなった。

(1) 国語科の実践事例

① ねらいとコンピュータ活用の意図

- ア カフトアプリを使って教材の復習を効果的に行う。アプリ活用で意欲をあげる。
- イ 授業の振り返りを共有し深い学びにつなげる。

② 活用場面の紹介と子どもの様子

- ア 教材のまとめでカフトを活用し要点を復習する場面において、クイズ形式でみんなが意欲的に取り組む。
- イ 授業の振り返りを読み合い共有する場面で、他者の振り返りを読み合うことで、違った視点の意見に触れる。

カフトで復習



振り返りの共有



③ 成果と課題

- ア 成果・授業への集中力が高まる。選択肢の工夫で思考する場面が作れる。振り返りの書き方を学ぶ機会になる。
- イ 課題・正解率の低い生徒への手立てが必要。振り返りを書くのに時間がかかり、共有する時間が取れない生徒の支援。
- ウ 課題への対応策・苦手な生徒は2人ペアで取り組みをさせる。振り返りのコツを個別指導する。

(2) 英語科の実践事例

① ねらいとコンピュータ活用の意図

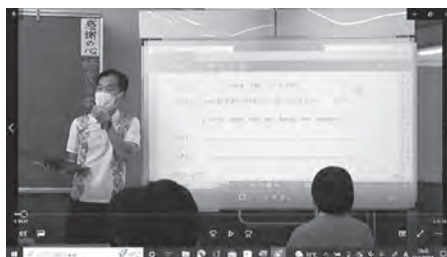
- ア 全員参加のカフトクイズを、教科書の本文を読む前に、内容と関連したクイズを実施することによって、本文内容に関する興味・関心が高まり、読んでみたい、読んで質問に答えたいという気持ちが高まる。正解数や早押しで競い、集計結果が出るので生徒は喜んで参加している。
- イ 紙媒体のワークシートではなく、授業支援ツールを活用したワークシートを活用することにより、生徒の答えや意見を、ペアやグループで瞬時に共有することができる。学び合い、教え合いの最適なツールとなっている。
- ウ タブレットドリル学習を積極的に活用し、定着が弱い箇所や既習内容を中心に、主に復習として、「ミライシード」ソフト等を活用し、定着を図っている。
- エ 生徒個々のタブレット端末に入っているデジタル教科書を活用して、進出単語や本文内容の音声指導を行っている。

② 活用場面の紹介と生徒の様子

カフト



授業支援ソフト



PCドリル学習



デジタル教科書



③ 成果と課題

ア 成果

生徒個人のレベルや進度に合わせて学習を進めることができるため、主体的な学習になっている。答えや意見の共有により、学び合い・教え合い活動が充実している。

イ 課題

ICTを活用すべき場面と活用しない方がよい場面が明確化されていない。

ウ 課題への対応策

活動の種類や場面等々、ICT活用の効果を検証していく。

2 村課題解決プロジェクト

(1) 教育課程への位置づけ (3 学年)

総合的な学習の時間の担当職員、村職員地域コーディネーター、村役場職員、そして関連企業が連携し、恩納村が抱える諸課題の解決に取り組んでいる。

2月 : 3年生代表から前年度の村課題解決プロジェクトの取組の様子を聞く。

3月 : 次年度に取り組む内容について、見通しを立てる。

4～5月 : 地域調べ (校区内の各自治会から地域の課題等の聞き取り調査)

6～7月 : 恩納村が取り組んでいるSDGsについて学ぶ。学級別に分かれて課題の共有。

9～11月 : 学級別に分かれて課題解決に向けて練り合い、課題解決方法を探る。

12月 : 課題解決へ向けて取り組んだことを、村長へ提案 (プレゼンテーション) をおこなう。

2月 : 今年度の村課題解決プロジェクトの取組について後輩へ伝える。

3月 : 商品のプレリリース (商品化として採用された場合)

(2) 活動内容

①令和3年度の取組《商品開発授業》

SDGs やポストコロナに繋がる「持続可能な地域社会の発展」に向けた取り組み



A組：パッションフルーツ酢 B組：アテモヤのお菓子 C組：サゴにやさしい日焼け止め

(北琉興産・農林水産課)

(お菓子御殿・商工観光課)

(ナリス化粧品・教育委員会)

②令和4年度の取組《地域が抱える課題の解決》

地域の課題を3つに絞り、学校、行政、企業が連携し、それぞれの解決に向けた取り組み



A組：地域防災マップアプリ

B組：軽石の活用

C組：村アーサ × 堅あげポテト

(総務課・福祉課・恩納村社会福祉協議会・アステリア(株))

(社会教育課・建設課・ネコのわくわく自然教室)

(カルビー(株)・農林水産課・恩納村漁業協同組合)

3 自己調整力の育成

(1) PDCA サイクル 「フォーサイト手帳」の活用

朝の会 : その日の日程や目標、「やること」等の確認

帰りの会 : その日の振り返り、翌日の日程や目標、「やること」等の確認

金曜日帰りの会: 1週間の振り返り、週末と翌週の日程や目標、「やること」等の確認

	日程、目標、振り返りの内容
学習面	授業内容、自学自習(塾以外)、宿題・提出物、単元(小)テストや発表テスト
生活面	食事、睡眠[就寝・起床時間]、その他
その他	持ち物、部活・習い事、その他



(2) 放課後の諸活動の時間を活用した自学自習

- ① ミライシード (AIドリルパーク)
- ② 授業や単元テストと連動した課題 (予習・復習)

* 放課後の諸活動の時間 (15:55~16:15)

月	火	水	木	金
諸活動 (自学自習)	ノー部活動デー (放課後の活動なし)	諸活動 (自学自習) 再チャレンジテスト	諸活動 (自学自習) 学年委員、専門委員 学年集会、全体集会	諸活動 (自学自習)



V 成果と課題

1 成果

- (1) グループでの話し合いや練り合いの場面で、タブレット端末を活用することで、言葉で伝えることが苦手な生徒も、積極的に学習に参加できるようになった。また、学力調査結果に基づいたAIドリルを活用することで、生徒一人一人に応じた学習課題が提供でき、主体的に学習に取り組む生徒が増えている。
- (2) 村課題解決プロジェクトに取り組むことで、地域の課題を知り、専門的知識や技能を有した外部講師から様々な学びがあった。自分達の企画やアイデアをプレゼンする機会を得たことで、課題を見つけ解決方法を探ることの大切さを学んだ。
- (3) 「フォーサイト手帳」の活用により、『時間を意識するようになった。(90%)』、『計画を意識するようになった。(86%)』、『忘れ物が減った。(83%)』、『計画通りに学習を進められるようになった。(79%)』、『振り返りが出来るようになった。(93%)』などの生徒アンケート項目で良い結果が得られている。

2 課題

- (1) タブレット端末アプリを、授業、放課後、家庭での学習など、様々な場面で活用し、「授業と連動した課題」と「自学自習課題」をバランスよく取り組み合わせるため、各教科における課題の与え方や、「フォーサイト手帳」の活用についての研修が必要である。
- (2) 授業の中で、自分の考えをまとめたり、発表したりすることについては、教科により差が見られるため、すべての教科で、自他の考えを交流する場や、思考を整理する場面を多く設定するよう授業改善が必要である。
- (3) 学力の定着面では個人差が大きいいため、授業において、自由進度学習を取り入れるなど、生徒の学びに焦点をあてた、さらなる授業改善が必要である。

自ら学び、共に学び合い伸びていく生徒の育成

－ 対話的で深い学びの授業づくりを通して －

那覇市立真和志中学校
校長 金城 久枝

I はじめに

全国学力・学習状況調査における質問紙調査の結果から、県内の児童生徒の意識や学校の取組状況は、経年比較では改善の傾向を示しているものの、全国平均値との比較においてはいくつかの課題が残されている。特に、自分のよさや友達との関わり等に関することや、児童生徒の学び方や学んだことを生かすこと等、そして学校の組織的な取組等に関してさらなる改善の取り組みが求められている。

学力向上推進プラン・プロジェクトⅡでは、これまでの本県の学力向上推進の成果と課題から「自己肯定感の高まり」「組織的な関わり」「学び・育ちの実感」を学力向上推進の重要な3つの視点として位置付け、5つの方策として、【質的授業改善】【組織的共通実践】【発達の支援】【学校組織マネジメント】【学校連携・地域連携】を掲げている。この3つの視点、5つの方策を軸とし、「学びの質を高める授業改善・学校改善」が学校に求められている。

本校では、令和3年度の各種学力調査、学校評価の結果から学力の2極化、生徒の自己肯定感の低さに課題があった。そこで、学力向上の推進にあたり、「確かな学力の確実な育成」「自己肯定感の高まり」に着目し取り組む事とした。

II 地域と本校の概要

本市は、県庁所在地、中核市で政治・経済・文化の中心となっている。また、空・海の要所である那覇空港、那覇港を擁し、沖縄県の玄関口としての役割も担っている。学校の所在する地域は、那覇市の南東部真和志地域に属しており、昔ながらの市場の雰囲気を活かした商業空間、マチグラーの歴史や文化のある場所となっている。

本校は、市街地の繁華街として知られている栄町近くに位置し、今年度で創立76年を迎える歴史と伝統のある学校である。1948年（昭和23年）真和志中等学校（生徒数1062人、22学級）として開校し、1952年（昭和27年）に真和志中学校に校名が改称された。開校当初は、生徒数1000名超のマンモス校であった。また、市街地にあることから敷地面積が狭く、現在も50m走をする際は、運動場の対角線を利用して行う。近年では平成26年から改築工事が行われ、令和元年に4階建ての新校舎となった。体育館1階には、県内中学校で唯一の温水プールが設置されている。近年、生徒数は、減少傾向にあり全校生徒251名の小規模校である。

III 学力向上推進への校長の関わり

- 1 校長の経営方針を共有
 - ・新年度、学力向上に係る方針を提示し周知を図る。
- 2 学力向上推体制の再構築
 - ・学推担当、校内研担当、小中一貫担当を軸とした学力向上推進体制の構築。
- 3 P D C Aサイクルの確立
 - ・各種取組等に関する分析（成果、課題、改善策）。

- 4 リフレクションシートの活用
 - ・教科会の充実、教科における共通実践事項、キャリア教育との繋ぎ。
- 5 学校行事の充実
 - ・コロナ禍でも実施の工夫。

IV 学力向上推進の具体的な取組

PPⅡの3つの視点、5つの方策を全職員で共通確認し、授業改善・学校改善に向けた取組の推進を図った。

視点1【自己肯定感を高める】

個に応じた指導やわかる授業の構築による基礎的、基本的知識・技能の確実な習得

視点2【学び・育ちの実感】

深い学びに向けた他者との対話的な学び合い、論理的思考の育成

視点3【組織的な関わり】

対話的な学びの工夫を通して、「自ら学び共に学び合い伸びていく生徒の育成」を図る
校内研究の充実

1 授業改善に向けた校内研究の取組 【方策4】

(1) 校内研修のねらい

- ① 学校教育目標の具現化を図るため、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し課題の解決に向けた研究と修養を行う。
- ② 組織的・計画的な教育の質的向上を図るカリキュラム・マネジメントを推進して研修を充実させる。
- ③ 本校教育の課題解決につながる知識・技能・教養を身につけ、教師としての資質の向上を図る。
- ④ 職員相互の研鑽を通して教育方法や指導技術の向上を図り、日常の教育実践に役立てる。
- ⑤ 職員相互の共通理解を図り、「チーム真和志」としての協働体制を構築する。

(2) 教科の枠を超えた研究授業による授業改善への取組 【方策1、方策2、方策5】

- ① 日々の授業で「真和志授業づくり2022」の10の共通実践、生徒指導の4つのポイントを生かした授業実践を行う。
 - ・学習環境の確立「小中一貫教育共通実践事項の徹底」
 - ・めあての提示
 - ・構造的な板書の工夫
 - ・思考を高める発問の工夫
 - ・対話的な活動、書く活動を取り入れる
 - ・説明、指示の明確化
 - ・適切な評価の実施
 - ・まとめ、振り返りの時間確保
 - ・適切な学習課題による支援
 - ・支持的風土のある学級づくり



② 小中一貫教育授業研究会の実施

小中一貫教育では、9年間を見通した力の育成を目指す。

合同授業研究を実施するなかで、学習部会の目標として、学習規律の確立、各教科による振り返りの充実、家庭学習の定着に向け取り組んでいる。

指導主事を招聘した、国語、数学、英語の3教科の授業研究会では、教科における系統性等研修を深めることが出来た。



小中一貫教育合同授業研究会

(3) ICTの効果的な活用による、個別最適な学び、協働的な学び

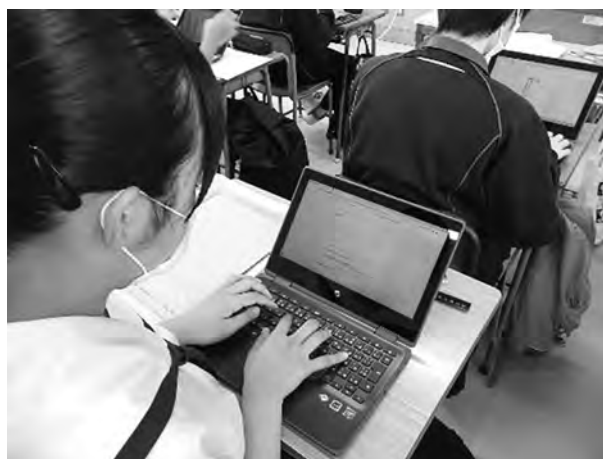
タブレットの日常的、効果的な活用

理科の授業では、授業開始5分間に前時の復習にタブレットを活用し毎時実施している。答えがすぐに表示され、解答も分かることで生徒も積極的に取り組んでいる。

また、授業の振り返りをタブレットで行うことで、教師側も授業改善へ繋げる事ができている。



授業開始5分間【前時の復習】



授業の振り返りを入力

(4) 相互授業参観により、教師同士が学び合う機会を設定

① 1人年1回以上の研究授業を行う

ア 国語・理科・英語・数学・社会の5教科に関しては、指導主事を招聘した公開授業及び授業研究会を教科毎に年1回実施する。

イ 音楽・美術・技術家庭・保健体育の技能教科に関しては、年1回いずれかの教科について指導主事を招聘した公開授業及び授業研究会を実施する。

② 授業改善に向けたリフレクション

4月の校内研修において、リフレクションシート、授業参観シートについて確認し、各教科の授業改善に生かす。

リフレクションを行う意義について、教師の授業に対する意識改革、授業に対する技術向上、授業に対する客観的な目、教員同士が授業の質を高め合うの4点を確認。

リフレクションシート 2022

令和4年度 真和志中学校 授業改善の取組み
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

リフレクション
実施日 【 令和 年 月 日 曜日 】
リフレクションを実施した教科 【 】
リフレクション参加者 【 】
リフレクションの観点

授業の中で	
1	実生活（社会）との関わりを示したか
2	生徒に考えさせる時間を確保したか
3	生徒が互いに意見を述べたり、考えを深め合う主体的に活動できる時間を確保したか
4	「問い」が生まれるような振り返りをしたか
5	生徒の成長を見取る場面は設定できたか
6	授業と連動した自学自習（家庭学習）に繋がったか

リフレクションを通しての振り返り

次週への取組み、実践事項(改善ポイントを箇条書き)

リフレクションシート

授業参観チェックシート 真和志中学校 2022(令和4年度)

氏名	学年・科	教科	参観日時	指導者	学習者	指導者	学習者
*参観者全員が授業参観シートに記入し、授業参観後、授業改善に向けて話し合ってください。							
1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9
10	10	10	10	10	10	10	10
11	11	11	11	11	11	11	11
12	12	12	12	12	12	12	12
13	13	13	13	13	13	13	13
14	14	14	14	14	14	14	14
15	15	15	15	15	15	15	15
16	16	16	16	16	16	16	16
17	17	17	17	17	17	17	17
18	18	18	18	18	18	18	18
19	19	19	19	19	19	19	19
20	20	20	20	20	20	20	20
21	21	21	21	21	21	21	21
22	22	22	22	22	22	22	22
23	23	23	23	23	23	23	23
24	24	24	24	24	24	24	24
25	25	25	25	25	25	25	25
26	26	26	26	26	26	26	26
27	27	27	27	27	27	27	27
28	28	28	28	28	28	28	28
29	29	29	29	29	29	29	29
30	30	30	30	30	30	30	30
31	31	31	31	31	31	31	31
32	32	32	32	32	32	32	32
33	33	33	33	33	33	33	33
34	34	34	34	34	34	34	34
35	35	35	35	35	35	35	35
36	36	36	36	36	36	36	36
37	37	37	37	37	37	37	37
38	38	38	38	38	38	38	38
39	39	39	39	39	39	39	39
40	40	40	40	40	40	40	40
41	41	41	41	41	41	41	41
42	42	42	42	42	42	42	42
43	43	43	43	43	43	43	43
44	44	44	44	44	44	44	44
45	45	45	45	45	45	45	45
46	46	46	46	46	46	46	46
47	47	47	47	47	47	47	47
48	48	48	48	48	48	48	48
49	49	49	49	49	49	49	49
50	50	50	50	50	50	50	50
51	51	51	51	51	51	51	51
52	52	52	52	52	52	52	52
53	53	53	53	53	53	53	53
54	54	54	54	54	54	54	54
55	55	55	55	55	55	55	55
56	56	56	56	56	56	56	56
57	57	57	57	57	57	57	57
58	58	58	58	58	58	58	58
59	59	59	59	59	59	59	59
60	60	60	60	60	60	60	60
61	61	61	61	61	61	61	61
62	62	62	62	62	62	62	62
63	63	63	63	63	63	63	63
64	64	64	64	64	64	64	64
65	65	65	65	65	65	65	65
66	66	66	66	66	66	66	66
67	67	67	67	67	67	67	67
68	68	68	68	68	68	68	68
69	69	69	69	69	69	69	69
70	70	70	70	70	70	70	70
71	71	71	71	71	71	71	71
72	72	72	72	72	72	72	72
73	73	73	73	73	73	73	73
74	74	74	74	74	74	74	74
75	75	75	75	75	75	75	75
76	76	76	76	76	76	76	76
77	77	77	77	77	77	77	77
78	78	78	78	78	78	78	78
79	79	79	79	79	79	79	79
80	80	80	80	80	80	80	80
81	81	81	81	81	81	81	81
82	82	82	82	82	82	82	82
83	83	83	83	83	83	83	83
84	84	84	84	84	84	84	84
85	85	85	85	85	85	85	85
86	86	86	86	86	86	86	86
87	87	87	87	87	87	87	87
88	88	88	88	88	88	88	88
89	89	89	89	89	89	89	89
90	90	90	90	90	90	90	90
91	91	91	91	91	91	91	91
92	92	92	92	92	92	92	92
93	93	93	93	93	93	93	93
94	94	94	94	94	94	94	94
95	95	95	95	95	95	95	95
96	96	96	96	96	96	96	96
97	97	97	97	97	97	97	97
98	98	98	98	98	98	98	98
99	99	99	99	99	99	99	99
100	100	100	100	100	100	100	100

授業参観シート

(5) 研修の効果的な実施 【方策3】

① 特定の教科における授業改善
道徳科授業研究会の実施

研修を2回に分け、第1回は理論研修、第2回は授業研究会を取り組む。

第1回 道徳科（講義、ワークショップ）

特定の教科における授業改善として、道徳科の授業づくりに県立総合教育センター指導主事を招聘し、ワークショップ型研修を行う。

- ・キャリアステージを意識し3つのグループに分け、教師間のOJTに繋げる。
- ・道徳の授業づくりでは、考えたことをどのように共有させるかなどタブレットの活用も協議し、全職員が授業づくりに携わり今後の道徳授業の活性化を図る。



道徳科のワークショップ: 3つグループに分かれ指導案を検討

第2回 道徳科の授業研究会



ジャムボードを活用した話し合い



互いに考えたことを共有

研究授業後の授業研究会では、成果、課題、改善策について協議が行われ、各学年の道徳科の授業改善にも結びついた。

指導主事からの指導・助言で、質的な授業改善を図る。



研究協議の様子

② 生徒相互の人間関係や集団づくりに向けた取り組み 【方策3】

全職員で、1学期前半における生徒の状況を評価・分析する場を設定。

QUについて、理論研修を受け、生徒への関わり方など生徒理解を深める研修を実施。

QU アンケート理論研修、ワークショップ



理論研修



学級、学年の分析

2 学力向上の実践 【方策2】

(1) 各教科で授業と連動した宿題（予習）のルーティン化

- ① 学習強化タイムの計画的実施（国・社・数・理・英）
- ② 真和志ドリルの実施（国・社・数・理・英）
- ③ 朝時間に読書・自学タイムの設定
- ④ じぶんログを活用し、自主的な計画をうながす
- ⑤ 夢・実現マンダラシートで、目標設定



マンダラシートの活用

(2) 定期考査攻略作戦

- ① 定期テスト前2週間
自学タイム：カフトを活用した取組
- ② 放課後のトライタイム（定着コース、充実コース）実施
- ③ テストの結果をヒストグラムで振り返る。



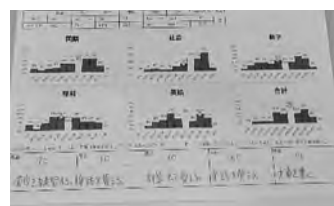
カフトの活用



放課後のトライタイム



定期テスト必勝大作戦



ヒストグラムの活用

(3) 学びに向かう集団づくり 【方策3】

学校行事の充実を通し、生徒の活躍を意図的・計画的に設け、自己肯定感、肯定的他者理解を育む。

- ① 生徒会を中心とした行事への取組
- ② 「何かに挑戦」を奨励：掲示物の工夫



学年を縦割り



特技の披露



V 成果と課題

1 成果

- (1) 令和4年度到達度調査で、那覇市の平均正答率との差が1年国語+0.5ポイント・数学+4.5ポイントと市平均を上回る結果が得られた。2年の国語・数学・英語、1年の英語は、プラスには転じなかったが大幅に差が縮まった。令和5年度全国学調では、県の平均正答率との差が国語+4ポイント、英語+1.8ポイントとプラスへ転じた。
- (2) 定期考査の取組は、生徒が学習へ主体的に取り組むきっかけとなり、また、職員の授業改善の視点、組織としての学推取組への意識改革を図ることができた。
- (3) コロナ禍での行事の工夫・実施は、生徒の学校・学級への所属感を高め、自信となり自己肯定感の向上に繋がった。

2 課題

- (1) 確かな学力の確実な育成に向け、今後も課題の改善に向けた効果的な研修の実施、学びの質を高める授業改善の実践等、組織的・継続的に取り組む必要がある。
- (2) 自学自習力の育成について、ICTの効果的な活用を図り取り組む必要がある。

「主体的に学習に取り組む生徒の育成」 ～組織的・継続的な取り組みを通して～

八重瀬町立具志頭中学校
校長 大 湾 悟

I はじめに

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が提唱されており、今後一層、児童生徒が主体的に課題解決に向かい、対話を通して深く学ぶ授業への転換が求められている。また、本県においても、令和2年3月に「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」が策定され、『自己肯定感の高まり』『学び・育ちの実感』『組織的な関わり』の3つの視点をもとに、本校でもこれまで、県の施策に沿った授業改善に全校体制組織的、継続的に取り組み、沖縄県学力到達度調査においてすべての教科で県平均を上回るなど、一定の成果を得ている。

そこで、「汗水節の心を行動に」のスローガンのもと自己肯定感の育成を育み、組織的継続的な取り組みを通して、学び・育ちの実感や主体的に学習する生徒の育成を目指して取り組んでいる本校の実践内容についてまとめた。

II 地域と本校の概要

本校は、戦後の学制改革で昭和23年に具志頭中等学校として創立開校され、昭和26年に具志頭村立具志頭中学校に校名を変更し、また、平成18年に旧具志頭村と東風平町が合併し、八重瀬町立具志頭中学校の校名となった。

本校教育スローガンとして「汗水節の心を行動に！」を掲げ、様々な教育場面で特色ある実践を継続している。沖縄を代表する教訓歌として歌い継がれている「汗水節」の作詩をした「仲本稔氏」は本校区仲座の出身で、本校初代PTA会長である。

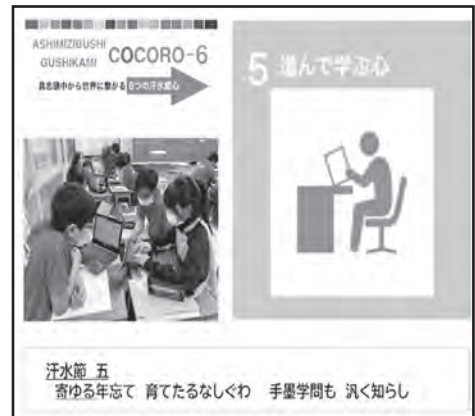
汗水節の歌詞に込められている六心（○勤労を尊ぶ心 ○勤儉貯蓄の心 ○夢と希望を育む心 ○健康と長寿の心 ○学問を奨励する心 ○社会奉仕の心）を基盤に、「学校は生徒にとって楽しい場所」という基本的な考え方のもと、生徒が、日々楽しく成長でき、地域から信頼される学校づくりに取り組んでいる。

昨年度より、3年ぶりに地域の方の協力をいただき、総合的な学習で学んだ琉舞、三線、汗水節の踊り、エイサー、シーヤーマーなど郷土の伝統文化を発表する「汗水祭」を開催している。

地域と共に歩む学校を基本に、生徒数360名、学級数は普通学級12学級、特別支援学級3学級の小規模学校である。全職員で知恵を出し合い心や力をあわせて、地域と共に具志頭中学校の特色を生かした教育活動を展開している。



【具志頭中学校】



【学ぶ：汗水節の心を行動に！】



【汗水節祭：地域と共に！】

Ⅲ 学力向上推進への校長の関わり（汗水節の心を行動に：○学問を奨励する心）

- 1 年度当初の職員会議で学校経営方針として、汗水節の心をスローガンに本校が学力向上について全校体制で組織的、継続的に取り組み、一定の成果あげていることを踏まえ、今後も継続的、組織的に全校体制で取り組むことを説明し、共有化を図った。また、新任教職員へ学力向上担当、校内研担当からこれまでの取組についてプレゼンテーションを行い、取組の徹底を図った。
- 2 教職員評価システムを効果的に活用し、授業観察とフィードバックを通して、授業改善を支援している。
- 3 週案だよりで職員の良さを褒め、教育のプロとしての意識を高める。
- 4 毎週月曜日の校内学力推進・校内研委員会に教頭と参加し、全国学力調査等の分析、取組の進捗状況の確認と対応策を検討し、企画委員会等を通して共通理解、共通実践に繋げている。

Ⅳ 学力向上推進の具体的な取組

1 校内学力向上推進の取組

(1) 学力向上推進に係る目標

- ① 総括目標：生徒の「確かな学力」の向上をめざす。
- ② 推進目標：全国学力・学習状況調査において、全国平均正答率を上回る。
沖縄県学力到達度調査において、県・地区の平均正答率を上回る。

(2) 基本方針

- ① 県学力向上推進施策の「3つの視点」（視点1「自己肯定感の高まり」視点2「学び・育ちの実感」視点3「組織的な関わり」）及び八重瀬町学力向上推進計画を踏まえ、生徒の実態や課題を明確にした計画を実践する。
- ② 各学年・各教科における生徒の実態を基に成果目標を設定し、その達成に向けた実効性のある学力向上の取組を実施する。
- ③ 校区内の小学校と連携を図り、生徒の実態把握（学力、学習規律、生活指導）に努める。
- ④ 校内研修と連動した授業改善を図る。

(3) 日常的な取組事項


- ① 学習規律の徹底・授業に対する心構えの育成及び学習環境を整える。
ア 3分前着席を徹底させる。
イ 『立腰、黙想』による挨拶で授業を開始する。
ウ ロッカーや机の中を整理整頓させる。
- ② 授業と連動した宿題

① 学習規律の徹底

○3分前着席で心を落ち着かせる

○チャイムが鳴ると同時に「立腰、黙想」
授業と休み時間のけじめをつける

○ロッカーや机の中を整理整頓する



【学習規律】

- ア 授業の学習内容と連動した宿題。
- イ 宿題の提出日を教科ごとに設定し、その提出日に合わせて宿題を与える。
提出日 月：社会 火：数学 水：理科 木：国語 金：英語

ウ 提出日の朝、各学級の学習委員が回収し、教科担任へ提出する。

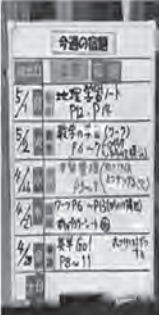
③ 家庭学習ノート

ア 土日を中心に自主学習し、月曜日の朝、提出する。

イ 学習委員が提出状況を担任へ報告し、ノートの点検は担任が行う。

ウ 1冊終了したら生徒自身で校長室へ提出する。

②授業と連動した宿題：掲示




○平日の宿題提出は、ホワイトボードに各教科担当で書き、生徒に見える化で示す。

月：社会 火：数学 水：理科 木：国語 金：英語

【宿題：授業と連動】

②授業と連動した宿題：学習委員チェック


- 学習委員による宿題チェックと提出
- 教科担当の先生と連携をとり、宿題の取組を呼びかける



【宿題：学習委員会チェック】

③ 家庭学習ノート

- 学習が終わったら、保護者からサインをもらう
- 月曜日の朝登校したら、学習委員がチェックし、学級担任に報告する
- 1冊終了ごとに校長先生に提出する



【自主学習：学習委員会チェック】

家庭学習帳1冊終了後、校長室をたずね、校長印をもらい、グラフにシールを張っていく。

家庭学習提出



【激励：校長による激励 写真4月】

④ 朝学習・放課後補習（全職員での取組）

ア 朝の自主活動の時間は読書または自主学習の時間とする。

イ 8：15から8：30までは朝学習の時間とし、次のとおりとする。

月：国語 火：読書（集会） 木：英語 金：自学の日

ウ 金曜日の朝学習は「自学の日」とし、授業内容をふり返って学習する課題を自分で計画し、土日の家庭学習に活かす。

④ 朝学習・放課後補習の充実

- 朝学習は国語(月)英語(木)
- 10分程度のプリントやワーク 毎朝の課題に取り組む
- 学習委員が、課題の配布・回収 朝から静かな雰囲気
で学習に取り組む

全職員で指導にあたる



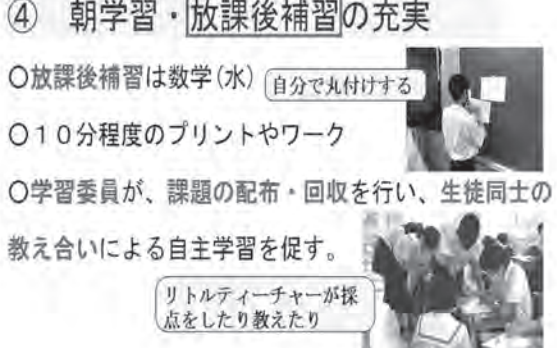
【朝学習：学習委員活動】

全職員で支援

④ 朝学習・放課後補習の充実

- 放課後補習は数学(水) 自分で丸付けする
- 10分程度のプリントやワーク
- 学習委員が、課題の配布・回収を行い、生徒同士の教え合いによる自主学習を促す。

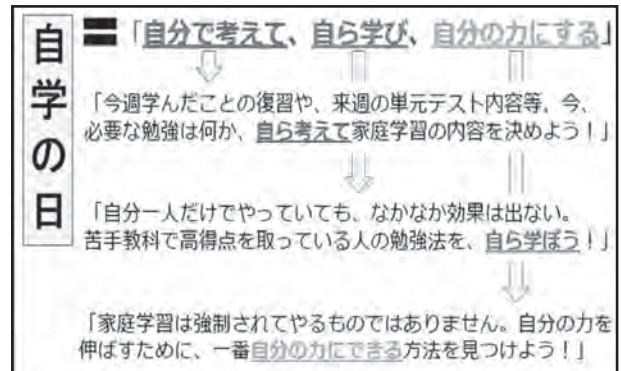
リトルティーチャーが採点をしたり教えたり



【放課後補習：教え合い】

エ 水曜日は放課後補習を行い、原則として数学のプリントに取り組み、生徒同士の教え合いによる自主学習を促す。

オ 朝学習・放課後補習は全職員体制で行う。



【自学の日：学習を振り返り自主学習を促す】

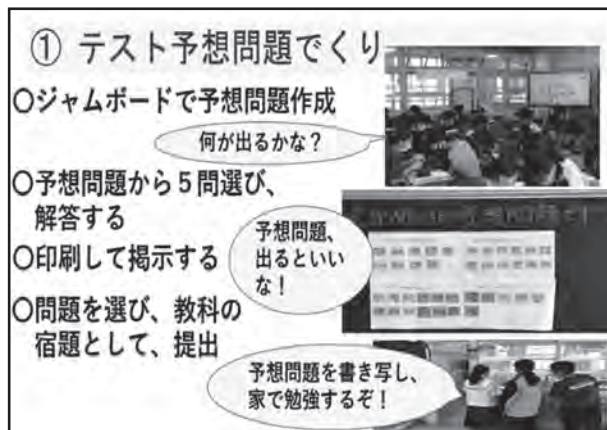
(5) 短期的な取組事項

① 学力向上強化月間

ア 4月は学習規律を整える。

イ 6月以後テスト予想問題づくり等を通して家庭学習の充実を図る。

ウ 1月～3月は、到達度、全国学力、入試に向けて朝学習や放課後補習の充実。



【予想問題作成：期末テスト】

毎月の学推計画 (例：6月)

6月学推取り組み (家庭学習・朝学習・放課後補習) 学推の取り組みについて 学力向上推進計画 10.10.10

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
科目	国	数	英	理	社	地	理	生	科	道徳	総合	英語	音楽	美術	体育	保健	家庭	職業	英語	数学	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語
授業	英	数	英	理	社	地	理	生	科	道徳	総合	英語	音楽	美術	体育	保健	家庭	職業	英語	数学	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	
家庭学習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
朝学習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
放課後補習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

【月学推計画：全職員で組織的な取組】

② 定期テスト1週間前の補習

ア 部活動停止期間を利用して、放課後15分の課題を行う。

イ 学年ごとに教科を決め、教科担当は課題を準備し、全職員体制で行う。

③ 夏休みの補習

ア 高校生による学習ボランティアを活用する。(キャリア教育の視点)

イ 夏休みの面談の待ち時間を利用し学習の遅れを取り戻す。

③ 夏休みの補習 (キャリア教育と連携)

- 向陽高校生によるボランティア
- 1学期の復習・夏休みの宿題の補習
- 高校生による中学校期の学習・実績等のアドバイス

向陽高校生が教えている様子 (向陽高校延べ38名、具中生延べ112名)

R5年度4年ぶりに開催(台風のため2日間短縮)

【高校との連携：向陽高校生ボランティア】

④ 三者面談中の補習

ア 面談の待ち時間を利用し基礎基本の定着を図る。

イ 12月の面談時に到達度、入試対策を行う。

2 校内研修における取組

研究主題「主体的に学習に取り組む生徒の育成」
～授業における ICT の活用を通して～

「令和の日本型学校教育」は、日本の学校教育のこれまでの成果を踏まえつつ、人工知能（AI）やビッグデータ、ロボティクス等の最先端技術の高度化による社会の劇的な変化、また、未曾有の新型コロナウイルス感染症の拡大など「予測困難な時代」に学習指導要領に示された、誰一人取り残すことのない持続可能な社会の創り手の育成をめざしており、そのツールとしての ICT を基盤としながら「日本型学校教育」を発展させる学校教育をねらいとしている。

そこで、本校の実態を踏まえ、一人1台端末を効果的に活用し、自分の学びをデータとして蓄積し振り返ることで、学び・育ちの実感や主体的に学習する生徒を育成できるであろうと考え、本主題を設定し、取り組んでいる。

(1) 分析を授業に活用（校内研修の充実）

① 各種調査の結果の分析と活用

- ・各種調査結果の分析を行い、全職員で共有し、教科で対策を立て授業改善に活かす。

② 記述式問題の実施と分析

- ・定期テストの中に記述式問題を取り入れ生徒の思考力・判断力・表現力の育成を図る。（定期テストのデータを保管する）

③ 授業における ICT の活用実践

- ・研究主題の共通理解を踏まえて、教科会と連動した一人一研究授業を計画する。
- ・指導案（プランシート）に ICT との関連を示し、全職員に配布する。
- ・職員は一人2授業以上参観し、感想をフィードバックする。

①校内研修 全国学力・学習状況調査結果分析

課題

・問題文中の問われている部分をおさえることができていない。何が問われているかをよく読み取っていない。・文や文章の中で、前半のうちに答えが出たと判断したら、後半部分までいまいに読む生徒が少ない。

対応策

・問題文中で問われている部分や解答条件となる部分に線を引く等して、条件に沿った解答ができるようにする。・解答文のひな形を使って答える練習をする。もしくは、模範解答で、答え方の例を示して解説する。

③一人一研究授業

Jamboardによるまとめ(理科)

スライド振り返りの入力(数学)

- 職員室の掲示板に公開授業を記入
- 記名式の授業参観シートに記入して、感想を授業者にフィードバックする。

令和5年度

全国学力調査の結果を踏まえた全教科での共通実践

- 問題文中で問われている部分に線を引いて、解答条件をおさえる。(国語科より)
- 文章や情報やデータの読み取り方を授業で取り入れてほしい。(数学科より)
- 文章の要点や概要を読み取るような授業の工夫をしてほしい。(英語科より)

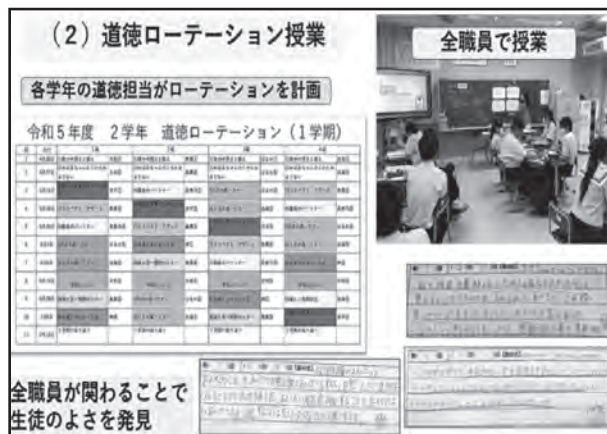
【課題の共有、共通実践】

(2) 道徳教育の推進（汗水節の心を行動に：○社会奉仕の心など心を育てる）

- ・道徳科において、道徳推進教師を中心に全職員で授業づくりに取り組み、授業改善の視点や課題を共有する。
- ・各学年でのローテーション授業や代表授業を行い、組織的に授業改善に取り組む。



【校内研：ICT活用報告】

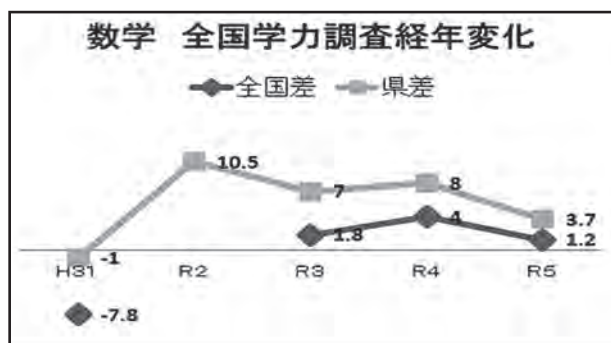
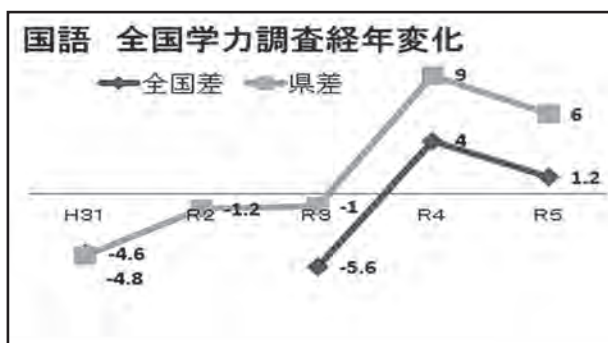


【道徳ローテーション授業計画】

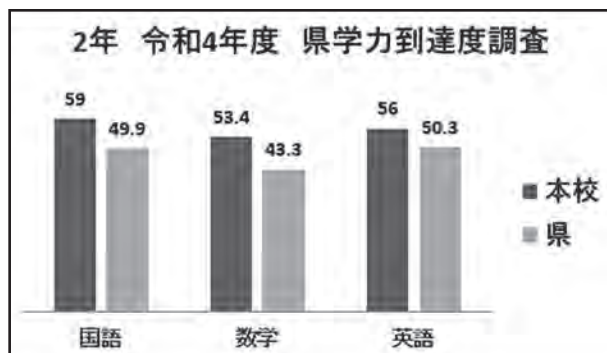
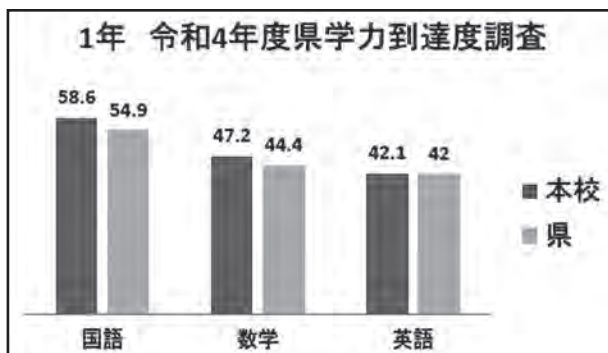
V 成果と課題

1 成果

- ① 学力向上推進の目標である全国学力・学習状況調査において、全国平均正答率を上回ることで、沖縄県学力到達度調査において、県・地区の平均正答率を上回ることで概ね達成できた。
- ② 学力向上推進の具体的取組を継続的、組織的に取り組むことにより、生徒が朝の自習や補習することの習慣化を構築することができた。
- ③ 生徒アンケートから「勉強で努力することは大切だと思いますか。」が95%以上、「自分には、よいところがあると思いますか。」が87%以上と肯定的である。



【全国学力調査本校と全国及び県との差の経年変化】



【令和4年度沖縄県学力到達度調査 本校・県】

2 課題

- ① 「学力向上推進プラン・プロジェクトⅡ」の更なる推進を図る。
- ② 授業におけるICTを活用し、個別最適な学び、協同的な学びをとおして、主体的対話的で深い学びに向けた授業改善を図る。

へき地・小規模校の特性を強みにした「確かな学び」の実践 ～「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育活動の推進を通して～

多良間村立多良間中学校
校長 垣花 正人

I はじめに

社会の急激な変化は、コロナ禍の中で、デジタル化、オンライン化等も加速化している。この3年余りは特に、学校においても「予測困難な時代」や「情報化の加速化の必要性」を実感させられた時期であったように感じる。令和3年1月には、中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して「～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」が示された。従来の知徳体を一体で育む学校教育に、これからの社会を見据えた、新たな学校教育の前進が求められている。

本校は、へき地・小規模校である。へき地校は、コミュニケーション力や社会性のマイナス面が強調されることも少なくなく、本校でもそうした課題が見られるのも事実である。しかし、むしろへき地校の特性を強みに変えられる面も多いことにも気づかされる。コロナ禍では、学校経営の様々な取組が制限や変更が余儀なくされ、へき地の特性を十分に活かす実践が充分になされたとは言いがたい。しかし、そのような状況でも工夫、改善を繰り返して、現在は全職員で校長の示す学校グランドデザインに向き合い、子どもたちに「育てたい資質能力」を共有しながら、取り組んでいる。

II 地域と本校の概要

多良間村は、宮古島と石垣島とのほぼ中間に位置し、面積19.75km²の楕円形をした多良間島と、約8km離れた面積2.153km²の水納島の2島からなる。全世帯数528世帯、人口は1,084人（R4.9月現在）で、村内には小学校1校中学校1校があり「島の中の学校」として島民に愛され、運動会や学習発表会などの子ども達の活躍する場は村民の楽しみとなっている。



また、村内には手つかずの自然も多く残っており2010年には「日本で最も美しい村連合」として本県から初めて登録され、島民の誇りとなり、郷土愛も一層高まっている。

本校は創立75周年目を迎え、現在、全校生徒40名の小規模校であるが「島の学校」として村民から慕われ期待されている学校である。島には高校が無いので、中学卒業後は、島外の高校に進学（ここ3年は沖縄本島内への進学が多く、親元を離れて寮やアパート生活である）するため、学校経営には「(15歳の)島立ち」を見据えた学校教育を推進し、自立と自律を目指しながら、小中連携、地域・行政と連携した取組の充実を図っている。



また、本校の教育課題である学力向上と自己肯定感を育みながら、粘り強く未来を切り開く生徒の育成をめざしている。

Ⅲ 学力向上推進への校長の関わり

- 1 校長の経営ビジョン(学校グランドデザイン)を全職員で共有し目指す方向をそろえる。

学校の運営にミドルリーダーの役割は重要である。そのため年度当初に研究主任(本校では学力向上推進も兼ねる)と教頭も同席させて校長の作成した学校グランドデザイン(案)について意見を交わした。その上で職員会議で全職員と共有した。事前に研究主任と話しあうことで、教頭や研究主任からより具体的な取り組みの説明もあり、全職員での意見交換が活発になった。また生徒の実態や改善策にも新たな意見が出される等、職員の主体性も見られた。



- 2 各主任への指導助言でミドルリーダーの育成を図る。

多くの学校で学力向上の取組は、学推担当者を中心に進める事が多く本校でもそうである。しかし小規模校である本校においては、研究主任や道徳主任も兼ねる等、ほとんどが複数の大きな分掌を兼ねている。そしてそれは強みにもなる。チームで取り組む(チームでやれる)ことが必然となり職員同士の協働体制が構築され、取組への主体的な意識も高くなると考える。

各担当者の能力の発揮には、校長とのビジョンをしっかりと共有することはもちろんであるが、校長が担当者自身のアイデアや自発性・積極性を認め、適宜進捗状況を把握しながら具体的な指導助言の場を定期的に設け、その際にも激励を心掛けるようにした。

また、各担当者の取組状況や成果は、他職員への周知と、資料等がだれでも共有できるよう見える化(掲示コーナーの場所確保や校内ネットワークの活用等)できるように、指導助言を行っている。

- 3 管理職の積極的なリーダーシップで校内研修の改善や、保護者への周知説明を図る。

学習指導要領に沿った適切な学習評価の在り方や、令和の日本型教育を目指した「個別最適な学習」「協働的な学び」の実現に向けた答申の説明等、文部科学省(国)の動向や本県、そして地区の通知等について、会議等を活用して職員に伝達し共有を心掛けている。

また毎年度当初に校内研修に各教科等の「見方、考え方」や、本校の「学習評価基準及び評価の仕方や評定への総括の仕方」について研修(校長自らが講師として)を実施し、全職員で共通理解を図り、保護者へは学校評価及び学習評価の説明会を設け(1学期始め)て現在の学習評価についても周知を図る。

また教頭においては、行政経験時に GIGA スクール構想担当であった立場を活かして、個別最適な学びや協働的な学びに ICT を活用した研修や業務の効率化を図るネットワークの活用等について研修を計画し進めている。

- 4 学校グランドデザインの実現に向けた教育課程編成を行う。

確かな学びを目指し特に「どのように学ぶか」に焦点を当て、本校の強みを活かした取組を教育課程編成を工夫する。これは校長としてのやりがいでもある。へき地・小規模校を強みに変え、生徒が主体的で学ぶ楽しさや魅力ある学校に向けて、地域の教育資源や小中連携、そして行政や関係機関と連携した「学びの場」を計画し実践する。あわせて子ども達の実態や地域の実態をしっかり把握することも重要である。さらに生徒・職員の負担にならないよう設定し、「やってみよう」意識を持たせることに留意する。

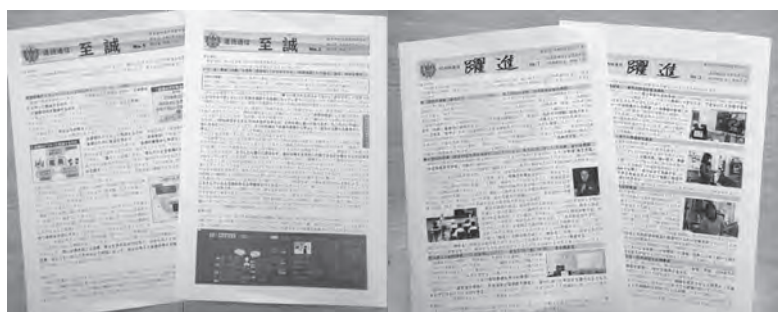
2 ミドルリーダーを中心に校内研修の充実を図る。

本校は、校内研究テーマを「主体的に考え、見通しを持って学びに向かう生徒の育成」としサブテーマを「～学びの価値を実感し、自己の成長を自覚できる教育活動の工夫を通して～」に掲げて、協働探求型の校内研究を進めている。

(1) 校内研究の方針について教育計画の一部を下記に示す。

3 校内研修の方針	
(1) 研修計画は、「授業改善研修」と「資質向上研修」に分けて実施する。	
(2) 「研究授業」という名称を「提案授業」と「提供授業」に改める。「提案授業」は、全職員が共通の授業イメージをもち、年度はじめにモデルとなる授業公開を目的に行う。「提供授業」は、授業者だけでなく協働探究型で行い、とくに「参観者が学ぶ場」とする。	
(3) 授業観察は、全教師が互いの授業を見合い、同僚性（つながり）を構築する機会とする。	
(4) 提案・提供授業の授業者は、バランス（学年、経験年数等）を考慮し決定する。	
(5) 提案・提供授業は、教科（道徳含む）、特活、SST（ソーシャルスキルトレーニング）のどちらでも可とする。	
(6) 指導主事や外部講師を招聘し、飛び込み（模擬）授業や理論研などの校内研修会を行う。	
(7) 各教師が参加した研修会等の学びを共有する場（研修伝達会議）を学期ごとに設ける。	
4 研究の視点（生徒を見取る視点）	
授業改善の視点を「生徒の学びの姿（見取り）」と本校が育成を目指す資質・能力である「見通す力」「気づき伝える力」「関わる力」「挑戦しやり抜く力」に集約し、研究主題に迫る。	
見取りの視点	生徒の姿の具体例（学びの実感、自己の成長を自覚している姿）
① 見通す力	<ul style="list-style-type: none"> ・「こんな順序でやるんだな」（順序の見通し） ・「答えは〇〇かもしれない」（解決の見通し） ・「あのやり方でやればできそうだな」（方法の見通し） ・「今日はできるかもしれない」（解決と可能性の見通し） ・「自分はどうかだろうか」（自己関与の見通し）
② 気づき伝える力	<ul style="list-style-type: none"> ・「前にやったことがある」「前もそうだった」と既習や経験と結びつけている。 ・「学んだことが役に立った」「学んでよかった」と学ぶ意欲や価値に気づいている。 ・「学習が生活に生かされている」と学んだことと生活のつながりに気づいている。 ・「そういえば～だった。だから、～なのか」と思い出したり再現したりしている。
③ 関わる力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えをもち、自分で自分自身を見つめたり、見つめ直したりしている。 ・「そういう考えもあるな」「それは思いつかなかったな」と友達との対話を通して、自分の考えを増やしている。 ・「自分も考えとちょっと似ているな」「答えは同じだけど、考え方が違うな」と友達と自分の考えを比較し、自分とは違う考え方から学ぼうとしている。 ・「考え直したら〇〇だった」「どうして自分が〇〇だと思ったかがはっきりした」と自分と向き合って考えることで、自分の考えを確かめている。 ・「今までの考えより、〇〇の方がいいな」「これからは〇〇していきたい」と自分の成長を感じ、自分の考えをよりよくできている。 ・「〇〇についてもっと知りたい」「今の自分には〇〇を考えることが必要だ」と自分の考えたい新たな課題や目標を見つけている。
④ 挑戦しやり抜く力	<ul style="list-style-type: none"> ・「初めは～だと思っていたけど、今は…」とつまずきや迷いから新たな理解や価値を見いだしている。 ・「もっと続けよう」「またやりたい」と意欲や自信の高まりを感じている。 ・「これからは～していこう」とこれからの自分や自分の生活に生かそうとする意欲を高めている。 ・「もっとできるようになれそうだな」と自分のよさや可能性を感じている。

(2) 研究の進捗状況や成果等について、定期的に研究主任や個別に各主任との話し合いを

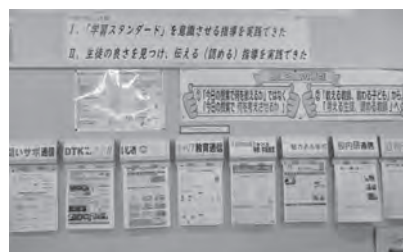


持ち、指導助言を行っている。その後、研究主任が全職員へ校内研究通信「躍進」を発刊している。今年度からは新たに道徳通信として「至誠」も発刊し、全職員で共有している。

3 管理職の積極的な関わりとリーダーシップをとる

(1) 管理職自らがリーダーシップを取り職員へのOJTを示すことは大切である。年度当初

に学習評価について「学校評価基準や評価と評定の在り方」について校長が説明し、全職員の共通理解のもと、子ども達の適切な学びの「見取り」について確認した。また教頭は、自身の得意とするICT分野を活かして、「ICTを活用した授業づくりの工夫」について事例の紹介や、実際の演習会を行った。さらに業務の改善をめざし校内ネットワークの構築にMicrosoft Teamsを活用した研修を開催し、現在は会議のやり取りや予定管理、アンケート調査等にも活用されており、業務改善、ペーパーレス化にも役立っている。



(2) 自らの指導力向上をめざし、教師自身も毎週末に授業の振り返りを行い自己評価（週案に記入し管理者で適宜助言を行う）し、管理職とのフィードバックができるようにしている。

(3) 小規模校では複数の校務分掌を抱えている。しかし、担当者だけ取り組む事ではない。当然「組織（チーム）」として取り組む事が重要且つ効果的であり、そこには全職員が主体的に参画する意識が必要である。そのため、出張や研修会参加後には、学

校内で他職員への伝達研修（長期休業中）を位置づけている。自身の学びをアウトプットすることで確かな学びとなり、職員への共有もできると考える。併せて NITS 校内研修シリーズ等の活用も行った。



4 へき地・小規模校を強みにした教育課程編成の工夫

本校はへき地・小規模校である。地域や行政の協力や理解も得られていて、生徒一人一人へのていねいな支援や、職員間で情報共有がしやすい。こうした強みを十分に活かした、授業改善や特色ある教育課程編成を工夫しながら目指す学校づくりを行うことは重要であると考える。

(1) 産官学の連携した「プロジェクトT」を活用しキャリア教育の充実を目指す。

本校では、多良間村教育委員会と関係企業が連携して「多良間村型キャリア教育～プロジェクトT」を、小・中学校と取り組んできた。中学校では「職場体験」「子ども議会」「職業人講話」など様々な取組で子ども達のキャリア教育を展開している。ただこれまでの実践が、学校との計画調整に生徒や職員への負担感も見られた。そのため学校が育成すべき



資質・能力を明確に示し、学校が主体的に計画立案し、子どもたちにとって必要とする学びに近づけたいと考えている。現在は、学校の主体的な計画のもと進められるように改善されてきている。

(2) 「島立」を見据えた教育活動の推進

赴任してすぐに3学年の修学旅行を2学年で実施するよう動いた。今年度から3学年に完全移行し、授業時数の確実な確保ができて、そのぶん総合的な学習の時間に新たに「島立学習」を設けた。子ども達は卒業と同時に島外の高校へと進学するが、改めて多良間島の良さや地域の課題を主体的に捉え、島の魅力を発信できる生徒であって欲しい、環境の変化や課題にもあきらめず立ち向かう生徒を育てたい、と考えている。また総合的な学習の進め方として、「知る」「触れる」「深める」「発信する」をキーワードに示し、職員と生徒が主体的に考えた取組を企画させ実践している。

①「多良間サイコー（再考）プロジェクト～地域探求～」：郷土学習

②「映像ワークショップ」：表現力育成

③金融教育など

(3) 週時程に「ふしゃぬふタイム（放課後の補習）」を位置づけ取り組んできたが、まだ十分な効果は見られない。そのため、全職員で生徒の学習定着の実態について再度話し合い、より効果的な支援方法を模索しているところである。「個別最適な学び」や「対話的な学び」を意識した工夫改善をしながら。現在は、iPadの活用と教師の作成したプリント学習の併用で行っている。また各種検定への支援も本時間を活用する等している。

(4) 本校に赴任後、多良間村社会教育委員も委嘱された。学校教育と社会教育と連携することで、生涯学習の視点が学校経営に活かせることを感じた。そのため、できるだけ地域の社会教育関連の活動（講座等）や村行事にも可能な限り参加協力をすると共に、地域学習の一環として、総合的な学習の時間を「学び」の場として活用した。

V 成果と課題

1 成果

- (1) 全職員の学校グランドデザインの共有と、目指す方向性を確認し、定期的に振り返りを行うことで、職員の意識の向上（指導力向上・授業改善など）が見られた。
- (2) 各主任と定期的な話し合い（進捗状況や成果）を持つことで、組織の効率化が図られてきている。
- (3) 各種アンケート調査の結果等から、教師が授業や諸活動の中で生徒一人一人を「認めて褒める」の実践を継続していることで自己肯定感の高まりが見られる。また生徒の主体的な活動や、課題についても粘り強く取り組む姿が見えつつある。
- (4) 国語や英語においては、各種学力調査で向上が見られ（県平均を上回る）、特に英語に関しては、全国平均を上回り、各種英語コンテスト（パフォーマンスコンテスト等）の結果や検定合格率の上昇も見られた。

2 課題

- (1) 個々の教師の授業力向上は特に小規模校では子ども達に大きく影響する。各教科担当教諭の授業改善に向けた具体的研修内容の工夫改善。また理数科目の学力向上に向けた全職員での支援体制の工夫改善。
- (2) 2、3年で異動する職員間の成果や課題策の確実な引き継ぎ。特に各教科等の指導計画や資料（単元プランシートや実践例）整理と保管の在り方。
- (3) ウィズコロナで多くの地域行事が開催されつつある中、学校働き方改革推進において地域とのバランスのとれた連携。

主体的・対話的で深い学びを実現する生徒の育成 ～「教え合い・学び合い」活動と海洋教育を通して～

竹富町立大原中学校
校長 石原昌英

I はじめに

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となってきた。このような時代の中で様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題解決していくことなどができるようにすることが求められている。沖縄県においては、学力向上推進施策「学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ」において、「3つの視点」から「5つの方策」を通して、学びの質を高める授業改善と学習指導要領の理念実現に向けた学校改善を推進していくとし、県全体で方向性を一つにした学力向上の取組を推進していくこととしている。

本校の生徒は、卒業すると同時に親元を離れ自立しなければならない。そのため中学校卒業までに基礎的・基本的な学習を定着させることや基本的な生活習慣・学習習慣を身に付けること、社会的な行動を取ることができるようにするなどの「生きる力」を身につけさせることが必要となる。本校生徒の特徴として、幼少期からメンバーが変わらないため、男女共に気心が知れた仲である。そこで、生徒同士の人間関係を活かしながら単元や題材の中に「教え合い・学び合い」を取り入れることで、生徒自身が主体的に学び、他者と協働しながら学びを深めていく過程を通して学習意欲が向上するだけでなく、対話力の育成にもなると考え、テーマを設定した。なお、この取組は令和4年度の教育活動を中心にまとめたものである。

II 地域と本校の概要

本校区は西表島の東部に位置し、北端の高那から南端にある豊原集落まで20kmの広範囲にわたる。集落は、美原・古見・大富・大原・豊原の5つから成りたっている。その内、古見、大原を除く3集落は、戦後、琉球政府の計画移民で入植し、開拓した集落である。

本校では、地域的特性を活かし伝統的三大行事として仲間川筏下り、西表島横断、古見岳登山を3年サイクルで実施し、生徒をはじめ教職員、保護者、地域の方々、環境省等の専門職員が共に参加する体験的な探究学習を行っている。令和4年度は「古見岳登山」、令和5年度は「仲間川筏下り」を実施した。竹富町が推奨している海洋教育を令和4年度は教育課程特例校として取り組んだ。

「結いぬ海科」と名付けた総合的な学習の時間を中心に行い、各教科・領域の中でも年間指導計画に位置づけた。実生活から課題を見つけ、解決に向けた学習計画を立て、必要な情報を収集、処理、選択し、学習成果をまとめた後、表現（情報発信）する活動内容である。

「見つめよう郷土、伝えよう文化、考えよう未来」をテーマに、様々な体験活動を通して知育、徳育、体育など「生きる力」を育んでいる。



【令和4年度 古見岳登山】



【令和5年度 仲間川筏下り】

Ⅲ 学力向上推進への校長の関わり

竹富町学力向上推進委員会では学力向上推進計画「ばいぬ島っ子プラン」を策定し、①学びの質を高める「授業改善・学校改善」の推進、②幼小中連携・一貫教育の推進及び教育課程の体系化、③地域資源の活用・社会教育の充実を重点事項として、幼児児童生徒一人一人の可能性を伸ばし、自律と自立により未来を切り拓く資質・能力の育成を推進していく方針を示している。この方針を受け、学力向上推進への校長の関わりについて以下の取組を紹介する。

1 社会に開かれた教育課程の編成

学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自分の能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決を主体的に生かしていく学力を育成する社会に開かれた教育課程を編成する。

2 育成する資質・能力の明確化（地域と学校が認識を共有する）

地域と対話し、地域で育まれた文化や子ども達の姿を捉えながら、地域とともにある学校として何を大事にしていくかという視点を定め、学校教育目標や育成する資質・能力を学校デザインシートに示し、家庭や地域の意識や取組の方向性を共有する。

3 学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントの充実

学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し教育活動の質を上げていく。

4 教科間の相互連携

- (1) 教職員間のつながり（生徒理解の深まり、教材研究の深まり、学校経営の協働実践）
- (2) 子ども達のつながり（教え合い・学び合い・助け合い＝協働）
- (3) 保護者・地域社会との連携（豊かな学び＝人・自然・文化・社会・キャリア等）

5 キャリア教育の視点を踏まえた校種間の連携

- (1) 授業や行事での交流等を近隣小学校と計画的に行う。（3校校長会で確認）
- (2) 「キャリアパスポート」を活用し、小中高の12年間の成長過程をつなぐ。

6 校長講話及び外部講師による講話

校長講話では、時節に応じた話題や学校生活に身近な題材を取り上げ、目的意識の高揚や将来の夢や希望をもつ事の大切さについて考える機会を設定した。また、外部講師を招聘しなりたい自分になるためには何をすべきか、何のために学ぶのかという視点から講話を開催した（元県教育長の諸見里明氏、県内唯一の弁理士：西平守秀氏等）



【変化の激しい今「なぜ学ぶのか」
元県教育長：諸見里明氏】



【「特技を生かす学びのすすめ」
弁理士：西平守秀氏】



【「虫の目・鳥の目・魚の目」
スマイル朝会：校長講話】

7 学校経営の重点に「確かな学力の向上」と「海洋教育の推進」を示す

- (1) 学校が率先して家庭や地域と協働し、子ども達の「確かな学力の向上」に取り組む。
- (2) 地域資源や地域人材を活用し「海洋教育の充実」に取り組む。

Ⅳ 学力向上推進の具体的な取組

1 目標

生きる力を育むことを目指し、授業改善を通して確かな学力を身につけさせ、未来を切り拓く資質・能力の育成を図る。

2 基本方針

- (1) 『学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ』、『「問い」が生まれる授業サポートガイド』、『令和4年度版ばいぬ島っ子プラン』等を踏まえて推進する。
- (2) 学校デザインシート、フォーカスシートを作成・活用する。
- (3) 授業力の向上を図るために、全職員1回ずつ研究授業を行う。

3 実践

- (1) 3つの視点(視点1：自己肯定感を高める、視点2：学び・育ちの実感、視点3：組織的な関わり)からの自校課題

【視点1】自分の考えを相手に伝える力を育むための対話的な活動の工夫

【視点2】課題解決に向けて主体的に取り組むための「問い」をもたせる授業づくり

【視点3】校内研における各種調査やアンケートを活かしたPDCAサイクルの実施

- (2) 取組内容

① 質的授業改善(方策1 日常化する)

ア 自己肯定感を高める取組

ア) 一人一人のよい点や成長した点を認め、褒める取組を日常的に意識して行う。

イ) 交流場面や自己の振り返りの場の設定から主体的に学ぶ態度の育成を図る。

イ 単元計画を活用した授業改善

ア) 1単元を見通して身につけたい力を意識しながら単元計画を作成し、「めあて⇄まとめ」の整合性と視点を持たせた振り返りの完結型授業を行う。

② 組織的共通実践(方策2 そろえる)

ア 「教え合い・学び合い」の活動の設定

ア) 単元や題材の中に「教え合い・学び合い」の活動を設定する。

イ 振り返りの視点(習得・活用探求)の設定

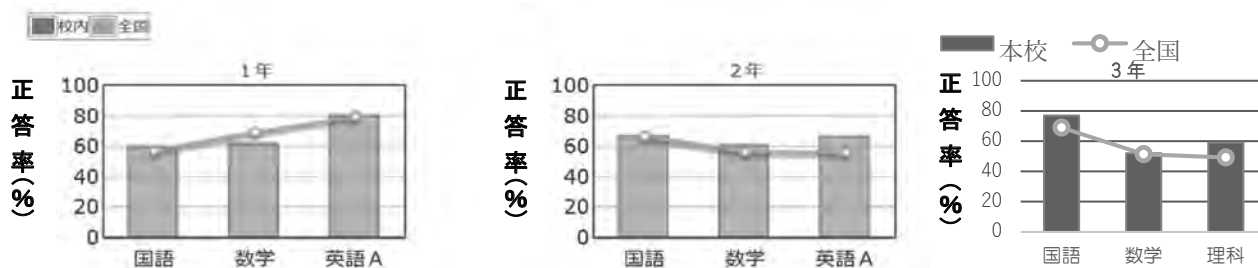
ア) 授業の振り返りに視点(習得と活用・探究)をもたせ、既習漢字を使って書かせる。

ウ 各種調査結果における課題分析と改善

ア) 標準学力調査・全国学力学習状況調査の結果(平均正答率)



【「教え合い・学び合い」活動】



- イ) 分析

正答率は、1年数学を除いては3教科共に全国平均を上回ったが、目標値を下回っている問題の共通点として、次の3点があげられる。

●自分の考えを明確に書く ●理由を説明する ●要点(式)を読み取る

- ウ) 取組

- ・朝学習や補習等の時間を利用して、前の学年の復習を行う。
- ・単元計画の中で「教え合い・学び合い」の活動を設定し、活動の過程で自分の考えを説明し、まとめ、既習事項を活用して表現することを意識させる。
- ・異年齢交流の場(一斉道徳・学級活動・生徒会活動など)を計画的に設定する。

③ 発達の支援（方策3 支える）

ア 学級活動と生徒会活動を連動させた自治活動の充実

ア) 委員会サミット・・毎月の活動の振り返り・来月の確認

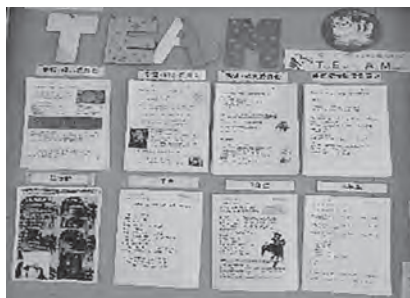
イ) 中央委員会・・行事における活動の確認・呼びかけ、『TEAM 新聞』の発行

イ デイリーライフを活用した教育相談の充実

キャリアパスポートの一環として生活ノート（『デイリーライフ』）を活用し、見通す力の育成と成長の自覚を促している。

ウ 教育相談・教科面談による個に寄り添う発達支援と学習支援

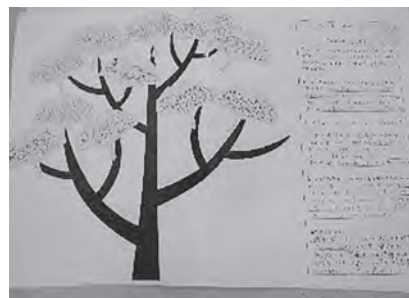
年に3回程度、教育相談・教科面談を設け、生徒一人一人の学習や生活面の改善点を助言している。担任・副担任・全教科担任で支援を行っている。



【生徒会各専門委員会の掲示】



【デイリーライフで学習計画】



【承認の木で承認活動】

エ 承認活動の実施

自己肯定感、自己有用感を高めるために、承認活動として生徒同士にプラスの言葉かけ、教員から生徒への前向きな言葉かけを実施

オ その他の取組

ア) 朝学習の実施

火曜日の朝時間（15分間）にGIGA 端末などを活用して、自学学習に取り組んでいる。さらに月1回は学年の教科係が作成した問題に取り組んでいる。

イ) 補習指導の実施

木曜日の放課後（25分間）に実施。『数学強化期間』として、スモールステップ方式の学習指導で全生徒対象、全職員体制で実施

ウ) 体力の向上と部活動の充実

- ・体力、技能の向上を図るため、全生徒が部活動に所属し、仲間と協力し、活動している。また、陸上や駅伝の練習を全校生徒で取り組んでいる。
- ・休養日（ノ一部活デー）の設定→毎週木曜日・土日の1日
- ・三大多行事の前に体力向上週間を設定し、基礎体力の向上を図る。

エ) 食育活動

- ・栽培活動：校内で季節毎の野菜を栽培し、食べ物の大切さを育む。
- ・栄養教諭による食育講話：食育日課を設定し食事と健康に関する講話の実施
- ・お弁当の日：島立ち後の生活に向け自分で献立を考え食材準備、調理、盛り付け等、お弁当づくりを通し食育を推進する。

④ 学校組織マネジメント（方策4 見通す）

ア 校内研究体制の充実

ア) 研究主題と研究体制の確立

研究主題： 主体的・対話的で深い学びを実現する指導の工夫
～「教え合い・学び合い」活動と海洋教育を通して～

イ) 研究授業（指導案検討会）授業研究会における参観の視点の統一

研究授業及び授業研究会においては、子どもの学びの姿に視点を置き、教科横断的な観点から本校の授業改善に向けた取組について協議を行う。

ウ) 授業改善に向けた互見授業や理論研修の充実

互見授業：互いの授業を参観し、授業力の向上と授業づくり・授業改善の参考



【授業研究会】



【互見授業】



【指導案検討会】

イ 学校評価やフォーカスシートを活用した PDCA サイクルを意識した授業改善

ア) 実態把握

- ・自己肯定感・自己有用感は昨年より数値が高くなっているが継続して高める必要がある。
- ・自ら計画を立てて家庭学習に取り組む態度が弱い。

イ) 改善・取組

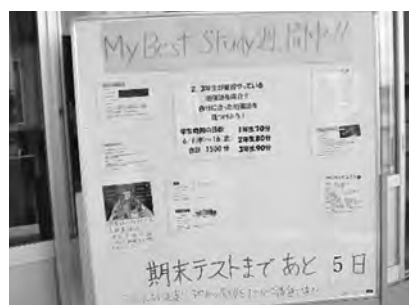
- ・1分間スピーチ（自己肯定感を高める・自己表現力の向上）
- ・承認旬間（自己肯定感を高める・信頼関係の構築）
- ・家庭学習の習慣化（MBS 週間：家庭学習強化週間）



【1分間スピーチ】



【承認旬間（キラビト発見）】



【MBS 週間（自学自習力）】

⑤ 学校連携・地域連携（方策5 つなぐ）

ア ボランティア活動や地域行事を通じた体験活動の充実

- ア) 古見岳登山・・・三人行事の1つ。教科横断的な学習で生きる力を育む。
- イ) キビ植えキビ刈り・・・保護者や地域の協力を得て実施。派遣費や検定の補助費
- ウ) ボランティア清掃・・・生徒会を中心に地域清掃やビーチクリーンを実施
- エ) 家庭・地域へ発信・・・各種たより、学校 HP、正門横の掲示板を活用

V 成果と課題

1 成果

(1) 視点1【自己肯定感を高める】

- ① 承認旬間を設定し、生徒同士で良いところを見つけてメッセージを送る。また、教職員や保護者からもメッセージをもらい、積極的に賞賛する場面が見られた。
- ② 学校 HP をはじめ生徒会新聞、掲示物等で生徒の活躍にスポットをあて情報発信し、様々な場面で承認活動を行っている様子が見られた。

(2) 視点2【学び・育ちの実感】

- ① 話し合い活動や問いをもたせる授業づくりを通して、自分の考えを広げ説明することのできる生徒が増えてきた。今年度はさらに海洋教育と連携することで、自分の考えを深め広げる場の設定ができた。
- (3) 視点3【組織的な関わり】
- ① 学校評価やフォーカスシートを活用しPDCAサイクルを意識した授業改善を行うことができた。

【令和4年度 全国学力・学習状況調査結果 平均正答率】(%)

教科	国語	数学	理科
本校	77.0	52.0	59.0
県	64.0	42.0	44.0
全国	69.0	51.4	49.3

【令和4年度 竹富町標準学力調査結果 平均正答率】(%)

教科	国語		数学		英語	
	1年	2年	1年	2年	1年	2年
本校	59.8	66.6	61.6	60.6	80.4	66.2
町	55.9	65.8	64.6	52.8	77.4	56.3
全国	57.3	66.7	69.2	56.6	79.7	55.9



【雨の大運動会・全員エイサー】



【プチ大原中陸上競技大会】

2 課題

(1) 視点1【自己肯定感を高める】

- ① 「自己肯定感を高める取組」を行ってきたが、昨年度よりは数値が上がっているものの、十分とは言えないため、承認活動をはじめとする一人一人の良い点を認め・褒める取組を継続して行っていく必要がある。

(2) 視点2【学び・育ちの実感】

- ② 家庭学習の取組は自身の学力向上のために必要だと自覚している一方で、自ら計画を立てて家庭学習に取り組むことに課題がある。

(3) 視点3【組織的な関わり】

- ③ 授業研究会を重ね授業改善に取り組んできたが、振り返りの時間を含めたタイムマネジメントの工夫が必要である。